CLANNAD

－クラナド－

ビジュアルファンブック




CLANNAD
-クラナド-
ビジュアルファンブック

CLANNAD VISUAL FAN BOOK



CONTENTS

ストーリー紹介

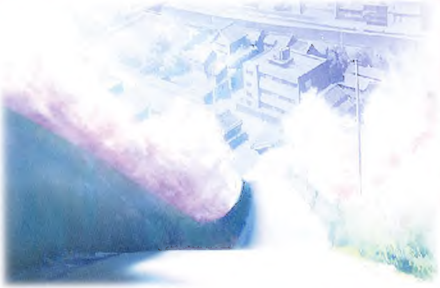






俺たちは登り始める。
長い、長い坂道を。





CLANNAD
-クラナド-
Prologue


NAGISA FURUKAWA
It's the tale of winter….
古河 渚



～この長い坂道を、一緒に～

NAGISA FURUKAWA

古河 渚

朋也の同級生。長期に渡って休学していたため、実は朋也よりもひとつ年上。基本的に前向きな性格だが、いまいち押しが弱いため、なにかと周囲の状況に流され気味。朋也と出会い背中を押されたことで、演劇部設立という夢に向かって歩き始めることに。

DATA

誕生日：12月24日
血液型：A型
身　長：155cm／体重：43kg
BWH：80・55・81



「もし、できるなら…
演劇部をまた、作りたいです」

Face Pattern



Fashion & Pose



次の楽しいこと、次のうれしいこと

長期療養の末に復学した渚は、前に進むことができずにいた。クラスメートは卒業し、恩師だった先生は退職している。なにもかも変わらずにはいられない――そんな彼女の呟きを聞いた朋也は、不器用にその背中を押す。だったら次を見つければいい、と。初めて会ったふたりは、学校へと続く長い坂道を共に登っていく。

その日から、朋也は少しずつ渚を気にかけるようになる。変わりゆく事への不安、演劇部設立の夢、そしてひたむきな性格。演劇部の部員集めに付き合ううち、徐々に渚のことを知った朋也は、いつしか彼女といる時間に安らぎを感じ始める。そしてなにより、支えられているのは自分のほうであることを実感していた。

ところがある日、朋也たちは生徒会の注意を受け、部員集めを断念せざるを得ない状況に。渚の中でゆっくりと積み上げてきたものが、音を立てて崩れ去ってゆく。そんな渚を支えたいと、心から願う朋也。涙を流す渚に、彼はその想いを告白する。寂しげな夕日に照らされながら、ふたりは恋人同士になった……。











Scene 01

次の楽しいこと、次のうれしいこと。こんな私でも見つけられるでしょうか。ここから前に、進んでいけるでしょうか……。

「でも、なにもかも…変わらずにはいられないです」

Scene 02

私、やっぱりバカです。無神経なこと言って、岡崎さんのこと傷つけてしまいました……。本当に、ごめんなさい……。

その場を去ろうと振り返る寸前、泣いているのがわかった。震える頬が見て取れた。





少しの間。
振り返ることもなく、頷くこともなく……
ただ、小さな声が聞こえてきた。
よろしくお願いします…と。

Scene 03

わたしも岡崎さんのことが好きです。わたしだって、岡崎さんのためにがんばります。だから、その……よろしくお願いします……。



Scene 04

お父さんとお母さんと朋也くん。みんな揃ったピクニックはとても楽しいです。それに、わ、忘れられない想い出になりそうです……。

「勝負の続きですか？」
「勝負もなにも関係ねぇよ…」



「俺たちは、夢を諦めたんじゃねえっ」

「自分たちの夢をおまえの夢にしたんだっ！」





Scene 05

たくさんの人たちに支えられて、わたしは今、この場所に立つことができました。もしわたしの夢が、大切な人たちの夢になるのなら、わたしは最後までやり遂げたいと思います。たくさんの、感謝の気持ちを込めて。

夢の行方

朋也と渚の努力により、なんとか活動を認め[illegible]演劇部。そして渚は創立者祭で演劇を発表する[illegible]め、朋也と共に練習と研究を進めるこ[illegible]しかし創立者祭の前日、彼女は両親が隠[illegible]秋生がかつて劇[illegible]、そして身体が弱かった渚の側にいるため、劇団を辞めたことを。

自分の夢を叶えるために両親の夢を犠牲にしている――渚はこらえきれず、当日の舞台の上で泣き出してしまう。そんな彼女に向かって秋生は叫ぶ。自分たちは夢を諦めたのではなく、娘の夢を自分たちの夢にしたのだと。親とは、家族とはそういうものなのだと。顔を上げた渚は静かに語り出す。冬の日の幻想物語を……。

それからしばらく時間が経ち、渚の病は悪化する。学校へ行けないまま夏が過ぎ、秋が終わり、やがて冬が来ても状況は変わらなかった。そして春。単位不足で留年が決まった渚を置いて、朋也は卒業しなければならない。しかし、もう1年頑張るという渚の笑顔に背中を押され、朋也は新たな道へと進んでいくのだった。



長い長い、坂道の果てに

厳しいながらもやり甲斐のある仕事を手に入れた朋也。彼は小さなアパートを借り、渚とふたりきりで暮らし始める。その後、秋生と早苗の許しを得て結婚。トラブル続きだった仕事にも慣れ、穏やかに時は流れていく。そして季節は再び春。無事に卒業を迎えた渚のために、かつての仲間たちが学校に集う。懐かしい友達に囲まれ、今度は笑顔で桜の中を歩く朋也と渚。1年前、夢見た光景が現実のものとなり、彼女の長い長い学校生活は、終わりを告げた。

やがて、お腹の中に新たな命を宿す渚。しかし、ただでさえ身体の弱い渚にとって、出産は命の危険を[illegible]。それでも彼女は生む決心を曲げなかった。町も人も、なにもかも変わっていく中、朋也にとってただひとつ確かだった渚の存在。それが今、消えようとしている。手を握り祈ることしかできない朋也。その時、彼はまばゆい光の中で、不思議な光景を見る









Scene 06

今のわたしにとって、ここで過ごした時間はかけがえのないものです。だから、心込めて。ありがとう、ございました――。



「ありがとう…ございます」







Scene 07

朋也くん……わたし、がんばれました。……しおちゃんの、元気な泣き声が聞こえます。とてもかわいいです。本当に、よかった。でも…… 疲れてしまいました。だから少しだけ、休ませてください……。

「これから先、どんなことが待っていようとも…わたしと出会えたこと、後悔しないでください」



Scene 08

わたしは、朋也くんと出会えてよかったです。とても幸せでした。だから、もう迷わないでください。わたしと出会ったこと、今まで一緒に過ごしてきたこと、後悔しないでください。　ダメ、でしょうか。


お連れしましょう…


この町の、願いが叶う場所に


お連れしましょう…
この町の、願いが叶う場所に

「わたしたちは町を愛して、町に育まれているんです」



Scene 09

町も人も、みんな家族です。だんご大家族です。だから、朋也くんにもだんご大家族、好きになってほしいです。……ほら、汐ちゃんのために、一緒に歌ってあげましょう。

静かに町を包む"想い"の光

まぶしい光の中に消えていく渚の笑顔。そしてそれを追いかける朋也の手の中には、ひときわまぶしい光が。その温かな光はやがて全身を包み込み、彼に"町の情景"を見せる……。

気がつくと、朋也は渚の手を握っていた。そして渚もその手を握り返し、こちらをじっと見ている。彼女は死の危険を乗り越え、[illegible]娘を[illegible]汐を出産したのだ。それはまさに[illegible]跡とも言える結果だった。なぜなら、それを裏付けるかのように、無数の光が町に降り注いでいたから……。しかし渚は言う。それは奇跡ではないと。町を好きな人が町に住み、人を好きな町が人を愛する。そんな誰にでもある感情から生まれたものなのだ、と。そう、人は町を愛し、町に育まれている。町は大きな"家族"なのだ。もしかしたら、渚はずっと昔からそのことに気づいていたのかもしれない。だからこそ誰も嫌うことなく、誰に対しても一生懸命でいられた。きっと彼女にとって、自分を含むすべてが大切な家族。いつも仲良しの、だんご大家族。

この先ずっと、朋也と渚は大切な娘に歌って聞かせるのだろう。誰もが知っていて、誰もが忘れかけているあの歌を。町と、人と、家族の絆が込められた、あの歌を



「町も人も、みんな家族です。
だんご大家族です」


KYOU FUJIBAYASHI
What do U think of Ryou?
藤林 杏



KYOU FUJIBAYASHI

藤林 杏

朋也の友人で、サッパリとした性格の女の子。クラスは違うものの、よく朋也や春原と一緒に不毛な会話を繰り広げている（笑）。双子の妹・椋が朋也に好意を抱いているのを知り、ふたりを近づけようとするが、それがキッカケで彼らの関係は崩れていくことに。

DATA

誕生日：9月9日
血液型：O型
身　長：160cm／体重：46kg
BWH：82・56・82



「もしさ、あんたのこと好きって娘がいたら付き合う?」

Face Pattern



Fashion & Pose



姉として、友達として

杏と朋也は、付き合いやクラスの違いなどまったく関係なく、気軽に冗談を言い合えるような仲だった。笑い、ケンカし、春原をいじって遊ぶ。そんな他愛ない日々が、ずっと続くと思っていた。しかし杏の双子の妹・椋が朋也に告白し、彼がそれを受け入れてから、そんな日常は少しずつカタチを変えていく。

椋の恋を応援するのは、姉として。朋也におせっかいを焼くのは、友達として。しかし、杏は自分の本当の気持ちを、胸の奥に隠していた。誰にも気づかれないように。そして自分自身も、その存在を忘れられるように……。

杏、朋也、[illegible]、健気な妹の恋を応援する杏。その中にあって、椋は照れながらも朋也と一緒にご飯を食べたり、デートの約束をすることもできた。幸せそうな妹と頼りない朋也の姿を見て、穏やかに微笑む杏。その度[illegible]のだった。

「なぁに寝ぼけたこと言っちゃって くれてんのかしらねえ？」





Scene 01

遅刻気味でスクーターを走らせていると、あいつの姿を見つけた。椋と付き合いだして少しは変わると思ったけど、こいつってばなんにも変わらない。無性に腹が立つのに、頬が緩んじゃうのはなんでだろ……。ん〜、とりあえず攻撃しておこうっと♪

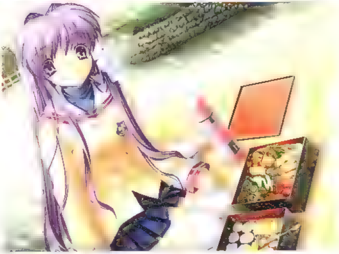


「椋があんたにお箸で
『はい、あーん』って
してくれるから」













Scene 02

朋也と同じく、椋も変わらない。相変わらず奥手なのよね……。もう少し積極的になるといいんだけど。まったく、あたしがいないとダメなんだから。まぁ、あいつもあたしのお弁当を美味しそうに食べてくれるし、もうちょっとだけ付き合ってもいい……かな。

Scene 03

そう、これは練習。あたしは椋の代わり。今の朋也にとって、あたしは椋なの。だからお願い。あたしの名前を呼ばないで。その度に、椋の嬉しそうな笑顔が胸をよぎる。胸の奥に鈍い痛みが走る。ずっと隠してきた気持ちが、外に出せって暴れ出す。なにも、わからなくなる　。





「練習…なんだよな」
「うん…練習…よ」



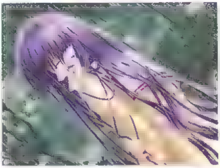
隠しきれない本当の気持ち

椋との初デートを目前に控えたある日、朋也は街で偶然に杏と会い、ボタンの散歩に付き合わされることに。長い長いウィンドウショッピングを経て辿り着いた場所は、杏とボタンが初めて出会ったという空き地。杏はそこで、まだ誰ともキスしたことがないという朋也のために、キスの練習相手を買って出る。自分のことを椋だと思って　頑なにそう言い聞かせる杏だったが、朋也の心は揺れ動く。自分はなにをしているのか、そしてなにをしたいのかと……。

結局、何事もなく散歩を終えたふたり。しかしこの時、彼らの本当の気持ちは、もはや隠しきれない大きさまで膨らみつつあった。数日後、朋也と椋がキスしているところを見てしまった杏は、雨の中を飛び出してしまったのだ。そして追いかけてきた朋也に、杏は本心を告白する。椋の恋がうまくいく度に胸を痛めていたこと、妹を応援しながら自分は告白するのが怖かったこと、そしてずっと前から好きだったこと。それを聞いた朋也もまた、自分が椋を通して誰を見ていたのかを悟るのだった。









「…あたし…あんたのことが好き…。
だから…もう
あたしに優しくしないで…」

Scene 04

なにもかも全部、思いっきりぶちまけた。だから、これで終わり。これからも朋也はあたしの友達で、椋の恋人。それでいいの。朋也、ありがとう。ばいばい。



背中、押されて……

椋が[illegible]まま、彼女の[illegible]、[illegible]朋也、彼は椋を傷つけ、自分も傷つき、それでも杏と共に[illegible]ことを選んだ[illegible]、それを[illegible]朋也だったが、椋はもう[illegible]。その[illegible]結果を、彼は椋が杏と対[illegible]することに[illegible]。

[illegible]う朋也と杏。[illegible]はそこで告げる。本当に好きなのは、妹[illegible]ことを。その瞬間、柔らかな感触が朋也の唇を塞ぐ。[illegible]名前「朋也[illegible]」そう、[illegible]、長い髪を[illegible]切った杏だったのだ。椋に背中を押され、お互いの気持ちを確かめ[illegible]た杏。彼女は、もう迷いはなかった。もちろん朋也にも、[illegible]、ふたりは再び唇を重ねる。もう二度と、離れないように[illegible]。

あれから数ヶ月。朋也の隣にはいつも[illegible]髪の[illegible]。変わりゆく季節の中で、彼らは変わらない想いを胸に、歩いていく。



「ずっと朋也のことが…好きでした」



Scene 05

もう迷わない。自分の気持ちにウソつかない。今のあたしには、椋が泣きそうになりながら言ってくれた言葉があるから。そして、朋也のことが本当に好きだから。







「朋也
好きだからね」


TOMOYO SAKAGAMI
Only U will act as a partner specially.
坂上 智代

TOMOYO SAKAGAMI

坂上 智代

朋也のひとつ後輩…のハズだが、まるで先輩のような言葉遣いの女の子。人当たりがよく、リーダーシップもあるので、彼女の周りには自然と人が集まってくる。生徒会長になることを目標にしているが、それがキッカケで朋也との間に溝ができることに……

誕生日：10月14日
血液型：O型
身　長　161cm／体重　47kg
BWH：86・57・82



「当然だ。付き合って、
不幸になどなってたまるものか」

Face Pattern



Fashion & Pose



似たもの同士の不器用な恋

校是[illegible]ハイク[illegible]た[illegible]「ヤフセだ」[illegible]春原に付き合わされた朋也は、なし崩し的にその後輩――智代と出会うことにな る。その日を境に、な[illegible]智代にケンカを売[illegible]行く春[illegible]蹴りで撃退する智代と、[illegible]朋也。そんな奇妙なやり取りの中、いつしか智代と朋也は、互いに"似たもの同士"の空気を感じるようになる。荒れていた過去を清算し、生徒会長を目指す智代。荒れていた過去の延長線上で無気力に日々を過ごす朋也。向かうべき道は違えど、それでもふたりは惹かれ合い、やがて恋人として付き合い出す。来るべき未来に、少しだけ不安を感じながら……。

そんなある日、朋也に母親がいないことを知った智代は、手作りご飯を作るために彼の家を訪れる。その家庭的な姿に感激した朋也は喜びつつも、脳内でよからぬ妄想を激しく繰り返すのだった（笑）。が、結局はなにもできない辺り、智代の人徳といえる……のかもしれない。



Scene 01

少しだけ迷ったが、やはり朝ご飯を作りに来てよかった。朋也が喜んでくれると私も嬉しい。おいしくできるかどうかは、わからないが……それでも私なりに一生懸命に作るから、多少のことには目をつぶってくれ。





「好きな人のために作る、愛情のこもった料理だ」



「なんだ…耳元で呼ばなくても、ここに居るのはわかるだろ」



Scene 02

人の背後に立ってなにをしているのかと思えば、まったく仕方のない奴だ。だが、私を見てそういう風に思ってくれるのは、その、悪い気はしないものだな……。











「ねえちゃん…」

「すごく、桜、きれいだよ…」

Scene 03

私は、ダメな姉だった。嫌なことに目をつぶり、ただ逃げることしかできなかった。でもそんな私を、私たち家族を、あの子が救ってくれた。心から誇れる、最高の弟。私はきっと、あの子と肩を並べて、桜の中を歩いてみせる。

平穏な日々の終わり、そして……

両親の不仲が原因で、親の愛情を知らずに育った智代。彼女はそんな状況から逃げ出すために荒れた生活を送り、たったひとりの弟にさえ辛く当たっていた。そしてついに両親が離婚を決め、家族がバラバラになってしまうと思われた、その時。智代の弟は意外な行動に出る。自ら道路に飛び出し、大ケガを負うことで、家族をつなぎ止めようとしたのだ。弟の座る車椅子を押しながら見た、満開の桜――涙ににじんだその風景を見ながら、智代はようやく家族がひとつになったことを感じるのだった。

智代は、思い出の場所から学校に続く坂道の桜並木を残すため、生徒会長になることを決めた。それが彼女の目標であり、たったひとつの願いだから。しかし、優等生とは対極の位置にいる朋也と一緒にいることで、彼女の前には様々な障害が発生する。もちろん本人の意思とは関係なく、だ。数日後、当然のように会長に選ばれる智代。そして自分がその足枷にしかならないと悟った朋也は、彼女に別れの言葉を告げる。今、ふたりは別々の道を歩き始めた。

Scene 04

校内放送が私の名を告げる。私はついに、目標の一端を果たしたのだ。だが、それは同時に朋也との関係の終わりを意味する。なぁ朋也。生徒会長が彼女では、やっぱりおまえは嫌だろうか・・・。

「最後だ、許せ」



過ぎ去った時間、動き始めた時間

あれから数ヵ月。学校でバカをやっていられる時間は少しずつ終わりに近づき、春原でさえも就職活動のために田舎へと戻っていった。ひとり取り残されたような感覚に襲われる朋也。彼はなんとかこの町での就職を決めるものの、そこにあるのは希望ではなく、漠然とした不安だけだった。そんな彼の目に、懐かしい姿が映る。8ヵ月前に別の道を歩き出した少女が、あの日と同じ顔でそこに立っていたのだ。譲れない願いと引き替えに失ったものを、再び取り戻すために。今も変わらぬ想いを、真っ直ぐに伝えるために。そして、ずっと情けない男のままだった朋也は、ようやく手に入れる。強くなるための理由と、大好きだった笑顔を――

少しだけ時が過ぎ、春。学校へと続く桜並木には、智代と弟の鷹文の姿が。同じ目線で桜を眺めたい――そんなささやかな智代の夢は、優しく穏やかに、春の陽の中へと溶けていく。





Scene 05

私はもう、なにもいらない。私はおまえと一緒の春がいい。これから努力するおまえの側にいたいんだ。今もずっと好きだ、朋也。

「私は…朋也がそばにいてくれただけで幸せだった」







「きれいだね」
「ああ……綺麗だな……」

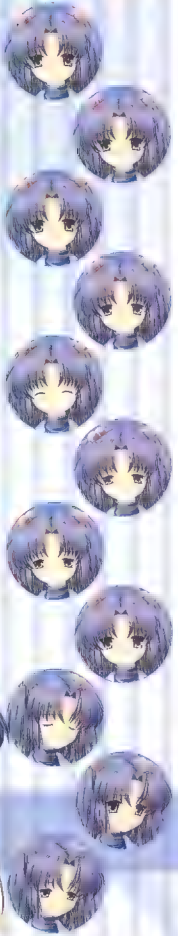

KOTOMI ICHI
Have you eaten lunch…?
一ノ瀬 ことみ



KOTOMI ICHINOSE

一ノ瀬 ことみ

Face Pattern



いつも図書室で本を読んでいる、ちょっと変わった女の子。とんでもなく頭がいいものの、その不思議な言動は、周りの人間にしばしば動揺と混乱を与える。たまに本のページをハサミで切ってしまうことがあるが、その行動の裏にはある大きな秘密が……

誕生日　5月13日
血液型　A型
身　長　160cm／体重　48kg
BWH　88　58・85



「今日もご本に囲まれて、
しあわせ」

Fashion & Pose



本とハサミとお弁当

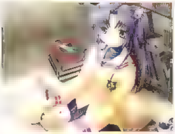
授業をサボった朋也が立ち寄った図書室。[illegible]は、[illegible]の女の子[illegible]ままま本を読んで[illegible]なぜか[illegible]を[illegible]して彼女は、[illegible]抜き始めたのだ。慌てて止めに入る朋也。しかし数分後、なぜか彼はその女の子・ことみのお弁当を一緒に食べていた。彼女独特の不思議なペースに乗せられ[illegible]つつも、なぜかことみに対して[illegible]

[illegible]すようになる朋也。彼はいつもひと[illegible]ることみ[illegible]

[illegible]

大切な友達と共に過ごす時間。放課後の他愛ないお喋りも、ことみにとっては驚きの連続だった。そんな中、合唱部の部員と知り合ったのがキッカケで、彼女は古いヴァイオリンを手にする。うっとりした表情で演奏することみ。しかし、そのヴァイオリンから発せられる怪音波は、朋也たちに深刻なダメージを与える[illegible]







「お弁当。とってもおいしいお弁当。私の手づくりなの」

Scene 01

いつものようにご本を読んでいたら、いつの間にか朋也くんがいたの。あの日、出会った男の子。朋也くんは私のこと、覚えてくれてるのかな……。

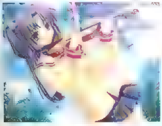







Scene 02

朋也くんに「俺だって他人だろ？」って聞かれたの。でも、朋也くんは朋也くん。私はことみちゃん。だから、大丈夫なの。あ、お弁当の本も買わないと…… 。

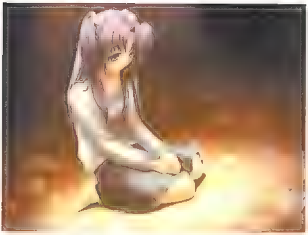



Scene 03

杏ちゃんが開いてくれた、ヴァイオリンの発表会。渚ちゃんと椋ちゃんと一緒に練習した曲も演奏するの。とってもうれしいから、とってもはりきって弾くの。



「私がいちばん好きな曲です。聴いてあげてください」



Scene 04

ご本の中にお父さんとお母さんの名前を見つけると、ほんとにうれしかったの。でも、値段が高くて買えなかったから……。ごめんねって謝って、ハサミで切ってたの

「おとといは兎を見たの。きのうは鹿。今日はあなた」











Scene 05

あの頃とっても大好きで、何度も読んだご本のこと。朋也くん、思い出してくれた。あの日と同じ笑顔で、私のこと迎えに来てくれたの。

そして陽の当たる場所へ

「会えなくなっても、見ていてくれる?」

「約束する。

それが俺の幸せだから」



Scene 06

初めて会った時から、朋也くんのこと好きだったの。でも私、怖い。どんなに大切な人も、どんなに幸せな時も、そのうち消えちゃうって知ってるから。だから朋也くん。会えなくなっても、見ていてほしいの。







世は美しい音色に満ちて——

明也に手を引かれ、ようやく外の世界へと目を向けたことみ。渚や杏、椋、そして明也に囲まれながら、彼女は世界の美しさを実感していた。ある日、そんな彼女の元にひとつのカバンが届けられる。事故で亡くなった両親が使っていたものだ。中には研究成果の書かれた論文が入っているかと思われた。しかし、入っていたのはクマのぬいぐるみと両親からの手紙、そしてカバンを娘に届けてほしいと書かれた封筒だった。落ちていく飛行機の中、論文もなにもかも放り出し、カバンにぬいぐるみを詰め込んだことみの両親は、ただひたすら娘の幸せだけを願っていたのだ。そして託された鞄は、日本中の人々を巡り、今、ことみの元に辿り着いた。

夏の眩しい陽射しの中、ことみの家にいつもの仲間たちがやって来る。一度は壊れてしまったヴァイオリンを届けに。そして美しく蘇った庭に、新たな思い出が刻まれていく。

ことみへ
世界は美しい
悲しみと涙に満ちてさえ
瞳を開きなさい
やりたい事をしなさい
なりたい者になりなさい
友達を見つけなさい
焦らずにゆっくりと大人になりなさい

「お父さん、お母さん…」

Scene 07

私ね、ずっとひとりで泣いてばかりいたの。でも明也くんが迎えに来てくれた。外は恐くないって教えてくれた。仲良しのお友達もできたの。今、とっても幸せなの。だから、お父さん、お母さん。……おかえりなさい。



「おかえりなさいっ」





おみやげもの屋さんで見つけたくまさんです
たくさんたくさん探したけど、
この子がいちばん大きかったの
時間がなくて、空港からは送れなかったから
かわいいことみ
おたんじょうびおめでとう




FUKO IBUKI
It's very cute★
伊吹風子

FUKO IBUKI

伊吹 風子

旧校舎の空き教室で、ひとり黙々と木片を削り続ける風変わりな女の子。かなり子供っぽい性格だが、本人は自分に"大人の風格"が備わっていると思っている……らしい（笑）。歳の離れた姉がおり、木片には彼女に対する風子なりの想いが込められている。

誕生日：7月20日
血液型：B型
身　長：150cm／体重：41kg
BWH：78・54・79



「自分で言うのもなんですが、
可愛くできました」

Face Pattern



Fashion & Pose



木片に込められた、大切な願い

大切な姉・公子の結婚式に人がたくさん集まってくれるよう、風子は星型の木片を作っては生徒に手渡していた。ひょんなことから風子と知り合った朋也と渚は、その手伝いを始める。
受け取ってもらえることのほうが少ないような状況の中、それでも彼らの間には、和気藹々とした時間が流れていた。ところが、ある日を境に日常は崩れ始める。公子の話によると、風子は今も病院で眠り続けているというのだ。では、朋也たちが毎日会っている風子は……？
辛い真実を受け入れたくない――そんな想いを抱えた朋也と渚は、風子と公子を会わせることを決意。しかし、公子の目に風子の姿は映らなかった。すぐ目の前にいるというのに。こんなにも深い、姉妹の絆があるというのに……





「これは・・大好きな、ですね・・・・・」

Scene 01

ずっと風子しかいなかったはずの教室にいきなり現れて、風子のナイフを持っていってしまった、ヘンな人。すっごくいぢわるされましたけど、一応、ちょっとだけ、そこはかとなく、風子のこと心配してくれてた……ような気がしないでもないです。もしかしたら、見た目ほど悪い人ではないのかもしれません。……ん～、でも、やっぱりヘンな人です。







Scene 02

ある噂を聞いた。あの子が　　今も病院で眠っているふぅちゃんが、学校でお友達と一緒に駆け回っている、と。もしかしたらそれは、あの子の夢の中の風景なのかもしれない。でも、たとえ夢だとしても、ふぅちゃんが笑顔でいられるのなら、それだけで嬉しい。岡崎さんや渚ちゃんのような、素敵なお友達に囲まれていてほしい。……ねぇ、ふぅちゃん。私、幸せになる。ふぅちゃんが願ってくれた幸せを、きっと、手に入れるから……。



「今、この学校に、風子がいるって…
元気に駆け回ってるって…
それも…お友達と一緒に」

「先生の幸せが、自分の幸せだって…
先生のことが大好きなふうちゃんは
ぜったいに、そう思ってるはずですっ…」



Scene 03

すぐ目の前にいるのに、ふぅちゃんの言葉は先生に届かない……。だから、わたしが代わりに伝えます。先生のためにずっと頑張ってきた、ふぅちゃんの想いを。ずっと一緒にいた、わたしたちの言葉で。先生、どうか迷わないでください。結婚して、幸せになってくださいっ。



残された、わずかな時間の中で

目の前の風子に気がつかないまま、公子の口から真実が明かされる。風子はもう、目覚めることはない、と。そして公子は迷っていた。自分だけが結婚して幸せになっていいのか、と。姉の幸せ、ただそれだけを願って朋也たちの前に現れた風子。なにもかもを受け入れたまま、彼女は手作りの「ヒトデ」に願いを込め、それを周りの人間に託し続けていたのだ。そんな風子の気持ちを想う朋也と渚は、公子に結婚式を行うよう説得する。公子の幸せが自分の幸せ――風子はきっと、そう思っていると。妹の現状を知りながらも、渚たちの話を信じ、それを受け入れる公子。その後、朋也のアイデアにより、結婚式は学校で行われることが決まる。

しかし、風子に残された時間は確実に減り続けていた。本来ならあり得ないはずの風子の存在――そのつじつまを合わせるかのように、生徒たちは風子のことを忘れていく。あれだけ仲のよかった渚でさえも……。ただひとり風子を覚えていた朋也は、彼女を夜の学校へと連れ出す。薄れゆく記憶を、つなぎ止めるために

Scene 04

大人の気品漂う風子のこと、岡崎さんはすぐに子供扱いします。失礼です。おまけにエッチなことまで考えてます。最悪です。じゃなくて、ぷち最悪ですっ。　　でも岡崎さん、風子のこと「可愛い」って言ってくれました。そんな風に思われたことなかったので、ちょっとだけ、嬉しかったです。　…ということで、早くその三角帽子を返してください！





「ちょっとうれしかったです。
なので、ちょっとだけサービスです」



消えゆく刻、そして新たなる出会い

結婚式当日。風子の想いが通じたのか、学校にはたくさんの生徒が集まり、公子たちに祝福を贈った。温かい笑顔の溢れる、とてもとても幸せな時間。そんな中、朋也はひとり涙を流す。今はもう顔も名前も思い出せない、ひとりの少女を想って。今日、こうしてこの日を迎えるためだけに、そして大好きな姉の幸せのために、たったひとりで頑張り続けた女の子。そんな彼女の手から、最後の贈り物が手渡される。公子と、そして朋也の手に。不器用な手で一生懸命作った、思い出の詰まったヒトデ。消えゆく直前に、ありったけの願いを込めて……

あれから時間が経ち、校内はなぜか、学校で結婚式を挙げた公子先生に妹がいるという噂で持ちきりだった。病院でずっと眠っている女の子。"出会ったことがない"はずのその娘を、みんな待っていたのだ。そして朋也たちは出会う。木製のヒトデを持った、風変わりな少女に。





「こんな日を目指して…
頑張っていた奴がいたんだ…
たったひとりで…
たくさんの祝福を集めた奴が
ずっと、そばにいたんだ…」

Scene 05

岡崎さんと出会ってからは、毎日がヒトデ祭りでした。とても楽しかったです。本当に、ありがとうございました。そしておねえちゃん、おめでとう。いつまでも、幸せに……。







「風子のお友達に
なってくださいっ」



宮沢 有紀寧

朋也の後輩で、誰に対しても分け隔てなく接することのできる優しい心の持ち主。そんな有紀寧を慕い、多くの友人たちが彼女の元へと集まってくる……が、なぜか全員強面系の方々ばかり(笑)。女の子らしくおまじないが趣味で、その効力は百発百中を誇るとか

「それは、人の心が変わってしまったからではないでしょうか」

Face Pattern

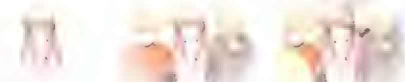


YUKINE MIYAZAWA 今は亡き兄が遺した自分の居場所

[illegible]

Fashion & Pose











相楽 美佐枝

学校の男子寮の寮母さん。頼り甲斐のある姉御肌で、彼女の元には男女を問わず多くの生徒たちが相談に訪れる。実は同校の卒業生で、在学時は生徒会長を務めていた。その当時、美佐枝が達成した"全校生徒無遅刻無欠席ウィーク"は、今や伝説として語り継がれている。

「なんで、こんな奴にばっか
気に入られるかねぇ…」

Face Pattern



Fashion & Pose



"ずっと、いつまでも"……叶えられた願い

ある日、行方不明となった美佐枝の飼い猫を見つけた朋也は、そのお礼に彼女の部屋へと招き入れられる。[illegible]美佐枝[illegible]朋也の想いは彼女に届かない。なぜなら美佐枝は、恋する気持ちを遠い過去へ置き去りにして[illegible]も好きでいてほし[illegible]しまった昔の恋人[illegible]也は、美佐枝の昔の恋人が消えてなどいなかったことを知る。彼はいつでも美佐枝の側で、約束どおり彼女を好きでい続けていたのだ。虎縞模様の猫の姿で



[illegible]原 陽平



バカ、ヘタレ、スケベと三拍子揃った本作のお笑い要員（？）。スポーツ推薦で入学しながら部活を辞めざるを得なくなり、それ以降、怠惰な日々を過ごしている。似たような境遇にある朋也とは親友同士の間柄……と思っているが、実際は下僕同然の扱いを受けている（笑）。

「そん時は、僕の背中はおまえに任せるぜっ」

Face Pattern



Fashion & Pose



YOUHE SUNOHARA

一生のうち、一番大切な時間を共に

[illegible]サッカー部を追い[illegible]の彼らの初めての出会いは、1年生の頃まで遡る。廊下ですれ違った[illegible]あろうふたりは、やがて幸村の計らい[illegible]き合わされる。その日から、彼らは共[illegible]やりながら、小さな楽しみを積み重ねてきた。

[illegible]学校を辞め[illegible]こんな[illegible]過ごせる友人な[illegible]初めての出[illegible]



かつての優しい兄の姿を求めて～

春原芽衣



春原の妹。唯一の取り柄であるサッカーを辞めてしまった兄の暮らしぶりを心配し、その様子を見るために単身田舎から上ってくる。春原とは正反対の、しっかり者の常識人。幼い頃からデキの悪い兄のおかげでなにかと苦労させられてきたが、それでも彼を心から慕っている。

「いま、兄はどうして過ごしていますか？」

Face Pattern



MEI SUNOHARA 今も昔も決して変わらぬ兄妹の絆

[illegible]



Fashion & Pose





～[illegible]～

藤林 椋

朋也のクラスの委員長を務める女の子で、杏の双子の妹。その性格は、おとなしくて控えめ。占いが好きで、自分でもよくトランプ占いをしているが、絶対に当たらない。そのため彼女の周囲では、よい結果を告げられた相手がガックリと肩を落とす珍妙な光景が見られる(笑)。

「占いはあくまで占いですから」

Face Pattern



Fashion & Pose



RYOU FUJIBAYASH 小さなきっかけを大きな前進に変えて

[illegible]う思う？」[illegible]椋の双子[illegible]間。思わず戸惑う[illegible]彼女は「覚悟しときなさいね」と[illegible]を残して立ち去ってしまう。そして翌日から、杏の"朋也と椋をくっつけちゃおう大作戦"が幕を開けるのだった(笑)。昼休みにはおそろいの弁当をふたりで食べさせられたり、放課後には一緒に下校させられたり……そんな杏の企みに、まんまとハマる朋也。そんな日々の中で、彼は確実に椋のことを意識していった。

そして訪れた告白の時。まだ付き合いの浅い椋の告白を受け入れるべきか悩む朋也の背中を押したのも、やはり杏だった。「恋人として仲を深めていけばいい」との彼女のアドバイスが、朋也に決心をつけさせたのだ

こうして[illegible]に進んだ朋也と椋の恋。しかし、[illegible]士となった今、彼らはお互いに誓い合う。杏が[illegible]これからはふたりの[illegible]













柊 勝平

全国を歩いて旅する青年。よく言えば純粋、悪く言えば世間知らずで、ふとした瞬間に奇妙な言動を見せる。女の子のようなカワイイ外見から若く見られがちだが、実際は朋也よりもひとつ年上。以前、バイクにはねられた際、介抱してくれた美少女に運命を感じているらしい。

「あははは、
実はちょっとわけありでさー、
旅の最中なんだ」

Face Pattern



KAPPEI HIRAGI 絶望の淵で見つけた生きていく意味

[illegible]



Fashion & Pose





伊吹 公子

穏やかな物腰で、常に優しい笑みを称えている女性。時おり見せる、年の割に子供っぽい言動は、妹の風子と通じるものがある。かつて朋也が通う学園で教職に就いていたが、彼が入学する直前に退職しているため、その教師時代を知っている生徒は留年経験のある者のみ。

「あの子、ひとりに寂しい思いはさせられません」

Face Pattern



KOUKO IBUKI 待ち望んでいた当たり前の幸せ



Fashion & Pose





～栄光と挫折の果てに～

芳野 祐介

人気ミュージシャンから一転、現在は電気工として働く青年。ただ、当時のロック魂は健在で、たまにラブソングの歌詞のようなクサいセリフを平気で語り出す。高校卒業後、同じ電設会社に就職した朋也の頼れる先輩として、厳しくも温かい眼差しで彼を見守っている。

「今日も愛を照らし続けるよう
……俺は働こう」

Face Pattern

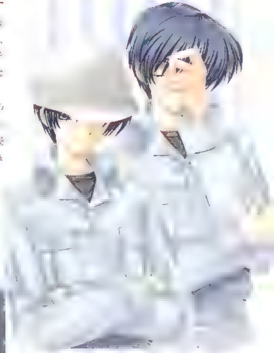


長い苦悩の末に掴んだ歌い続ける理由

芳野が音楽の道を志したのは、高校生の頃だった。周囲が白い目を向ける中、唯一その夢を信じてくれた女教師・公子。そんな彼女の応援を背にプロデビューを果たした芳野は、すぐに一流ミュージシャンとして名を馳せていく。だが、彼の栄光は長くは続かなかった。大きな挫折を経て、[illegible]追い込まれ[illegible]、入院……やがて彼が社会に復帰した時、その居場所はなくなっていた。失意の中、一番楽しい時を過[illegible]は、かつて自分を[illegible]、当時と変わらない優しい[illegible]。そんな彼女を音楽に代わる[illegible]。

その後、[illegible]り返さぬよう彼は誓う。大好きな歌を、大好きな人のためだけに歌い続けていくことを

Fashion & Pose



Love&Spanner 完成までの道のり







Love & Spanner



～みんなの笑顔を見るために～

古河 秋生



妻の早苗と共にパン屋を経営している渚の父親。かつて娘のために、夢だった演劇の仕事を辞めた過去がある。楽しいことには目がなく、そのため、突然姿を消しては早苗を困らせる奔放な性格の持ち主。時間が空くと、近所の子供たちを集めて公園で野球の試合をしている。

「この街と、住人に幸あれ」

Face Pattern



Fashion & Pose



AKIO FURUKAWA

ひたむきな思いが救った少年の心

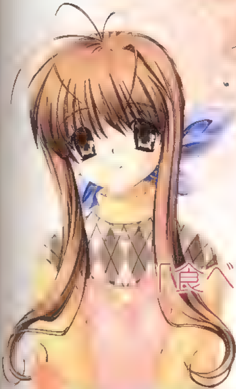
ある日、秋生の元に届いた[illegible]は、昔の演劇仲間の旅揚げ[illegible]の協力もあ[illegible]の九州へと向かう秋生[illegible]の行動が、知らぬ間に彼[illegible]

[illegible]、秋生の身には重大な[illegible]物を[illegible]

[illegible]るために。[illegible]そんな秋[illegible]



古河 早苗



渚の母親。娘に勝るとも劣らない泣き虫だが、芯の部分は強く、まだ未熟な朋也たちを助けて正しい方向へと導いてくれる。家事も仕事も完璧にこなすが、なぜかパン作りのセンスは壊滅的。秋生曰く、地雷並の破壊力を秘める彼女のパンは、ほとんど売れた試しがないらしい。

「食べてみてください、
自信作ですっ」

Face Pattern



Fashion & Pose

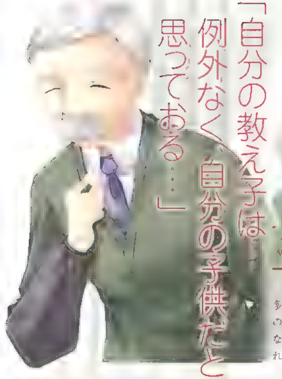


SANAE FURUKAWA 早苗先生の最初で最後のわがまま

[illegible]







「自分の教え子は例外なく自分の子供たちと思っておる……」

〜老兵は死なず、ただ去るのみ〜
幸村 俊夫

朋也が通う学校の教師。現在の好々爺の雰囲気からは想像もつかないが、かつて赴任していた高校では"熱血生活指導"として、数々の武勇伝を築いていた。今年いっぱいで定年を迎える予定。

TOSHIO KOUMURA

最後の"息子たち"のために……

荒くれの悪さで有名な高校で生活指導を務め、多くの不良たちを導いてきた幸村。だが、現在の高校では、その存在意義を失っていた。なぜなら、全生徒が優秀なのだ。誰からも必要とされないまま6年が過ぎ、定年まで残りわずか。そんな幸村の目に飛び込んできたのが、1年生の頃の朋也と春原だった。彼は今にも学校を辞めそうな2人を引き合わせ、陰で支え、無事に卒業させる。そして彼らの巣立つ姿を細い目の奥に焼き付け、今、静かに教鞭を置く……。



「もう…おれはやり終えたのだろうか…」

〜故郷の空に立てた誓い〜
岡崎 直幸

Face Pattern

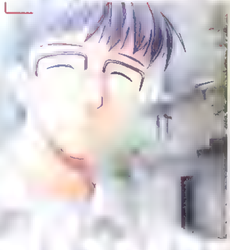


朋也の父親。妻を交通事故で亡くして以来、男手ひとつで彼を育ててきた。しかし、暴力で朋也にケガを負わせてしまった3年前のある日を境に、彼に対して他人行儀な態度を取るようになる。

NAOYUKI OKAZAKI

すべてを成し遂げ、母が待つ安らぎの地へ

以前の朋也にとって、自堕落な日々を送る父親は目をそらしたくなる存在だった。だが、祖母から父親が味わってきた苦労を聞き、さらに自身がかつての父親と同じ立場に立った今、朋也の中にあった彼へのわだかまりは消えていた。代わりにその胸を満たしていたのは、すべてを捨てて自分を育ててくれた父への感謝の気持ち。朋也は彼に、故郷へ帰りゆっくりと休むよう告げる。なにもかもを息子のために犠牲にする日々は、もう終わったのだと……。



〜我が子を見守る優しい眼差し〜
岡崎 史乃



早苗が作った夏休みの旅行計画の最終目的地で、朋也を待っていた女性。その正体は直幸の母……つまり主人公の祖母にあたる人物。ダメな人間ながらも父親としての責務を果たした我が子との、穏やかな生活を望んでいる。

[illegible]

岡崎 汐



明也と渚の間に生まれた娘。渚の死の衝撃から立ち直れずに子育ての義務を放棄した朋也に代わり、5年間、秋生と早苗の手で育てられる。ふたりの教育の賜物か、素直で優しく前向きな性格の女の子へと成長した。ただ、心の底では父親が側にいないことを寂しがっている。

「パパと
いっしょにいたい」

USHIO OKAZAKI あの夏の日の思い出は遠く彼方へ……

渚の死から5年。早苗が仕組んだ夏[illegible]を通じ、ようやく親子の絆を取[illegible]汐。ふたりは、これまで[illegible]時間を取り戻すかのよ[illegible]、共に手を取[illegible]な日々を[illegible]。しかし、そんな彼らの穏やかな日[illegible]。

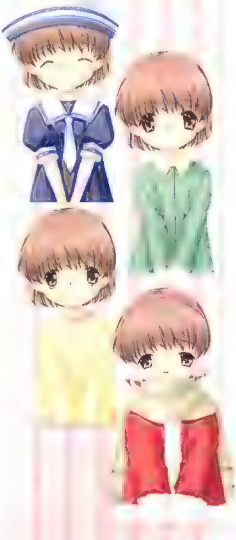
汐の身に襲い掛かった[illegible]。それは、かつて彼女の母親である渚[illegible]謎の病気。秋が過ぎ、冬が訪れても、[illegible]は一向に回復の兆しを見せなかった。やが[illegible]の小さな命の灯火が消えゆく寸前、朋也は「もう一度パパと旅行に行きたい」という汐の最後の願いを叶えるため、彼女を連れて外へと飛び出す。まるで悲しい運命に抗い、必死で逃げようとするかのように。しかし、駅へと向かう道の途中、ついに汐は力尽きる。しんしんと降り続ける雪の中、そんな彼女をいつまでも抱きしめ続ける朋也。やがて彼の指先の感覚は消え、視界は閉ざされていく。そして朋也は目を……この世界[illegible]意識を、閉じた。



Face Pattern



Fashion & Pose




幻想


世界


幻想世界

プロローグ

一面、白い世界…
………
雪…

そう、雪だ。

今なお、それは降り続け、僕の体を白く覆っていく。
ああ…
僕はこんなところで何をしているのだろう…。
いつからこんなところに、ひとりぼっちで居るのだろう…。
………。
雪に埋もれた…僕の手。
それが、何かを掴んでいた。

引き上げる。
真っ白な手。
女の子の手だった。
ああ、そうだった…。
僕はひとりきりじゃなかった。
彼女の顔を覆う雪を払う。
穏やかに眠る横顔が、現れた。
そう…
この子とふたりで…ずっと居たのだ。
この世界で。
この、誰もいない、もの悲しい世界で。

幻想世界 I

僕は見ていた。
遠い世界を。

薄暗い場所だった。
どこなのだろう、ここは。
屋内のようだった。
閑散としていた。
机が見える。
人が居るべきだった。でも、居なかった。
なにひとつ、動くものなく…
ただ、時間が過ぎる。
………。

もし僕が、新しい命として、生まれる場所を探しているなら…
この世界を選んではいけないと思った。
僕は怯えていたのだ。この世界に。

僕はずっと前から気づいていた。
この世界は終わってしまっている、ということに。
もう、ここでは何も生まれず、何も死なない。
過ぎる時間さえ、存在しない。
だから、終わることすらない。
一度生まれ落ちたが最後。
終わりのない世界に閉じこめられ、二度と出られなくなる。
死ぬこともなく、新しい世界に生まれることもできない。
そんな凍てついた世界を、僕は見ていた。

このまま目を閉じて、ここから去ろう…
そう思う。

どうか…次、目覚めたときは、この世界でないよう…。
もっと、素敵で、温かな世界でありますように。
僕は目を…

この世界での、意識を閉じた。
………。

そのとき、一瞬、光が揺らいだ。
何かが動いたのだ。
その正体はわからない。
けど、動く何かがある。
この世界は、終わっていなかったのだろうか…。
…あるいは、終わっている世界に住む、何かなのだろうか。

窓から漏れる光を受けた壁。
その影の部分が動いている。
もし『目』を動かせたなら、見えたかもしれない。
でも、まだその正体はわからない。
ゆっくりと動いている…。
やがて、壁は元通りの光を映し出し…
代わりに、ひとりの少女が目の前に現れた。

まだあどけなさが残る。
僕のことをじっと見ていた。

見えるのだろうか、僕が。
彼女の手が僕に向けて差し出される。
けど、それは僕に触れることなく、通り過ぎた。
そう…
僕はこの世界に生まれていない。
だから、触れることができないのだ。
でも、だとしたら…どうして彼女は僕に気づいたのだろう。
姿だけは見えているのだろうか。
それはどんな姿で？
彼女は引いた手を、左右に振った。
そして僕から離れていく。
見えなくなった。

…こんな世界に、人がいた。
終わってしまった世界で、彼女は何をしているのだろう？
どんな暮らしをして、何を糧に生きているのだろう？
生き続けているのだろう？
僕は、どうしてか、彼女のことが気になった。
それはこの世界の異質さからだろうか…。
まだ、僕は怯えている。
…この世界に、生まれてはいけない。
でも、少女はそんな場所に住んでいた。
だからだろうか…。

……。

また僕はこの世界を見ていた。
多くは、退屈な静止した世界だった。
でも、時折、少女が目の前に現れてくれる。
少女と僕は、意志の疎通ができなかった。
だから、彼女は、僕を見る以外のことはしなかったし、
僕も、彼女を見る以外のことはできなかった。
でも、確かに…
その瞬間を、僕はいつも待ちこがれていたのだ。

少女の生活は孤独だった。
少女以外に、誰もいなかった。
それは当然だった。
ここからは、何も生まれず、何も死なない。
そんな世界だ。

だからだろう。
飽きもせず、僕なんかを見てくれるのは。

ある日、彼女は胸にたくさんの何かを抱いて目の前に現れた。
それは、大小さまざまの…ガラクタだった。
ガラクタとしか言いようのない…用途のわからない物ばかり。

そこから彼女は、長い時間をかけて、そのガラクタを組み上げ始めた。

どれだけの時間が過ぎただろうか。
少女の目の前には彼女の半分の背丈ほどの人形が立っていた。

少女は誇らしげに立つと、僕に顔を向けた。

彼女の顔を見て、ようやく気づく。
その体は、僕のためのものだったのだ。

でも、僕はどうすればいいのだろうか。
よくわからなかった。

望めばいいのだろうか。
この世界に生まれることを。
僕はそんなことを望んでいたのだろうか。
僕は今でも、この世界を恐れているのだ。
生も死もなく…
二度と、抜け出ることができない世界…
本当に、そんな閉ざされた世界だったら…
僕という存在は、ここで終わるのだ。

少女が差し出す手…
擦り傷だらけの手を、僕はじっと見た。
この世界で…たったひとつの温もり。

いつしか…
僕はそれを求めた。



幻想世界Ⅱ

次の光景は、床だった。
床をじっと見ていた。
なんだっけ。何かの途中だった気がする。
『首』を縦に動かす。そうして、視界を変える。

彼女がいた。
ずっと、僕が見ていた少女だ。
少女が手を差し出していた。
僕はそれに向けて自分の『手』を伸ばした。
手が重なる。
感触はなかったけど…それでも、合わさっていることはわかる。
同時に僕は実感する。
僕は本当に、この世界に生まれてしまったんだ。
僕は存在してしまっている。
彼女に触れられる。
世界は悲しかった。
けど、彼女は優しかった。
彼女の手に触れていると、
悲しさと優しさが同時に僕の『胸』を満たした。
僕は彼女を求めて、ここに生まれた。
新しい世界での暮らしや、得られるはずだった幸せ、
あらゆるものを犠牲にして。
彼女は僕の手を引いて、立ち上がらせると、また離れていった。
そして、数歩先で手を叩いた。
僕は彼女に向けて、歩き始める。
そう…僕は歩く練習をしていたのだ。
記憶は淀んでいた。
努力しなければ、思い出せない。
彼女が手を叩いている。
歩こう。
けど、足は思い通りに動いてくれない。
また、前のめりに倒れ込んだ。
それでも繰り返し、彼女は僕の手を引いて立ち上がらせてくれた。
何度目の歩行になるのか。
ようやく、彼女の前まで辿り着くことができた。
彼女は彼女の背丈の半分しかない僕の体を抱き留めてくれた。
…よくできたね。
温もりだ。
この世界でたったひとつの温もりだ。
僕の求めていた温もりだ。
ガラクタの体では、体温は感じられなかったけど。
彼女の顔を見上げる。
訊きたいことがたくさんあった。
でも、僕には口がなかったから、言葉を喋ることができなかった。

僕は『顔』を窓に向けた。
いつだって、逆光が差し込んでいた窓。
外の世界が見たかった。
世界の終わりを、この『目』で確かめたかった。



幻想世界Ⅲ

僕は風が吹く大地にいた。
風は隔てられるものなく、世界の果てから吹いてくるような気がした。
こんな体でも、その力を感じることができた。
大地には、風に煽られるようにして無数の光が舞っていた。
その中に、少女は立っていた。
今、また風に煽られ、いくつもの光が大地を飛び立つ。
それを見上げる少女。
これが、僕の生まれた世界。
それは…なんて、幻想的なんだろう。そう思った。
木や草、転がる石はごく自然に受け入れられた。
それは、あるべきものだと思った。
けど、あの光はなんなんだろう。
こんな光景を僕は、ずっと知らなかったはずだ。
また風が吹いて、ひとつの光が僕の脇を抜けていった。
僕はそれを追いかけた。
すぐ目の前に浮かんでいる。
手を伸ばしてみた。
光はガラクタで出来た指を通り抜けていった。
触れることすらも、その進路に少しの変化を与えることもできなかった。
僕が呆然と立ちつくしていると、彼女が隣までやってきたのが影でわかった。
僕は光のひとつを指さした。
…なに?と、彼女が訊いた。
僕は答えることができない。
…その光が不思議?
こくん、と頷いた。
…空は?
ううん、と首を振った。
…地面は?
ううん。
…この光だけ?
こくん。
…それは、どうしてかな。
彼女は顎に手を当てて考えた。
僕も同じようにしようとしたが、肘の関節がそこまで曲がってくれなかった。
だから、不自然に腕を折った格好のまま待った。
ずっとここに住む彼女にとっては、光も僕が知る水や木なんかと同じ。
自然の一部なのだ。
でも、それだけは触れることができない。
つまりそれは…影なんだと思った。
でも影には、本体がある。
なら、それはどこにあるんだろう。
どこにも、見あたらなかった。
…つまり、と彼女は口を開いた。
…不思議と思うということは、不思議じゃない景色を知っている。
かもしれない。僕は頷いた。

僕は記憶の奥底を探ってみる。
いつか、遠い昔…
あるいは、遠い未来…
僕は違う世界にいた。
その感覚だけは覚えてる。
思い出せば、胸のずっと奥深くが温かくなる。
…そこは、どんな場所だった？
僕は首を振る。

幻想世界 Ⅳ

…ここより、もっと素敵な場所だった？
きっと。
…いろんなものがあって、毎日が楽しかった？
たぶん。
…こんなにも…寂しくなかった？
……。
ずっと、ひとりで過ごしてきた少女。
僕はここが、何もなくて、楽しくなくて、寂しい場所だと知っていたから…
だから、生まれてきたんだろう。
…そうだよね。
…ここは寂しい世界だよね。
…ねえ、きみは…
…こんな世界に生まれることを望んだ？
僕は何も答えず…ただ、彼女の手を握った。
それが…答えだった。



彼女が作ってくれた僕の体。
その材料はガラクタだ。
それらは、広大な大地に点在していて、枯れ草の中に落ちていたり、
地表からその一部だけを突きだして埋まっていたりした。
まるでそれは、何かの死体を思わせた。
たくさんの死体。
いろんなものの死体。
考えてから、僕は身震いした。
それは、僕の体だった。
でも、そのガラクタは、こうして僕の体をちゃんと形作ってくれている。
いきなり腕が落ちたりすることもなかった。
なら、また、僕のように、新しい意志を持ったガラクタ人形を作れるということだ。
ガラクタなら探せばいくらでも見つけることができた。

きっと彼女がそうしてくれたように、僕は、それを小さな体で拾い集めてきた。

彼女は不思議そうに僕がしようとすることを見ていた。
彼女の前で、そのガラクタ同士を繋ぎ合わせてみる。
けど、きっちりと填め込もうが、それは、外れて落ちた。
彼女が意図をくみ取って、同じようにしてくれる。
今度は外れなかった。
僕は自分の体を指さした。
…新しい体、ほしいの？
僕は関係ない、と腕を交差させた。
…友達？　友達ほしいの？
意図は違う。ただ、僕は僕のような存在が増えれば、
もっと楽しくなるはずだと思っただけだ。
でも、結果的には同じことだったから、頷いておく。
…そうだよね。ひとりじゃ、寂しかったよね。ごめんね。
それは…違うんだけど。でも、僕はじっと、彼女の顔を見上げたままでいた。
…無理かもしれないけど…それでもいい？
こくん、と頷く。
…じゃ、やってみるね。
彼女はガラクタを組み上げ始める。

部品が足らなくなると、ふたりで大地に出て、探して歩いた。
何度も往復した。
そうしてみて、初めてわかる。
僕の体を作るのは、こんなにも大変だったのかと。

今日は遠くまで、ガラクタを探しにきていた。
丘の上に立って、地平線を見渡す。
果てしなく、大地は続いていた。
ずっと遠くまで。
その果てには、一体何があるんだろう。
僕は隣に生えた草と自分を見比べる。
僕の小さな体では、それは確かめようのないことだった。
…見て。
呼ぶ声がして振り返ると、彼女は一匹の獣を胸に抱いていた。
こんな世界にも、僕ら以外に生き物がいた。
ふわふわとした白い体毛に覆われ、そしてくるりと曲がったツノをふたつ、
耳の横に持っていた。
僕はそれが嫌いだった。
まるで人――僕は人ではなかったけど――に懐こうとしない。

幻　想　世　界　V

そもそも、僕らは眼中にないようなのだ。
それでも、彼女はそれを一方的にいじるのが好きだった。
抱いたまま、頭やお腹を撫でた。

そうしながら、彼女はゆっくりと坂を登る。
僕も後に続いた。
ひとつ丘を越えると、その獣が群れを作っていた。
大小さまざまで、個体差はあったが、全部同じ種類の生物だった。
少女が抱いていた獣を大地に下ろす。
獣は、振り返ることなく、群れに向かって歩いていった。
その様子を見て、僕は思う。
彼らには、『心』がないんだと。
存在しているだけだ。
彼女に懐くこともなければ、別れることを惜しんで振り返ることもしない。
そんな奴らでも、この世界では、彼女自身を除いては、唯一の生き物だった。
だからだろう。彼女が好んで触れたりするのは。
見ていると、獣たちは、
大地に群生した草花を無感情に引きちぎっては、咀嚼していた。
あんなのがたくさん増えたら、この緑が荒れ果ててしまうに違いなかった。
いくらこいつらを気に入っているとしても、
そんな事態になるのは好ましくないはずだ。
僕は持っていたガラクタをその場に置くと、
闇雲にその中に割っていって、獣を追っ払った。
そうしようが、彼らは僕に衝突いてくることもなく、
場所を変えて、また草を食べ始める。
意味のない行為だった。
…どうしたの？　おこってるの？
彼女の声が背中でした。
違う。悲しいんだ。
…頭、なでてほしい？
それは…ほしいけど。
じっと、土がめくれ上がった地面を見つめていた。
彼女は、これだけ荒らされた自然を見て、何も思わないんだろうか。
悲しいとか、寂しいとか。
彼女はしゃがんで、僕の頭を撫でていた。影でわかった。
…これは仕方がないこと。どうしようもないことだからね。
彼女はそう言った。
…ああ、変わっていくんだなって…
…そう思うしかないことなの。

最後の部品、『目』を頭部に組み込む。
それで、ガラクタ人形は完成した。
…できたっ。
彼女は寝転がって、疲れきった四肢を伸ばした。
僕は動き出すのを期待して、人形と向かい合ったままでいた。
不格好な形の人形。
両腕の長さも違うし、ひどく受け口だった。
笑える顔だ。
それでも、新しい仲間だ。これから迎える仲間だ。
ちょっとぐらい滑稽なのは目をつぶらなければならない。
僕は待ち続ける。
同胞はなかなか動き出さなかった。
………。
彼女がむくりと起きた。
そして、一緒に動かない人形を見つめた。
動き出すには、何かきっかけが必要なのかもしれない。
僕は自分が最初にしたことを思い出した。
そう、歩く練習だ。
僕の仲間なら、それは僕が最初に教えるべきことでもある気がした。
そうしよう。
僕は、彼女が、いつかそうしてくれたように、距離を置いて、手を叩いた。
それは生まれたばかりでもわかる合図なのだ。ここまでおいで、という。
僕の両手はたんたん、と鈍い音を立てた。
…。
たんたん。
…。
人形は立ち上がろうとはしなかった。
たんたん。
僕は手を叩き続けた。
けど、一向に動き出す気配はなかった。
まるで、死んでいるように首をだらりと下げたままでいた。
たんたん。
……。
いつしか、少女は手を叩く僕のことを見ていた。
膝を擦らして近づいてくると、僕を押し倒すように抱きしめた。
そして、彼女は泣いた。
…ごめんね、ごめんね。
そう繰り返して。



幻　想　世　界　Ⅵ

この世界はやっぱり終わってしまっていた。
もう、命は生まれない。
それがよくわかった。
獣に命はない。あいつらは、生き物の形をした『何か』だった。
命あるものは、彼女しか存在しない。
なら…僕はなんなんだろう？
僕に意識はある。あいつらとは違う。
僕は彼女が好きだ。ずっと一緒にいたい。
彼女が歩けば、どこまでもついていく。
嫌われたって、ついていく。
それは、意識で、感情だ。
僕が僕である証拠だ。
なら、僕は、どこからやってきたのだろう？
僕の『意識』というものは、どこからやってきたのだろう？
僕は記憶を辿った。
それは、生まれる前の記憶。
淀んだ意識の底にそれはある。
遠い昔か、遠い未来…僕がいた場所。
胸が温かくなる場所。
…ここより、もっと素敵な場所だった？
…いろんなものがあって、毎日が楽しかった？
…こんなにも寂しくなかった？
…そう…。
いろんなものがあって、楽しくて、寂しくない場所。
僕はそこにいた。
もし、僕に体がなかったなら…そこに帰れただろうか。
けど、今の僕には、僕の意識をつなぎ止める体がある。
彼女の作ってくれた体がある。
僕はこの世界の終わりで生きている。
どうしてそうなったのかは、もうわからないけど…
それでも、良かった。
彼女がひとりきりでなくなったから。

僕らは、動かないガラクタ人形を土に埋めた。
埋葬だ。
その間、彼女はずっと黙っていた。
作業が終わると、僕は彼女の手を引っ張った。
…ん？
彼女が僕を見下ろす。
僕は自分の手と手を組み合わせた。
…また、作るの？
僕は頷く。
…でも、動かないんだよ。
…友達まね　できないんだよ。
寂しげに言った。
僕は首を振った。
…別のものを作るの？
こくん。
…なにを？
僕はじっと突っ立ったままでいた。
それは僕にもわからない。
ただ、そうするべきなんじゃないかと思っただけだ。
彼女は、ガラクタを組み合わせて、何かを作ることができる。
それは僕にはできない。
彼女だけができる、特別なことだった。
ならきっと、意味があることなんだと思う。
僕は振り返る。
僕らが暮らす、あの小屋だって、彼女が作ったものなんじゃないだろうか。
…あんな大きいのは無理だよ。
彼女がそう言った。
…でも、時間をかければできるかもね。
こくん、と僕は頷く。
…じゃあ、どうしよう。
僕はぴょんぴょんとその場で跳ねてみせた。
こんなふうに、心躍るものがいい。
それを彼女が作って、僕が手伝う。
それは、とても楽しいことだと思えた。



幻　想　世　界　Ⅶ

また僕たちは、ガラクタを集めるため大地を歩いていた。
…あんまり遠くに行ってはだめ。
先に進もうとした僕を彼女が止めた。
どうして?と僕は振り返る。
…帰ってこれなくなるから。
僕はもう一度振り返って、遠くを見た。
どこまでも続く大地を。

けど、僕はガラクタ探しに慣れてくると、それに夢中になってしまった。
丘を越えた時、僕はひとりぼっちになっていた。
慌てて、坂を登っても、彼女の姿は見あたらなかった。
起伏の多い場所だったから、僕の背では見通しがきかなかった。
叫ぶこともできず、僕はひとりさまよい歩いた。
もう、どっちの方向が家なのかもわからない。
遠ざかっているのか、それとも近づいているのか。
つまずいて、坂を転げ落ちた。
大地に仰向けになって倒れる。

雲が眼前に広がっていた。
不気味な形をしていた。
僕の知らない雲だった。
彼女といた場所は、こんな雲じゃなかったはずだ。
ここは、とても遠い場所なんだ…。
恐怖に駆られる。
…帰ってこれなくなるから。
彼女の言葉を思い出す。
僕はこの世界で、知らないことがまだまだあった。
もしかしたら、僕が思ってるように、
地面はずっと続いているだけじゃないのかもしれない。
どこかでねじ曲がってしまっているのかもしれない。
遠くにある林を目指しても、辿り着いた林は、
目指していた林じゃないのかもしれない。
周りには、ガラクタが散乱していた。
彼女がそばに居たなら、喜んで、その手を引いたことだろう。

でも今は、恐ろしい世界の一部でしかなかった。
立ち上がる。そうするしかなかった。
ここはどこなんだろう…。
彼女は、今も同じ時に存在してくれているのだろうか。
そんなことすら不安だった。
戻ろう。
転げ落ちてきた、丘陵を見上げる。
逆光の中に、小さな影があった。
丘のてっぺんから、それは僕のことを見下ろしていた。
獣だった。
こんな場所にもいるんだ。
とても小さく、まるで生まれたてのような体。
そこで、僕は不思議に思った。
獣が僕を見ている?
あ、つっこ意志なんてものはない。
ただ、無感情に緑を食い尽くしていくだけの存在だ。
それが、僕をじっと見下ろしている。
まるで意志でもあるかのように。
僕はゆっくりと坂を登る。
小さな影は逃げなかった。
隣に立つと、僕の足丈もない獣は身を翻して走り出した。
僕を待っていた?
少しして、僕は思いだしたように、その後を追った。

獣について、幾度も丘を越えた。

その先で、彼女が別の獣を抱いて待っていた。
僕がそこに辿り着くと、彼女はありがとうと言って、獣を地面に下ろした。
二匹は連れ添うと、また小高い丘を登っていく。
その頂上に、もう一匹がいた。
三匹はまるで家族のように、並んで駆けていった。
信じられないものを見る目で、僕はそれを見送った。
…こわかった？
彼女が僕の頭に手を置いた。
こくん。僕は頷いた。
…わたしも。
…でも、本当によかった。
…あの子たちには、感謝しなきゃだめだね。
こくん。僕は頷いた。
こんなこともあるんだ。
…不思議だね。
本当に。
…優しい匂いがしたんだ。
優しい横顔で、彼女は言った。



幻想世界 Ⅷ



…できたっ。
彼女は言って、地面に寝転がった。
それが僕には、なんなのかよくわからなかった。
彼女が体を起こす。
…なにかわかる?
首を横に振った。
…ぴょんぴょんと跳ね上がる道具。
僕は首を傾げたままでいた。
…いいから、そっちにのって。
どこにのれるのかも、よくわからない。
そもそも、それ自体が傾いているのだから。
突っ立っていると、彼女は僕の体を持ち上げて、
そして、その傾斜した板の上に置いた。
…ここ持ってないと、本当に、飛んでいっちゃうからね。
目の前の取っ手を握らされる。
よし。
彼女は、反対側に回って、同じように腰を下ろした。
すると、僕の体が浮き上がった。
彼女のほうが低い位置にいた。
彼女が足を伸ばす。
すると、高さが逆転した。
彼女はそれを繰り返した。
景色が浮いたり沈んだり。
彼女が揺れる髪の中で笑う。
…楽しいねっ。
僕は頷いた。
なにより彼女とこんな楽しいものが作れたことがうれしかった。
恐いこともあったけど、本当にこうしてよかった。
…また別のものを作り始めてもいい?
彼女はそう提案した。
…また、手伝ってくれるよね。
もちろん。

僕たちは、そうしてガラクタを集めては、遊び道具を作っていった。
気づくと、僕たちの家の前は、とても立派な遊び場になっていた。
最後に高くまで上れる見晴台のようなものを作った。

彼女の足の上に座って、一緒に地面を見下ろした。
ふたりだけの遊び場。
それがすごく、寂れた風景に見えた。
同時に、僕はどうして記憶の中の世界が温かかったかを思い出していた。
人がたくさんいたんだ。
僕は彼女を見上げる。
…ん?
不思議そうな顔で僕を見下ろした。
彼女はすべてを知っているのだろうか。
すべてを受け入れて、ここにいるのだろうか。
それは、彼女じゃないといけなかったのだろうか。
それとも、たまたま彼女だったのだろうか。
どっちにしても、こんな悲しいことはない。
こんな世界を愛せるはずがない。
僕がいなかったら、彼女は、本当に孤独だ。
僕が生まれるまでの間、ずっと彼女はひとりだった。
それはどんな暮らしだったのだろう。

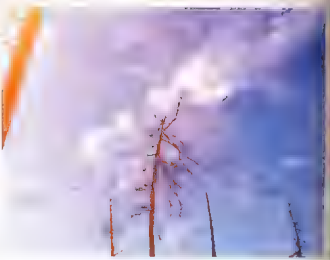
どんな毎日だったのだろう。
こんなもの悲しい世界で…
彼女は何を思ってきたのだろうか。
…どうしたの?
彼女が訊いていた。
…泣きたい?
僕は頷いた。
…悲しいことを思い出した?
そうじゃない。
悲しいのは、すべてだ。
何もかもが悲しいんだ。
心を持った誰かが、存在してはいけなかったんだ。
間違ってる。
誰にも知られず、忘れ去られているべき場所だったんだ。
僕は世界の果てを見渡した。
世界の終わりを。
世界の終わりは、悲しい色に満ちていた。
そして、僕という存在は、ここで終わるのだ。
永遠にここで終わり続けるのだ。

彼女もずっと前から気づいていたのだろう。

…こんな場所に生まれること…
…きみはそれを望んだ?

だから、僕が初めて外の風景を見た時も、彼女はそう訊いたんだ。
ただ、空だけは、どこまでも続いていた。
その先にだけは、もしかしたら、終わりがあるかもしれないと…そう思わせた。
あるいは、そこがいつの日か僕の居た世界なのかもしれない。
…涙が流せたらいいのにね。
僕は彼女の腕に包まれながら、空をずっと眺めていた。
もし、この空が、どこか別の世界に繋がっているのなら…
そこへ彼女を連れていきたかった。
でも、どうやって…?
僕はその方法を心の中に思い描いてみた。
けど…なにひとつ思い浮かばなかった。
いつしか、風の匂いが変わっていた。
それは、僕がこの世界に生まれてから、初めてのことだった。
僕を抱く腕の力が一層、強くなった。
彼女も気づいていたのだ。
…こんな世界にも…冬がくるんだ。
同じ場所を見つめたまま、そう言った。

幻想世界 IX



ずっと、続いていた穏やかな暮らし。
それは、彼女とふたりで居れば、ずっと続くと思っていた。
世界にはふたりしかいなくても、ずっと続いていくと思っていた。

でも、何かが変わり始めていた。
冬の到来と共に。

まるで冬が…彼女の体力を奪っていくようだった。
気温が下がると共に、彼女は眠ることが多くなった。
ずっと、元気にふたりで遊んでいたのに。

遠くには、とても不吉な雲が広がっていた。
…雪雲だ。
僕は、決心する時だと思った。
今、そうしなければ、すべてが手遅れになってしまう。
今なら、まだ間に合う気がした。
冬がやってきてしまえば、何もかもが雪に埋もれてしまう。
そうなる前に。

小屋に戻ると、彼女は壁にもたれて座って、ぼーっと窓の外を見ていた。
僕はそれが気がかりだった。
寒さのせいだろうか。
僕は近づいていって、窓の外を指さした。
彼女の見ている先よりも、もっと遠く。空の果てを。
…ん？
彼女が気づいて、僕を見る。
…あそこがどうしたの？
僕は指さし続けた。
…いきたいの？
こくん。僕は大きく頷く。
…でも、冬がくるよ。
僕はじっと彼女の顔を見続けた。
…それでも？
こくん。僕は大きく頷く。
…これ以上、寒くなったら、わたしは動けなくなるよ…
だったら、なおさら。
…それにね、この家を離れたら、帰ってこれなくなるよ…
………。
…それでも？
こくん。僕は大きく頷く。
…あの先には何があるの？
僕はぴょんぴょんと飛び跳ねる。
…楽しいところ？
こくん。僕は大きく頷く。
…いろんなものがあって…
…毎日が楽しくて…
…温かな場所…？
こくん。僕は大きく頷く。
…でも、もう間に合わないよ…
…冬の雲に追いつかれるよ…
僕は記憶を辿る。
深い淀みの中の記憶を。
空だ。
空をいくんだ。

僕は手を空に向けて、滑らせた。
…空を…いくの？
こくん。僕は大きく頷く。
…どうやって？
手と手を合わせる。
…作るの？
こくん。僕は大きく頷く。
…空を飛んでいける…のりものを？
こくん。僕は大きく頷く。
今、確かに僕の心の中にある形。
それが彼女に伝わっているだろうか。
………。
彼女はまた、少しぼーっとした後…
こくん。小さく頷いた。

その日から、僕らは、空を飛ぶ乗り物を作り始めた。

僕がガラクタを集めて、彼女が組み上げていく。
空はどんどん、曇っていく。
僕は組み上げられていく山を見上げる。
そこに生える大きな翼を、僕は思い描いた。
冬が来る前にどうか…。
その翼で、飛べますように。

白い息を吐く彼女。
目をこする。
…少し、眠い。
僕は心配げに彼女を見上げた。
…ごめんね、続けよう。

彼女は頑張り続けた。
彼女もわかっていたのかもしれない。
今、やらないとダメだということを。
彼女も自分で言っていた。
冬が来れば、動けなくなってしまうと。
それがどういうことを指すのか、よくわからなかった。
でも、きっと、どうしようもなくなってしまうんだ。
だから、休みなく、作業を続けた。
僕も、ガラクタを彼女の元に運び続けた。

そして、次、彼女を見た時。
冷たい地面に、その体を横たえていた。

幻想世界X

世界に、雪が降り始めた。
急がないといけなかった。
僕は見あたる最後のガラクタを拾い上げると、
それを背の袋に入れ、家路を急いだ。

扉を開ける。
いつものように、彼女がそこにいた。

僕に気づいて、目をこっちに向けた。
ゆっくりと腕を広げる。
その動作はひどく遅かった。
僕は寄っていって、その腕の中に収まる。
…すごく冷たくなってるよ…。
僕は首を振る。そんなことはどうだっていいんだ。
時間がないんだ。
…なにもできなくて、ごめんね…
僕は首を振る。
ずっと、こうして彼女の腕に包まれていたかったけど、
そうしているわけにもいかなかった。
僕はその腕を抜ける。
…もう、いくの？
僕は頷く。
…そばにいてほしいよ。
…ずっと、ふたりでいよ。
うん。そのためになんだ。
そのために、僕はいくんだ。
これから先も、ずっとふたりでいられるように。
彼女の寂しげな表情…
それを振りきって、僕は表に出た。

積み上げられたガラクタの山の前までやってくる。
そして、今日拾ってきたガラクタをその上にそっと載せる。
もう、なんの形かわからない。
もう、なんの形でもない。
最後のガラクタを載せた途端、片側が、がらがらと音をたてて崩れた。
僕はうなだれる。
ガラクタを拾ってきては、積み上げていくだけ。
それの繰り返し。
もし…
心から願うことで、ガラクタたちが形になっていくんだとしたら…
僕ひとりじゃ無理なんだ…。
だって、僕は…
人じゃなかったから。
手を見る。
四角くて、ざらついた指…。
僕こそが、願いにより作り出されたガラクタ人形。

もう、どこにも行けないのだろうか。
この場所から。

…そばにいてほしいよ。
…ずっと、ふたりでいよ。

今聞いた彼女の言葉を思い出す。

それが、もう…
もう、何もしなくていいから…と言っているようで辛かった。
悲しかった。
泣きたかった。
なんて、無力なんだろう。

僕は空を見上げる。
この世界が、彼女を苦しめているのだ。
ずっと、この世界は、彼女に過酷だけを強いてきた。
ずっと、ひとりきりで居させて…
ふたりになって寂しくなくなったと思ったら、彼女を動けなくして…
ああ…
僕は吠えるように、体を反らせた。
ぎぎぎと瓦礫をすり合わせたような嫌な音がした。
…泣いて…いるの？
彼女の声がした。
ぎぎぎ。
彼女がゆっくりと歩いてきて、そして、僕の背中を抱いた。
…どうしたの…？
ぎぎぎ。
…悲しいことを…思いだしたの…？
ぎぎぎ。
…違うよね…
…この世界が…悲しいんだよね…
ぎ…。
…遠くへいく？
……。
…目指してた場所までふたりでいく？
……。
…ふたりで…
…ここから歩いて…。
……。
…いろんなものがあって…
…楽しくて…
…温かな場所…
…そこまで。
……。
…きみは…
…そうしたいんだよね？
……。
僕は…もう、泣くのはやめて、前を向いていた。
そうしたい。
僕は、力強く頷いていた。
…じゃ…、いこう。
雪が降り積もって、この大地が雪原に変わる前に。



長い、旅の始まり。
遠い…記憶の中にある場所までの。

幻想世界XI

彼女の歩みが止まった。
長いこと、雪の上にうずくまっていた。
僕は彼女の顔にかぶった雪を払い退ける。
すると、笑顔が現れた。
彼女は手を伸ばして、自分の体を引っ張しあげるように、雪を掻いた。
でも、前には進まなかった。
僕は彼女のお腹の下に潜り込む。
力を振り絞る。
ずず、と彼女の体が動いた。
…ありがとう。
声が聞こえた。
僕の体がきしみをあげる。
後、何歩で辿り着けるのだろうか。
後、一歩のところまで来てるのだろうか。
それとも、まだ果てしない数を数えなければならないのだろうか。
だったら…無理だ。
絶望感に打ちひしがれる。
……。

不意に、僕の体が持ち上がる。
僕の下にさらに、何かがいた。
小さな…獣たち。
こんなところにも…いたんだ。
彼らの力は…つたなく、小さかった。
でも、たくさんの数で、力を合わせて…僕の体を押し進めてくれる…。
……。
やがて、また僕はひとりきりの力で歩いていた。
獣たちは…もうどこにも見えない。
振り返ることもせずに僕たちは進んだ。
勇気だけをもらって…。



幻想世界XII

一面、白い世界…
……
雪…

そう、雪だ。
今なお、それは降り続け、僕の体を白く覆っていく。
ああ…
僕はこんなところで何をしているのだろう…。
いつからこんなところに、ひとりぼっちで居るのだろう…。
……。
雪に埋もれた…僕の手。
それが、何かを掴んでいた。
引き上げる。
真っ白な手。
女の子の手だった。
ああ、そうだった…。
僕はひとりきりじゃなかった。
彼女の顔を覆う雪を払う。
穏やかに眠る横顔が、現れた。
この子とふたりで…ずっと居たのだ。
この世界で。
この、誰もいない、もの悲しい世界で。

そして、ふたりきりで…
ここまで歩いてきたのだ。
この世界から、抜け出すため。

あの日から。

ずっと、歩いて…
彼女は不自由な体にむち打って…
歩いて、歩いて…
もう、戻れない場所まできて…
雪に足が埋まっても…
僕の体が埋まっても…
ふたりで助け合って…
先を目指して…
歩いてきた。

そして、僕らは…
ここで力つきた。
彼女は、もう一歩も動けなかった。
彼女の体を支えてきた僕の体も、もうボロボロだった。
体の半分を雪に埋めていた。
僕の小さな体では、彼女を担ぐこともできなかった。
彼女の頬に手を当てる。
温かいと思えたのは、そう記憶しているからなのか。
僕の手と同じ…冷えきっているはずだった。
こんなことになるなら、連れてこなければよかった…。
僕はただ、彼女を苦しめただけだ…。

もう、どこにも行けないのだろうか、僕らは…。
ここで、ずっと眠り続けるのだろうか、僕らは。
終わり続ける世界で。



ね…
吹雪の中で声がした。
彼女の声だった。
でも、彼女は目を閉じたままだった。
…きみは…そこにいる…？
もちろん。
僕はいつまでも、きみのそばにいる。
…ありがとう…。
え…？
…きみの声、やっと聞けたね。
どうして？
…わたしはもうすぐ人じゃなくなるから。
…だから、きみの心の声も聞こえる。
どういう意味？
…いろいろなことがわかったの。
知らなかったこと、たくさん。
そうなんだ…。
でも、これでお話ができる。
たくさんできるね。
…うん。
…でもね、もう時間がないの。
…話を聞いてほしいの。
…聞いてくれる？
もちろん…。
…わたしも…昔は違い世界にいた…。
…きみが居た世界と同じ世界に。
本当？
…うん…
じゃあ、やっぱりこの世界に居るべきじゃなかったんだ…。
帰ろう。
ごめんね、わたしは…
ここに残らなければいけないの…
どうして？
…わたしはね…
この世界だった。
…。
…わたしは、このまま動けなくなって…
…人の形を失う…
そして、この世界の意志になる…
…。
…だから、ここに残らないといけないの…
そんなこと、誰が決めたのさ…。
…わたし…
…これは、わたしが決めたこと…
…わたしは初めから、ここから生まれた命だったから…
…だから、死ぬことより、この世界の意志になることを選んだ…
わからないよ…なに言ってるのか。
だって、約束したよ…僕とふたりで、この世界を出るって。
…うん…まだ、あの時は何も知らなかったから…
…ごめんね…
…今はもう、いろんなことがわかるの…
…もう、この世界とつながりはじめてるから…
だから、体はもう動かないけど…こうして、きみとも話ができる…
苦しくないの？

…うん、もう大丈夫
だから、話を聞いて…
うん…聞くよ。
…わたしがここからいなくなれば、この世界はなくなってしまうの…
…そうすれば、たくさんの光たちがきっと不幸になる…
光？
…きみもね、元はあの光のひとつだったんだ…
僕が？
…うん。それは向こうの世界の住人たちの思い…
向こうの世界って？
…一番遠くて、一番近い世界。
…ずっと、そばにあった。わたしたちは、ずっとそこにいたんだよ。
…同じ場所にいたの。
…ただ、見え方が違うだけ。
…ここは、人の世界じゃないから…
君は人だよ。
…ううん…わたしは、人でないものに移り変わりはじめた…
それは、ここに来た時から。
なんだっていうんだよ…
…この世界。
世界？
じゃ、この世界は一体なに？
…それは、わたしにはわからない…
…でも、きみならわかるんじゃないかな…
…きみは、ふたつの世界に存在してるから…
…光たちとわたしとは、住む世界が違うから、
お互いの存在には気づけないはずだった…
…でも、きみだけは、わたしに気づいてくれた…
…ずっと、どこにも行かずに、わたしのことを見ていてくれた…
…だから、わたしはきみの体を作って…そこに宿した…
…世界という距離を越えて、わたしたちは出会うことができた…
…最後の…人としての心を持っている時間を
わたしは寂しい思いをせずに過ごすことができた…
…。
…きみのおかげだよ…
…わたしはそれだけでじゅうぶん…
…じゅうぶん幸せだった…
……。
…だから今度は、違う誰かを助けてあげる番…

……。
…いい?
…きみは今から、この世界での意識を閉じるの…
…そうしてこの世界から去るの…
…そして…向こうの世界で、いろんな物事が始まる前の…大切な日に目覚めるの…
…ここは、その日がある場所なの…
…そこが、長い旅の果てに、辿り着いた場所なんだよ…
…でも、ここでの記憶は何ひとつ持っていけない…
…だから、またすべては同じ結果になってしまうかもしれない…
…でも、もし…助けたい人がいるなら…
…向こうの世界で光を探して…
光…?
…そう、光。
…向こうの世界に生きるたくさんの人の思いが、この世界では光として見えるように…
…向こうの世界では、わたしの思いが光として見えるはずだよ…
…わたしの思いは、世界の…
…たくさんの光たちの幸せを願って…
…もし、大切な人が不幸になるなら…
…それで、助けてあげてほしいの…
嫌だ…
僕は君を助けたいんだよ…。
…大丈夫。わたしは…
君を置いていくなんて、できるはずない…
この世界は…寂しすぎるから…
こんなに寒くて…凍えそうで…
僕がいなくなったら、君はまたひとりで…
この終わり続ける世界で…
ずっとひとりで…
…それは、わたしが望んだことだから…
…わたしは、見守っていく…
…ここから、ずっと…

…永遠に…
嫌だ…
……。
そんなの嫌だ…
……。

風の中、音が聞こえてきた。
それは、僕に遠い世界のことを思い出させた。
遠い春の日の思い出。

穏やかで、優しい陽だまりの中で、歌った唄があった。
短い時間の中で
小さな家族で歌った唄があった。

彼女の口が小さく動いていた。
その唄を歌っていた。
…だんご…だんご…
小さい命に、ずっと聞かせていた歌。
僕も歌った。
ふたりで歌った。
歌い続けた。
彼女が笑う。
僕も笑う。

ずっと…
ずっと、こうしていられればいいのに。

一際強い風が、僕らを薙いだ。

僕の体が…ばらばらに砕けた。
その中で、僕は彼女の手を求めた。
ずっと、つないでいたかった。
彼女が僕を見て叫ぶ。



……さようなら……

……パパっ……


CLANNAD
クラナド
Epilogue


ああ…
今、終わる。
町の思いに連れられて…
その長い、長い旅が。

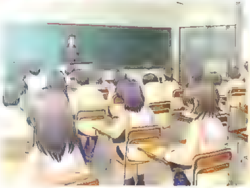
Back Ground

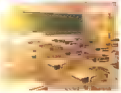
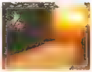
「CLANNAD」の世界を彩る美しい背景CGの数々。時間や季節の移ろいの他、物語にも大きく関わる"町並みの変化"に合わせて、膨大な枚数が用意されているのだ。細かな箇所まで丹念に描写された匠の技を堪能してくれ！

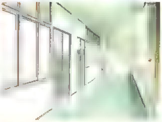
学園



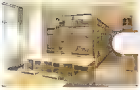


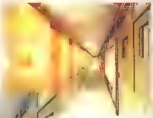


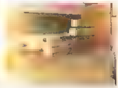



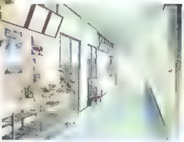


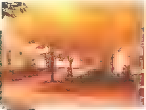




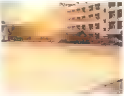






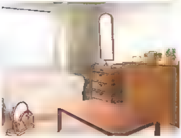


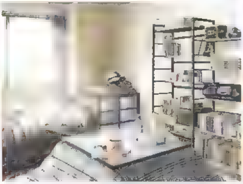












岡崎家



アパート



古河パン



伊吹家



一ノ瀬家



街

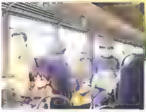


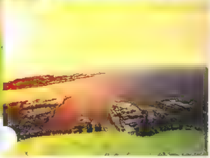
旅行先





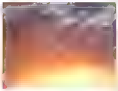




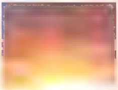


イメージ







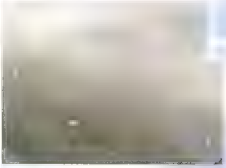


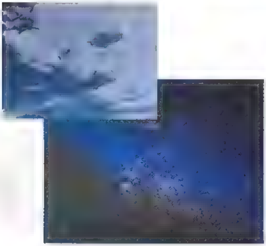


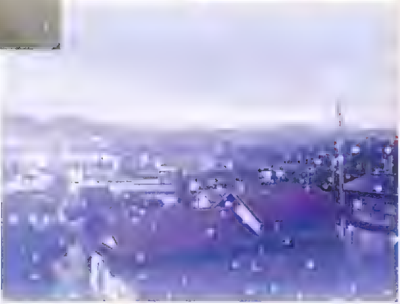












攻略



ゲームの流れ

本作は、主人公の学園生活を描いた"学園編"と、卒業後の物語を楽しめる"AFTER STORY"から構成されている。ただし、ゲーム開始時に遊べるのは"学園編"のみ。その先をプレーするためには、ゲーム中で入手できる"光"を集めなければならないのだ。この"光"の収集が、ゲーム全体を通じての大きな目的となるぞ。



学園編の目的

学園編はプレーヤーの選択次第で、10人のキャラクターのシナリオへと分岐していく。そのうち風子と渚を除く8人から"光"を集め、さらに風子ルートをクリアーした状態で渚ルートをクリアーすれば、タイトル画面に新たなメニューが追加され、AFTER STORYを遊べるようになるぞ。これら一連の流れをスムーズに実行できる攻略順序を以下に掲載したので、プレーの参考にしてほしい。

オススメ攻略順序



学園編

「光」を8個集め、
風子ルートをクリアーした状態で
渚ルートをクリアーする

AFTER STORY

「光」を13個集める

トゥルーEND

AFTER STORYの目的

学園編と違い、AFTER STORYにはシナリオ分岐がほとんど存在せず、渚との同棲生活を軸にしたストーリーが展開していく。ただし、淡々と物語を進めるだけでは真のエンディングへ到達することは不可能。下記のキャラクターの"光"をすべて回収することで、シナリオ中にトゥルーENDへ通じる新たな分岐が発生するのだ。

光を入手できるキャラクター



学園編"渚ルート"での行動に注意！

AFTER STORYは、直前にプレイした学園編"渚ルート"のセーブデータを引き継いだ状態からスタートする。つまり、渚ルートでの行動がAFTER STORYの展開に大きく影響するのだ。場合によっては学園編をやり直さなければならないこともあるので、攻略記事を参考にして効率よくゲームを進めてほしい。

進行状況に応じてタイトル画面が変化









相楽 美佐枝

4月15日、17日、18日に寮で美佐枝に話しかけており、その後に部屋へ通い続けていれば彼女のルートへ進入可能。最後に3連続で出現する3択は、ひとつ間違えただけでバッドENDが確定するので注意。

4月15日	話しかける
4月16日	NG 手伝う（渚ルート進入時発生）
4月17日	話しかける
4月18日	話しかける
	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月20日	NG ついていく→もう少し様子を見ている→手伝う
	また来ていいか訊く
	あくまで美佐枝さんの部屋へ（智代or有紀寧ルート進入時発生）
4月21日	叱ってくれるところ
	心配してくれるところ
	布団がいい匂いするところ

NG：クリアー不能となる選択肢

相談に来る女の子は渚or椋？

美佐枝の過去の恋愛話を聞き出すため、知り合いの女の子に恋愛相談をさせようとする主人公。この時、彼が美佐枝の元へ差し向ける女の子は、4月15日の行動により変化。渚と仲良くなっていれば彼女が、それ以外の場合は椋が選択されるぞ。どちらの相談もドキドキの内容となっているので、それぞれ試してみてくれ。

4月15日
中庭に下りる
また話を続ける
気になる



上記の選択肢以外



ADVICE 芳野さんへの対応には注意！

4月20日に"ついていく→もう少し様子を見ている→手伝う"を選択して芳野を助けると、その日に美佐枝の部屋を訪ねることができなくなり、彼女の攻略が不可能となってしまう。芳野には悪いが、美佐枝の攻略を目指すならば彼に関わらないようにすること。

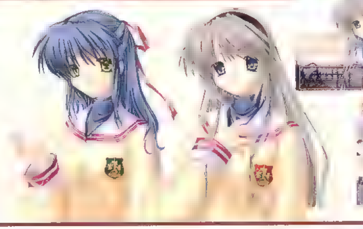


CHECK 美佐枝の"光"は智代ルートで入手可能

美佐枝ルートをクリアーするだけでは、彼女の"光"を入手することはできない。美佐枝の"光"を手に入れるためには、彼女のルートをクリアー済みの状態で智代ルートをプレーする必要がある。そこで一定の条件を満たせば、物語後半に美佐枝に関するイベントが発生し、終了後に"光"が手に入るぞ。詳細はP.88を参照のこと。

美佐枝と智代の意外な接点!?

かつての生徒会長である美佐枝と、次期生徒会長に立候補した智代。ゲーム中では、そんなふたりの関係が所々に描かれている。その内容は、智代が美佐枝の部屋を訪れてアドバイスを求めるなどのわかりやすいモノから、草野球ルート（P.99参照）で試合に負けた際に美佐枝が智代の元へ駆け寄るなどの何気ない描写まで様々。美佐枝の"光"の入手先が智代ルート上に設定されている理由は、そんな彼女たちの繋がりの深さにあるのかもしれないね。











坂上智代





智代ルートにはオマケ要素が満載！　ここで紹介している"春原へのコンボ"や"春原の顔面変形"イベントの他、風子絡みのイベント（P.93の風子攻略ページを参照）も存在する。どれも必見の内容だぞ。

4月15日	中庭に下りる
	また話を続ける
	成り行きを見守る
	興味がある
	気になる【64HIT／秋生参加条件】
	話しかける
4月16日	行く
4月17日	ついていく（後に出るほうの選択肢）
	校内で暇を潰す【64HIT／風子参加条件】
	寝ていく【64HIT／風子参加条件】
	話しかけてみる【64HIT／風子参加条件】
	話しかける【64HIT／美佐枝参加条件】
	引き受ける
4月18日	空き教室【64HIT／風子参加条件】
	もう少し見ている【64HIT／風子参加条件】
	寝にいく【64HIT／有紀寧参加条件】
	助ける
	話しかける
4月19日	もう、やめさせる
4月20日	NG　ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月21日	真面目に起きていく
	声をかける
	そうだな
	NG　あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	いや、そういうのじゃなくて
	もう、やめさせる
4月23日	あいつが演劇部を目指していたことを
4月24日	智代と居たいだけなのかもしれない
4月26日	学食で食べる【64HIT／幸村参加条件】
5月 5日	このままじゃいけないと思った
5月 6日	口出しする【64HIT／杏参加条件】
	よくない
5月11日	蹴り返す
	手伝う（美佐枝の"光"入手）

NG … クリアー不能となる選択肢
● … 64HIT達成用選択肢　　美佐枝の"光"入手用選択肢

CHECK vs春原64HITへの道

発生条件　幸村ルートをクリアーしている

学園祭当日、智代の攻撃で飛んできた春原を蹴り返せばコンボスタート！　左表に従い選択肢を選んでいけば、様々なキャラがコンボに参加し、最大値の64HITまで繋がるぞ。幸村のみ、選択肢に加えて"幸村ルート"のクリアーが参加条件となっているので注意！



CHECK 美佐枝の"光"の入手方法！

発生条件　美佐枝ルートをクリアーしている

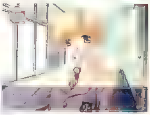
4月15日、17日、18日に寮で美佐枝に話しかけ、20日に彼女の猫を見つけていれば（ことみルートに進入していない＆芳野を手伝わないことが条件）、5月11日の学園祭の途中で選択肢が出現。美佐枝ルートを攻略済みなら、"手伝う"を選べば彼女の"光"が手に入る。



CHECK 春原の顔面がエラいことに……！

発生条件　"64HIT"を達成している＆トゥルーENDを迎えている

上記の発生条件を満たしたうえで智代ルートに入り、4月17日に"見に行く"を選ぼう。すると、智代の強烈な攻撃で春原の顔面に変化が……。その後、懲りずに智代に挑む度に彼の顔面は変化し続け、最終的に色々な意味で見られない顔になってしまうのだ（笑）。



ADVICE 渚の協力を得て窮地を脱出！

4月23日、他校の不良を撃退したところを教師に見咎められた、主人公と智代。このピンチを切り抜けるためには、15日に渚から"彼女が演劇部の設立を目指している"という話を聞いておくこと。偶然、近くに居合わせた渚の協力（？）で事態をごまかせるぞ。



CHECK 16日の渚への対応には注意！

4月16日の渚との会話中（渚ルート進入時発生）に登場する選択肢は、"ひとりでやらせる"を選ぼう。"手伝う"を選んでしまうと、後に智代ルートから離脱することになるぞ。ただし、特定の手順を踏みさえすれば、離脱を防ぐことは可能。そのためには、まず15日に"ムシする→サボる"を選び、ことみルートへ進入しておく必要がある。そして、18日に"これからはことみと食べる"を選んで渚ルートから離脱。20日に"図書室から立ち去る"を選んでことみルートから離脱すれば、智代ルートを最後まで進められるのだ。



宮沢 有紀寧





有紀寧と知り合いさえすれば、あとは資料室へ通うだけで彼女のルートに進入できる。ただし別のキャラのルートを並行して進めていると、そちらが優先されてしまうので、攻略の際は有紀寧一筋で！

4月18日	空き教室or教室に戻る（ことみor風子ルート進入時発生）
	寝にいく
	もう少し話をする

4月19日	旧校舎へ
	資料室へ
	もう少し話をする

4月20日	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月21日	NG 窓の外を見る（渚ルート進入時発生）
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	行く（20日に"手伝う"選択で強制）
	NG もう、やめさせる（智代ルート進入時発生）
4月24日	NG マジ？ いいのか？（杏＆椋ルート進入時発生）
	NG 引き受ける（春原＆芽衣ルート進入時発生）
	そのままにしておく
	いい
	このまま寝かす

有紀寧END（有紀寧の光入手）

NG　クリアー不能となる選択肢

ADVICE 有紀寧の心と身体を支えてあげよう



分け隔てのない優しい性格と献身的な振る舞いで、不良たちの心の支えとなっている有紀寧。終盤、そんな彼女が主人公に対してだけ甘えん坊な一面を見せるようになる。有紀寧のお気に入りは"膝枕"。お願いされたら快く引き受け、存分に甘えさせてあげよう。

おまじないの相手は誰？

有紀寧から教えてもらえる"自分のことを好きな子がわかるおまじない"、"一緒に体育倉庫に閉じ込められるおまじない"の相手は、それまでの主人公の行動によって変化する。全員分のイベントを見るのは手間がかかるが、その労力を補って余りある内容になっているので、ぜひ試してほしい。特に"体育倉庫"のイベントでは、本作の中では数少ないエッチなネタが楽しめるぞ。なお、ここに掲載している表以外の選択肢を選んだ状態で"一緒に体育倉庫に閉じこめられるおまじない"を実行した場合、その相手は春原になる。

	中庭に下りる
4月15日	まだ話を続ける
	気になる
4月16日	ひとりでやらせる
	空き教室or教室に戻る（ことみor風子ルート進入時発生）
4月18日	寝にいく
	もう少し話をする
	NG 助ける（智代ルート進入時発生）
4月20日	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月21日	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	行く（20日に"手伝う"で強制）

4月23日	やる
	NG マジ？ いいのか？（杏＆椋シナリオ進入時発生）
	NG 引き受ける（春原シナリオ進入時発生）
4月24日	する
	試してみる
	古河→渚

4月23日	やらない
	NG マジ？ いいのか？（杏＆椋シナリオ進入時発生）
	NG 引き受ける（春原シナリオ進入時発生）
4月24日	する
	試してみる
	古河→秋生

4月15日	成り行きを見守る
	興味がある
4月16日	行く
4月17日	ついていく
	引き受ける
4月18日	空き教室or教室に戻る（ことみor風子ルート進入時発生）
	寝にいく
	もう少し話をする
	助ける
4月20日	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月21日	NG 窓の外を見る（渚ルート進入時発生）
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	行く（20日に"手伝う"で強制）
	NG いや、そういうのじゃなくて
4月23日	やる
4月24日	NG マジ？ いいのか？（杏＆椋シナリオ進入時発生）
	NG 引き受ける（春原シナリオ進入時発生）
	する
	試してみる
	智代

※美佐枝のみ"体育倉庫に一緒に閉じ込められるイベント"はありません

4月15日	NG 気になる（渚ルート進入時発生）
	話しかける
4月17日	話しかける
4月18日	空き教室or教室に戻る（ことみor風子ルート進入時発生）
	寝にいく
	もう少し話をする
	話しかける
	NG 助ける（智代ルート進入時発生）
4月20日	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月21日	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	行く（20日に"手伝う"で強制）
4月23日	やる

4月15日	NG 気になる（渚ルート進入時発生）
4月18日	空き教室or教室に戻る（ことみor風子ルート進入時発生）
	寝にいく
	もう少し話をする
	NG 助ける（智代ルート進入時発生）
	NG 話しかける（美佐枝ルート進入時発生）
4月20日	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月22日	行く（20日に"手伝う"で強制）
4月23日	やる
4月24日	NG マジ？ いいのか？（杏＆椋シナリオ進入時発生）
	NG 引き受ける（春原シナリオ進入時発生）
	する
	試してみる
	杏

NG　クリアー不能となる選択肢



藤林杏&椋





双子の姉妹・杏&椋を攻略する際の行動は、途中まで同じでOK。4月28日の選択肢で各ルートに分岐するので、その直前の場面でセーブしておけば、効率よく両者のシナリオを楽しむことができるぞ。

4月15日	謝っておく
4月16日	追求してみる
4月21日	NG 窓の外を見る（渚ルート進入時発生）
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	とりあえず持っていく
	NG もう、やめさせる（智代ルート進入時発生）
4月23日	ついていく
4月24日	マジ？ いいのか？
4月25日	素直に校門へ向かう
4月26日	それでも良かったら

4月28日	長い髪が好き
5月 3日	練習をしてみる
5月 4日	アメジスト
5月 5日	キスをする
5月 7日	飛び出す

4月28日	短い髪が好き
5月 4日	タンザナイト
5月 5日	キスをする

NG…クリアー不能となる選択肢

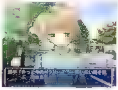
ADVICE クリアーが必須なのは杏ルートのみ



杏と椋のルートのうち、トゥルーENDを迎えるために必要な"光"を入手できるのは杏ルートのみ。実は、彼女のルートさえクリアーしていれば、椋ルートをプレーしなくてもゲームの進行には影響しないのだ。とはいえ、ファンならもちろん両方遊んでおくでしょ！



柊勝平





おそらく、ゲーム中で一番攻略が難しい勝平。選ぶ選択肢こそ多くはないものの、そのほとんどが彼に直接関わるモノではないため、とにかく気付きにくいのだ。プレー前に必要な選択肢をしっかりと確認しておくこと！

4月16日	NG 手伝う（春原ルート進入時発生）
4月18日	NG 放っておけない（ことみルート進入時発生）
4月18日or19日	NG もう少し話をする（有紀寧ルート進入時発生）
	ついていく
4月20日	もう少し様子を見る
	手伝う
	遅刻していく
4月21日	右に跳ぶ
	住所を調べて届けてやる
4月22日	NG とりあえず持っていく（杏&椋ルート進入時発生）
	手伝わない
4月24日	しない
	NG 引き受ける（春原&芽衣ルート進入時発生）
	宿を紹介してやる

勝平END（勝平の"光"入手）

NG…クリアー不能となる選択肢

ADVICE 難解なルート進入&クリアー条件



勝平と出会うための条件は、4月21日に学校へ遅刻して行き、通学路で背後に気配を感じたら右に跳ぶこと。ただし、前日の20日に芳野の仕事を手伝っていなければ、この時点ですでに手遅れ。無事にルートへ入ることができても、バッドENDが確定してしまうので気を付けよう。







春原兄妹は、杏&椋姉妹と違い、分岐することなくひとつのルート上でふたりのエピソードが語られる。ルートに入る選択肢がふたつしかないうえ、一度入ってしまえばクリアーまで一直線なので、難易度は高くないぞ。

4月15日	中庭に下りる【偽彼女イベント/渚選択条件】
	まだ話を続ける【偽彼女イベント/渚選択条件】
	成り行きを見守る【偽彼女イベント/智代選択条件】
	興味がある【偽彼女イベント/智代選択条件】
	気になる【偽彼女イベント/渚選択条件】
4月16日	行く【偽彼女イベント/智代選択条件】
4月17日	ついていく(後のほうに出る選択肢)【偽彼女イベント/智代選択条件】

4月17日	校内で暇を潰す【偽彼女イベント/風子選択条件】
	寝ていく【偽彼女イベント/風子選択条件】

4月17日	探しに出る【偽彼女イベント/風子選択条件】
	隣の教室を覗いてみる【偽彼女イベント/風子選択条件】

4月17日	話しかけてみる【偽彼女イベント/風子選択条件】
4月18日	空き教室【偽彼女イベント/風子選択条件】
	もう少し見ている【偽彼女イベント/風子選択条件】
4月20日	NG ここにいていいか訊ねる(ことみルート進入時発生)
4月21日	NG 窓の外を見る(渚ルート進入時発生)
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ(美佐枝ルート進入時発生)
4月22日	NG もう、やめさせる(智代ルート進入時発生)
4月23日	代わりに出る
	逃げる(杏&椋ルート進入時発生)【偽彼女イベント/椋選択条件】
4月24日	NG マジ?…いいのか?(杏&椋ルート進入時発生)
	引き受ける

春原兄妹END

NG クリア不能となる選択肢　偽彼女イベント発生用選択肢

ADVICE 芽衣からの電話は確実に受けること

4月22日、芽衣からかかってきた春原あての電話を、不在の彼に代わって受けることが攻略の第一歩。なお、渚、智代、ことみのルートを並行して進めていた場合は、本イベントが発生しなくなってしまう。彼女たちのルートは、早い段階で離脱しておくべし。



恋人役を誰にお願いする?

妹の目を欺くため、恋人役を演じてくれる女の子を探す春原。お願いできる相手は、それまでの行動で決まるぞ。左表の指示に従い進めていれば、候補者全員に依頼可能。その際の選択肢は下記を参照してくれ。なお、誰を選んでも最終的には早苗が恋人役となる。



4月24日　引き受ける

- それ以外
- 藤林姉妹
  - 姉→杏
  - 妹→椋
- それ以外 / 古河にする
- それ以外 / 智代にする
- それ以外 / 風子にする

息ピッタリにハモるふたり　俺にする×3

恋人役を決める際、どの女の子も選ばないと登場する"俺にする"の選択肢。実はコレ、選ぶ度に微妙にメッセージが変化し、最大3種類の会話が繰り広げられるのだ。こんな細かな箇所まで気を配る、制作スタッフの心意気には脱帽です!(笑)



20日に芳野を手伝えばイベントが追加!

20日に"ついていく→もう少し様子を見ている→手伝う"を選んで芳野と知り合っていれば、春原兄妹ルート上で、彼と芽衣にまつわるイベントが追加される。ゲームの進行には影響しないが、印象深い内容のエピソードとなっているので、ぜひ見てほしい。





一ノ瀬ことみ



ゲーム開始直後の4月15日に椋をムシしないと、ことみルートへ入れなくなってしまう。また進入後も、バッドENDが確定してしまう選択肢が多数登場するので、油断せず慎重にプレーしよう。

4月15日	ムシする
	サボる
	食べる
	中庭に下りる
	また話を続ける

4月15日	ムシする
	中庭に下りる
	また話を続ける
4月16日	サボる
	食べる

4月17日	サボる
	ついていく
4月18日	ページを切ってないか調べる
	図書室
	図書室に入る
	放っておけない
	これからはことみと食べる（渚ルート進入時発生）
4月19日	後を追って書店に入る
	家まで送ると申し出る
4月20日	ここにいていいか訊ねる
	読む
4月21日	ちょっとからかってみる
4月29日	外出する
4月30日	ことみを助ける
5月 3日	今はまだ遅いますが
5月 4日	NG 邪魔者たちを追い払う→意地でも二人きりでデートする
5月 5日	告白する
	今は黙っておく（5日に"やめておく"選択またはことみの感情値一定以下で発生）
5月10日	続ける
5月11日	「あきらめるな」と言う
	続ける

ことみEND（ことみの"光"入手）

NG……クリア不能となる選択肢　♦……感情値の上昇に関わる選択肢

感情値満タンでテキストに変化が！

ことみルート上の選択肢の中には、彼女の"感情値"を上昇させるモノが存在する。感情値を最大まで上げれば、物語終盤の一部のメッセージが変化。主人公とことみの繋がりの深さがよくわかる会話が展開するぞ。攻略には関係しないが、ぜひ試してみてほしい。



旅行カバンの足取りを追え！

物語終盤、ことみの元に届けられる亡き両親の旅行カバン。その際、画面に映し出される様々な言語のメッセージと表示される順番から、カバンは以下のようなルートを経て彼女の元へ辿り着いたと推測される。なんと12ヵ国を巡る長い旅路の末の帰還だったのだ

1
6 यदि तुम्हे यह अटैची मिले तो कृपया अपनी पुत्री के पास भेज देना
4 Als u deze koffer vindt, breng ze dan naar onze dochter
3 اذا وجدت هذه الحقيبة الرجاء ارسلها الى ابنتنا
9 Se encontrar esta mala, por favor envie-a para nossa filha
11 если вы найдёте этот чемодан, то отправьте его нашей дочери пожалуйста.
この鞄を見つけたら、どうか娘に届けてください
7 Kalau anda menemukan tas ini, mohon mengembalikan kepada putri kami.
2 Si vous avez trouvé ce sac, veuillez l'envoyer à notre fille
10 이 가방을 발견하시면 제 딸 앞으로 보내주십시오
12
5 Se trovi questa borsa, prego di portarla alla nostra figlia
8

番号	言語	国
1	英語	イギリス
2	フランス語	フランス
3	アラビア語	エジプト
4	オランダ語	オランダ
5	イタリア語	イタリア
6	ヒンドゥー語	インド
7	インドネシア語	インドネシア
8	ペルシャ語	イラン
9	ポルトガル語	ポルトガル
10	韓国語	韓国
11	ロシア語	ロシア
12	中国語	中国

→ことみの元へ

ADVICE 友達は大切にしよう

ことみを攻略する際、重要となるのが他のキャラへの対応。特にゲーム序盤の渚や椋に対する選択は、直接ルート進入の成否に関わってくる。また終盤、彼女たちや杏がデートへの同行を求めてきたら、快く応じてあげよう。友達を追い払うなんて、言語道断だぞ！





伊吹 風子



途中までは渚ルートとほぼ共通だが、4月26日の選択次第で風子ルートへ分岐する。また、24日に渚を抱きしめるか、そのままでいるかでお話が若干変化。抱きしめると見られない展開もあるので注意！

	中庭に下りる
4月15日	また話を続ける
	気になる
4月16日	走って買いに行く（15日に…する選択で発生）
	手伝
	探しに出る
4月17日	隣の教室を覗いてみる
	話しかけてみる
4月18日	空き教室
	もう少し見ている
4月21日	窓の外を見る
	暇だから 鼻からジュースを飲ませてみる
4月22日	悪戯をする
	どこかに置いてくる／Lv1
	違う（後に出るほうの選択肢）
	気分転換
4月23日	呼び止める
	悪戯をする
	どこかに置いてくる／Lv2
	呼びとめる
4月24日	悪戯をする
	話している相手をすり替える／Lv1

4月24日	そのままでいる
	呼びとめる
4月25日	悪戯をする
	話している相手をすり替える／Lv2
	訊いてみる
4月26日	手伝うことにした
	鼻からジュースを飲ませる／Lv2
4月27日	おもむろに鼻をつまむ
	悪戯をする
4月28日	抱いている彫刻をすり替える／Lv1
	悪戯をする
4月29日	抱いている彫刻をすり替える／Lv2
4月30日	鼻を揉む
5月11日	代わる

4月24日	抱きしめる
4月26日	訊いてみる
	わかった。付き合うよ
5月11日	代わる
	このままでいてもいいか？

キスしてもいいか？ ／ このままでいてもいいか？

NG：クリアー不能となる選択肢　悪戯マスター用選択肢

ADVICE エンディングは2パターン

4月24日に渚を抱きしめていなければ物語終盤、風子にキスするか、そのままでいるかを選ぶ選択肢が登場。ここでの決定次第でエンディングが分岐する。なお、24日に渚を抱きしめていた場合、風子にキスする選択肢が登場せず、もう一方の結末しか見られない。



特別授業の教師役を務めるのは？

5月3日の特別授業の教師は、2～3日までの行動次第で右のように決まる。なお、渚、朋也、春原は、いずれの場合も最終的に早苗が代役を買って出てくれるぞ。

5月2日	無理を言う	幸村
5月2日	他を当たる／…する	
	く	渚
5月3日	ちょき…	朋也
	ぱ…ぐ	春原

風子への悪戯をマスターせよ！

すべての悪戯を行い、隠しスキル"鼻をつまむ&揉む"を覚えれば"風子マスター"の称号が得られる。左表の手順は、その一例。条件次第で内容が変わる悪戯もあるので、下表を参考に様々な手順を試そう。

日付により選択できない悪戯

4月26日	話している相手をすり替える&抱いている彫刻をすり替える
4月28日	どこかに置いてくる&話している相手をすり替える
4月29日	話している相手をすり替える

4月24～26日	Lv1	男子トイレに置いてくる	4月23～25日	Lv…	上履きをすり替える
4月25～26日	Lv2	校長室に置いてくる	4月24～25日	Lv2	人体模型とすり替える
4月25～26日	Lv2	資料室に置いてくる	4月28日	Lv不問	肖像の顔…すり替える
4月29日	Lv不問	現生の部屋に置いてくる	4月29日	Lv不問	ス…すり替える

※4月18日…資料室…条件

CHECK 智代ルートに風子……参上！

発生条件

風子マスターになっている&トゥルーENDを迎えている

風子ルートを"風子マスター"となった状態でクリアーし、さらに一度トゥルーENDを迎えたうえで智代ルートをプレーしよう。すると、ゲーム中の様々なシーンで「風子…参上！」のメッセージと共に風子が登場。彼女のシュールな行動を楽しむことができるぞ。"風子……参上！"イベントの発生ポイントと、そのために必要な選択肢を右に掲載したので、参考にして全イベントを確認してくれ。

5月6日	よ…な
5月11日	振り返す
	…中の…か…
5月13日	「風子…参上」

NG…クリアー不能となる選択肢

	中庭…りる
4月15日	また話を続ける
	成り行きを見守る
	興味がある
4月16日	…く
	「い…手伝う」（渚ルート進入時発生）
	ついていく（後に出るほうの選択肢）
4月17日	校内で暇を潰す
	置いていく
	話しかけてみる
	…る
4月18日	空き教室
	もう少し見ている
	助ける
4月19日	もうやめさせる
	真面目に起…
	声をかける
4月21日	そうだな
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	いや、そういうのじゃなくて
	もうやめさせる
4月23日	「風子…参上」
	あ、つか演劇部を目指してたことを
4月24日	智代と帰…だけなのかもしれない
	「風子…参上」
5月2日	「風子…参上」
5月5日	…のまま…いけない…と思った
5月6日	…
	「風子…参上」
	…トゥルーENDを迎えて風子マスター…発生するので注意



幸村俊夫





幸村を攻略する際に選ぶ選択肢は、途中まで渚ルートとまったく一緒で構わない。そのうえで4月29日に公子と出会っておき、翌日のバスケ対決で負ければ、幸村ルートへと分岐していくぞ。

ADVICE バスケ対決でわざと負けよう！

4月30日に行われるバスケ対決で負けるためには、試合中の選択肢で、最後のシュートを自分以外のメンバーに任せること。なお、椋、風子、有紀寧、渚のいずれかが助っ人としてチームに加入している場合、選択肢は登場せず、無条件で敗北が決定するぞ。



熱血鬼教師・幸村、復活!?

物語終盤に語られる、幸村の意外な過去。なんと彼は、以前勤めていた学園で多くの武勇伝を作った熱血教師だったのだ！　幸村ルートクリアー後、智代ルートをプレーして幸村の"春原へのコンボ"参加条件を満たせば、温厚な仮面の下の素顔を垣間見られるかも？



ADVICE 家族の絆を取り戻せ！

文化祭での演劇の発表直前、かつて自分のために両親が夢を諦めたことを知り思い悩む渚。そんな彼女を救えるのは、当事者である秋生と早苗のみ。5月11日の朝に秋生を励ませば、彼が演劇の応援に駆け付けてくれるので、一緒に渚を勇気付ける言葉を叫ぼう。



4月15日	ムシする
	中庭に下りる
	また話を続ける
	成り行きを見守る
	興味がある
	話しかける
4月16日	行く
	走って買いに行く（15日にムシする選択で発生）
	手伝う
4月17日	ついていく（後のほうに出る選択肢）
	探しに出る
	隣の教室を覗いてみる
	話しかけてみる
	NG　これからはことみと食べる（ことみルート進入時発生）
4月18日	空き教室
	もう少し見ている
4月20日	ついていく
	もう少し様子を見ている
	手伝う
4月21日	窓の外を見る
4月23日	追う（後のほうに出る選択肢）

4月23日	代わりに出る
4月24日	抱きしめる
4月26日	NG　訊いてみる（風子ルート進入時発生）
	ああ
4月27日	［illegible］
4月28日	新校舎で探す
	二階を探す
	説明する

4月23日	出ない
4月24日	抱きしめる
4月26日	NG　訊いてみる（風子ルート進入時発生）
4月28日	新校舎で探す
	三階を探す
	説明する
	対策を練る

4月29日	風子のために光を使用

4月30日	最後は杏に
幸村END【幸村の"光"を入手】	

4月30日	最後は俺に
5月 2日	好き
5月11日	あんたはいい父親だ
5月11日	叫ぶ

NG　クリアー不能となる選択肢
バスケメンバー勧誘用選択肢
AFTER STORYクリアーに必須な用選択肢



古河渚





渚ルートでの行動は、AFTER STORYに引き継がれることになる。彼女を攻略する際は、クリアーに必要な選択肢だけではなく、後の展開に影響を与える選択肢にも注意を払いながら進めていくこと。

渚ナルシストバージョン!?

4月23日に芽衣からの電話を受け、26日にやって来た彼女に寮の案内を頼まれたら快く引き受けよう。さらに翌日、渚が「デートを中止して芽衣とパン屋を手伝いたい」と言ってくるので"いい"を選択。すると28日の夕方、芽衣が「世話になっているお礼に主人公と渚の仲を深めたい」と申し出てくる。その内容は、自分に自信を持てない渚を意識改革するというモノ。ここで"好きにさせる"を選ぶと、翌日のデートでナルシストになった渚の姿を楽しめるぞ。



AFTER STORYに影響を与える選択肢

4月20日に通学路で見知らぬ男に呼び止められたら、"ついていく→もう少し様子を見ている→手伝う"を選んで芳野と知り合っておくこと。無視しても渚ルートをクリアーすることはできるが、AFTER STORYで芳野の"光"を入手できなくなってしまうのだ。同様に、5月2日に早苗に対して"好き"と答えておかないと、AFTER STORYで彼女の"光"を手に入れられなくなる。再度、渚ルートをプレーし直さなくてもいいように、しっかりと押さえておこう。



風子のために"光"を使おう!

発生条件 "光"を1個以上集めており、風子ルートをクリアーしている

上記の条件を満たしたうえで4月29日に公子と会い、彼女から入院中の妹・風子の話を聞こう。すると、その回復を祈る心に反応してか、集めた"光"のひとつが風子のために消費されるぞ。このイベントが、AFTER STORYで風子と公子、それぞれの"光"を入手する条件となっているので確実に発生させること。なお、29日に公子と会うためには、芽衣が来ていれば26日に"ああ"、27日に"いい"を、来ていなければ28日に"対策を練る"を選択しておく必要がある。



芽衣が練習の見学に来るぞ

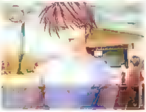
芽衣が春原の様子を見に来ている場合、特定の条件を満たすことで4月29日にバスケの練習の見学に来る。ひとつめの条件は、28日にバスケのメンバーを探す際、誰も勧誘しないこと。もうひとつは、26日に芽衣に寮の案内を頼まれた時に断るか、寮の案内を引き受けたうえで27日に"いい"を、28日に"練習させる"を選択することとなっている。ゲームの進行上、芽衣が見学に来るメリットはないが、彼女の春原に対する痛烈な叱咤は一見の価値があるぞ。



バスケ対決のメンバーを探せ!

勝利条件 杏、智代、美佐枝、秋生、芳野のいずれかをメンバーに入れ、4月30日に"最後は俺に"を選択する

バスケの試合のメンバーに加わるキャラクターは、4月28日の選択とそれまでの行動により、下記の9人のうちのいずれかに決定される。中には、メンバーにした時点で敗北が決まるキャラもいるが、それぞれに専用の展開が存在するので、ぜひ試してほしい。左ページの表の指示に従い行動していれば、28日の選択を変えるだけで、ほぼすべてのキャラをメンバーに迎えられるはずだ。ただし、秋生、芳野、渚の3人のみ、26日の選択も影響するので注意しよう。



4月28日	新校舎で探す
	三階を探す
	説明する

4月28日	新校舎で探す
	二階を探す
	馬鹿のやり収め

4月28日	旧校舎で探す
	資料室で探す
	頼まない
	美佐枝さんにする

4月26日	NG 幸村をメンバーに入れる
4月27日	いい
4月28日	❗新校舎の二階&三階、旧校舎の空き教室&資料室を回り、誰もメンバーにしない。
	芽衣ちゃんと遊ばせる

4月26日	探す
	幸村をメンバーに入れる
4月28日	❗新校舎の二階&三階、旧校舎の空き教室&資料室を回り、誰もメンバーにしない。

4月28日	新校舎で探す
	二階を探す
	めんどくさいな
	頼む、メンバーになってくれ

4月28日	旧校舎で探す
	空き教室を探す
	いい

4月28日	旧校舎で探す
	資料室を探す
	頼む

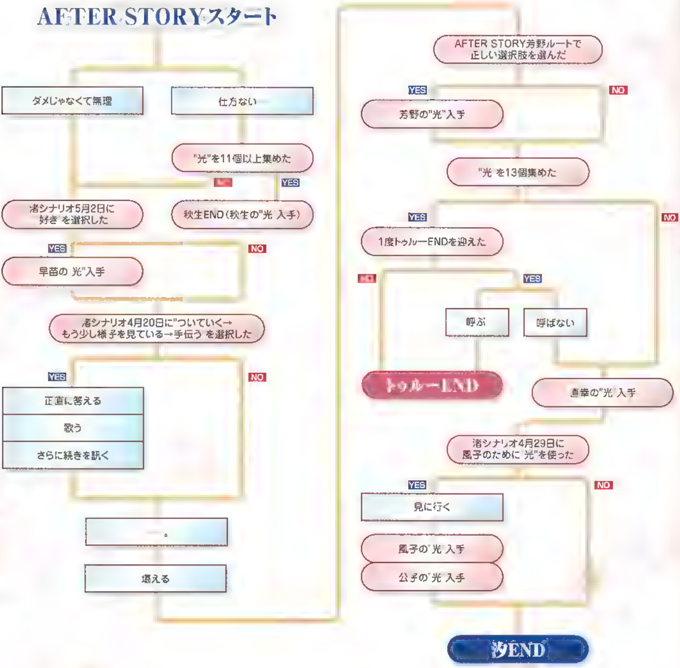
4月26日	NG 幸村をメンバーに入れる
4月28日	❗新校舎の二階&三階、旧校舎の空き教室&資料室を回り、誰もメンバーにしない。
	練習させる

NG……クリア不能となる選択肢

AFTER STORY

その名のとおり、学園を卒業した主人公の"その後の物語"が描かれるAFTER STORY。渚との同棲、就職、結婚、汐の誕生、そして渚との別れ……と、様々なドラマが紡がれていくストーリーの中で、6人のキャラクターの"光"を手に入れ、トゥルーENDへ到達することが目的となる。ただし、"光"の入手には様々な条件が設定されているうえ、その条件がすでにプレーし終えたはずの学園編での行動と絡んでいる人物も多く、それを知らなければ延々と同じ展開を繰り返す無限ループに陥りかねない。本攻略の内容をしっかりと理解して、スムーズなクリアーを目指してくれ。なお、もっとも効率よくAFTER STORYを進めた場合、1周目に早苗、芳野、直幸、風子、公子の"光"を手に入れ、2周目で秋生の"光"を入手して全13個の"光"を回収。そして、3周目のプレーでトゥルーENDを迎えることが可能となっているぞ。





ちょっとエッチな渚さん

AFTER STORY中の主人公の行動次第で、渚とちょっぴりエッチなことが楽しめる、男性ユーザー必見のイベントが発生するぞ。本イベントを見るためには、渚の入浴中に脱ぎ立ての下着に触ろうとしてみたり、就職のお祝いにエッチなことをお願いしようとしてみたり、彼女の留守中にタンスを漁ろうとしてみたり……とにかく煩悩丸出しで選択肢を選んでいけばオッケー。その後、秋生からエッチな本を借りたことが渚にバレた際、彼女から女の子の裸が見たいか聞かれるので、ありのままの気持ちを伝えよう（笑）。

5月 5日	ばれなければいいと開き直る
5月 6日	いや、言葉以外で
	エッチなこととか
5月12日	タンスを漁る
	オッサンの秘蔵エロ本
	見たいと言う



秋生vsバスジャック

発生条件 "光"を11個以上集めている

渚から、昔の演劇仲間の公演を見に行く秋生に代わり店の手伝いを頼まれたら、"仕方がない…"を選択しよう。この時、"光"を11個以上集めていれば、公演先へ向かう秋生の乗ったバスがジャックされる事件が発生。一連のイベントの後、彼の"光"が手に入るぞ。



渚の卒業式の出席者を集めよう！

渚の卒業式には、デフォルトで出席する春原や秋生、早苗、幸村の他、学園編・渚ルートでの行動次第で様々なキャラクターが駆けつけてくれるぞ。フルメンバーを集めるための選択肢表を掲載したので、これを参考にして渚の卒業を盛大に祝福してあげよう。



4月15日	中庭に下りる
	また話を続ける
	成り行きを見守る【智代参加条件】
	興味がある【智代参加条件】
	気になる
	行く【智代参加条件】
4月16日	走って買いにいく（15日に"ムシする"選択で発生）
	手伝う
4月17日	ついていく（後に出るほうの選択肢）【智代参加条件】
4月18日	引き受ける【智代参加条件】
	助ける【智代参加条件】
	NG これからはことみと食べる（ことみルート進入時発生）
4月21日	窓の外を見る
4月22日	智代に話しかける【智代参加条件】
	藤林姉妹に相談【杏&椋参加条件】
4月23日	追う（後のほうに出る選択肢）
	代わりに出る【芽衣&美佐枝参加条件】
4月24日	抱きしめる
4月26日	NG 訊いてみる（風子ルート進入時発生）
	ああ【芽衣&美佐枝参加条件】
4月27日	いい【芽衣&公子参加条件】
4月28日	新校舎で探す【智代参加条件】
	三階を探す【智代参加条件】
	いける【智代参加条件】
	馬鹿のやり収め【智代参加条件】
4月30日	最後は俺と
5月11日	あんたはいい父親だ
	叫ぶ

NG　クリアー不能となる選択肢

杏&ボタンのその後

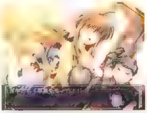
渚の卒業式に杏が出席していれば、後々の場面で、幼稚園の先生として働く彼女と再会できる。そこでしか見られない専用の立ちCGが用意されている他、ウリボウから立派なイノシシへと成長を遂げたボタンも登場するので、お見逃しなく。



早苗さんの学習塾

発生条件 渚ルートの5月2日に"好き"を選択している

自宅で学習塾を開いている早苗と、彼女を慕う生徒たちとの心温まるやり取りが展開するイベント。終了後には、彼女の"光"を手に入れることができる。なお、本イベントを発生させるためには、学園編・渚ルートの5月2日に"好き"を選んでおく必要があるぞ。



奇跡の先に真のEDが……！

発生条件 "光"を13個集めている

ゲーム中で13個の"光"を入手していれば、渚の出産シーンで物語が新たな展開へ向かい、待望のトゥルーENDへ到達できる。なお、一度トゥルーENDを見た後は、同場面に選択肢が登場。選択次第でトゥルーEND、夕ENDの各ルートへ自由に入れるようになるぞ。



芳野さんが音楽活動を再開!?

発生条件 渚ルートの4月20日に"ついていく→もう少し様子を見ている→手伝う"を選択している

上記の条件を満たしていれば、移動中の軽トラの中で芳野との会話イベントが起きる。その後に出現する選択肢をすべて正しく選べば、後日、彼が音楽活動の再開を決意。同時に芳野の"光"を入手できるぞ。なお、彼が制作するCDのタイトルの変遷は必見です。



風子の目覚め&公子の結婚

発生条件 学園編で風子のために"光"を使っている

学園編・渚または幸村ルートで風子のために光を使用していれば、秋生から早苗が公園で友達と会っているという話を聞ける。ここで"見に行く"を選べば、長い眠りから覚めた風子から"光"を入手可能。その後の公子の結婚式イベントで彼女の"光"も手に入るぞ。

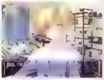


OTHER EPISODE

これまでの攻略記事に従ってトゥルーENDを迎えただけでは、「CLANNAD」のすべてを遊び尽くしたことにはならない。エピローグ中に出てくる「楽しいことは・…これから始まりますよ」のメッセージが示すとおり、本作の醍醐味はここから物語には直接関係しないながら、「CLANNAD」の魅力を語るうえで欠かすことのできない、遊びごころあふれる隠し要素の数々。それらを堪能する楽しみが残っているのだ。智代ルート上の"春原へのコンボ"や、風子ルート上の"悪戯マスター"など、すでに紹介済みの各キャラクターにまつわるイベントの他にも、ゲーム中には様々な隠し要素が存在している。中には、それ自体がひとつのストーリーとして完結しているモノや、あまつさえ専用のエンディングが用意されているモノも。ここでは、徹底検証の末に見つけたそれらの隠し要素を大紹介！ 参考にして、今度こそ本作のすべてを遊び尽くしてくれ





禁断の関係END

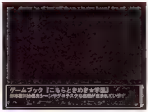
春原と友情を超えた関係で結ばれるエンディング。すべての女性キャラと知り合ったうえで、その全員と関係を絶つ行動をとれば辿り着ける。当然ながら（？）本エンディングはバッドEND扱いとなり、到達後はスタッフロールを挟まずタイトル画面に戻されるぞ。

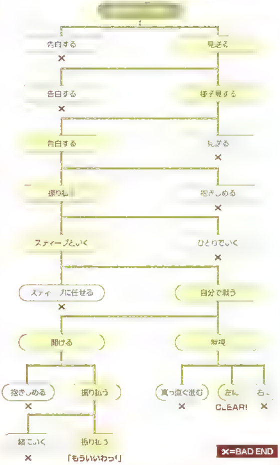


4月15日	ムシする【杏＆椋ルート離脱】
	サボる
	中庭に下りる
	まだ話を続ける
	成り行きを見守る
	興味がある
	気になる
	放っておく【美佐枝ルート離脱】
4月16日	行く
	走って買いに行く
	手伝う
4月17日	ついていく（後に出るほうの選択肢）
	サボる
	ついていく
	探しに出る
	隣の教室を覗いてみる
	立ち去る【風子ルート離脱】
4月18日	引き受ける
	図書室
	図書室に入る
	放っておけない
	これからはことみと食べる【渚ルート離脱】
	助ける
4月19日	もう、やめさせる
	旧校舎へ
	資料室へ
	立ち去る【有紀寧ルート離脱】
4月20日	図書室から立ち去る【ことみルート離脱】
4月21日	真面目に起きていく
	声をかける
	そうだな
4月22日	迷惑だ【智代ルート離脱】
4月23日	ああ

ゲームブック『こちらときめき☆学園』完全攻略！

"禁断の関係END"ルート中の4月18日、椋の占いを春原ではなく自分で試せば、20日の夕方に春原の部屋でゲームブックを発見できる。その際に"遊んでみる"を選択すれば実際にプレーすることが可能なので、下記のチャートを参考にして読み進めていこう。





草野球END

学園の仲間たちと共に、古河秋生率いる草野球チーム・古河ベイカーズの一員として試合に挑む熱血スポ根ストーリー。下表のとおりに行動して見事勝利を収めれば、試合に出場した各キャラクターの詳細な成績が鑑賞できる、専用のエンディングが流れるぞ。



4月15日	成り行きを見守る
	興味がある
4月16日	行く
4月17日	ついていく（後に出るほうの選択肢）

4月17日	校内で暇を潰す
	寝ていく

4月17日	探しに出る
	隣の教室を覗いてみる

4月17日	話しかけてみる
	引き受ける
4月18日	空き教室
	もう少し見ている
4月18or19日	NG もう少し話をする（有紀寧ルート進入時発生）
4月20日	ついていく
	もう少し様子を見る
	手伝う
	NG 窓の外を見る（渚ルート進入時発生）
4月21日	NG そうだな（智代ルート進入時発生）
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月23日	出ない
4月24日	NG マジ？ いいのか？（杏&椋ルート進入時発生）
	する
4月25日	忠告をしていた
	可哀想だから止めてやる
	春原に買いに行かせる
4月28日	いける
	止める
	芝居打つ

NG …クリアー不能となる選択肢

メンバーにより試合結果が変化

4月28日の勧誘時の選択次第で、風子と芳野&芽衣がメンバーに加わらなくなってしまう。すでにこの時点で試合の負けは決定だが、さらにメンバー構成により結果が微妙に変化するぞ。ちなみにメンバーから外れた風子や芳野&芽衣の穴は、早苗、椋、渚の順で優先的に埋められていくことになる。

風子	芳野&芽衣×	1点差で負け
風子×、	芳野&芽衣	2点差で負け
風子×	芳野&芽衣×	試合中止

ジェット斉藤現る！

謎のキャラクター・ジェット斉藤。彼を登場させるためには、春原の誘いを何度も断り、「来ないのかよっ！」のツッコミを言わせ続けよう。すると、ワンパターンの展開に飽きた春原に代わり、3度目で幸村が、4度目で待望のジェット斉藤がツッコんでくるぞ。



4月15日	成り行きを見守る
	興味がある
4月16日	行く
	NG 手伝う（渚ルート進入時発生）

4月17日	見に行く
	放っておく

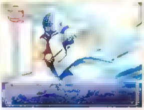
4月17日	教室に残る
	ついていく

4月17日	放っておく

4月18日	NG もう少し見ている（風子ルート進入時発生）
	寝ていく
	もう少し話をする
4月20日	NG ついていく→もう少し様子を見ている→手伝う
	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月21日	遅刻していく
	右に跳ぶ
	住所を調べて届けてやる
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	行かない
	手伝わない

4月17日	校内で暇を潰す
	寝ていく
	話しかけてみる
4月18日	空き教室
	もう少し見ている
	寝ていく
	もう少し話をする
4月20日	NG ついていく→もう少し様子を見ている→手伝う
	NG ここにいていいか訊ねる（ことみルート進入時発生）
4月21日	遅刻していく
	右に跳ぶ
	住所を調べて届けてやる
	NG あくまで美佐枝さんの部屋へ（美佐枝ルート進入時発生）
4月22日	行かない
	手伝わない





NG …クリアー不能となる選択肢

主人公の名前によりテキストが変化！

本作では、タイトル画面で"NAME"の項目を選択することで"名前変更画面"へ移行し、主人公の姓名を自由に変えることが可能。この時、特定の姓名を入力するとゲーム中のメッセージの一部が変化するのだ。メッセージが変化するシーンと、その条件となる名前をまとめた表を以下に掲載したので、参考にして全パターンを試し、制作スタッフのコダワリを感じてほしい。その際、同一シーンで複数のパターンがある場合は、直前のシーンでセーブ→タイトル画面に戻って名前変更→ロードを繰り返せば、効率よく調べられるぞ。

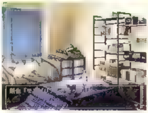




	4月17日	智代に対決を挑む春原（2度目） ※春原顔面変形イベント中は発生しない	名前が"朋也"以外	岡崎　太郎
	4月18日	主人公の名前を覚えようとする有紀寧	苗字が"蛭子"	蛭子　朋也
		資料室に不良たちが続々と登場	苗字が"蛭子"	蛭子　朋也
	4月16日	古河一家と食卓を囲んで	苗字に"銀河"or"宇宙"or"コスモ"が含まれていて名前が"シャア"	銀河　シャア
			苗字に"銀河"or"宇宙"or"コスモ"が含まれていて 名前が"シャア"以外	銀河　朋也
	4月17日	秋生＆早苗が夜の公園に渚を迎えに来る	姓名が"コスモ 斉藤"	コスモ　斉藤
			姓名が"大宇宙 太郎"	大宇宙　太郎
			姓名に"銀河"or"宇宙"or"コスモ"が含まれていて "コスモ 斉藤"or"大宇宙 太郎"以外	銀河　朋也
	4月19日	パン屋で秋生と会う	苗字が"銀河"or"宇宙"or"コスモ"	銀河　朋也
			名前が"銀河"or"宇宙"or"コスモ"	岡崎　銀河
			苗字が"銀河"or"宇宙"or"コスモ"以外で名前が"ウジ虫"	岡崎　ウジ虫
	4月19日	渚を探しに行くところを早苗に呼び止められる	苗字が"宇宙"	宇宙　朋也
	5月 2日	早苗が学習塾を開いていることを知る	苗字か名前が"歌丸"	岡崎　歌丸

春原のテープに吹き込むラップ

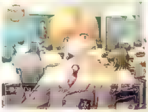
ゲーム開始直後、春原のテープに吹き込めるラップ（？）は、右の7種類のローテーション。手っ取り早く全パターンを試したい人は、翌日の昼、教室で春原に文句を言われた後にタイトル画面へ戻り、改めてゲームをスタートしよう。次のラップが選択されるぞ。



1	モンゴリアンチョップ
2	陸に上がって進化を遂げたウーパールーパー
3	メイド イン チャイナ
4	クックドゥードゥルドゥー！
5	アオァナガノクロオオスノハシモトキ
6	ちょんまげ！
7	やべ、言う前に自分で笑っちまった

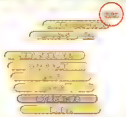
寝ぼけた春原が授業中に歌うのは？

4月15日の授業をサボらず受けた際に見られる、寝ぼけた春原が歌う曲は、その前日、彼のテープにラップを吹き込んだか否かで変化する。吹き込んだ場合（途中でやめた場合も含む）は"アリス"を、吹き込まなかった場合は"タケノコ"を熱唱してくれるぞ。



ゲームをクリアーしたら感想を送ろう！

一度、トゥルーENDを迎えた後、ゲーム中に右クリックでメニューを呼び出すと、画面右上に"Review"ボタンが追加されている。PCがネットに接続していれば、ここからkeyのHP内のレビュー投稿フォームへアクセスできるぞ。キミの熱い思いを伝えよう！



制作資料



Illustration Gallery

『CLANNAD』の販促用に描かれたイラストの数々を一挙大公開！　雑誌の表紙や付録、店頭用ポスターはもちろん、ユーザー向けの年賀状やコミケ用グッズなどに使われたレア画像も、残さず掲載しちゃうぞ！



「コミックマーケット61」
設定資料集ピンナップイラスト

「コミックマーケット63」
販促紙袋イラスト

「コミックマーケット63」
販促テレカ台紙イラスト

「Keyオフィシャルホームページ」
発売記念イラスト






CLANNAD
発売中です



Illustration Gallery

『CLANNAD』の販促用に描かれたイラストの数々を一挙大公開！　雑誌の表紙や付録、店頭用ポスターはもちろん、ユーザー向けの年賀状やコミケ用グッズなどに使われたレア画像も、残さず掲載しちゃうぞ！



「コミックマーケット61」
設定資料集ピンナップイラスト

「コミックマーケット63」
販促紙袋イラスト

「コミックマーケット63」
販促テレカ台紙イラスト

「Keyオフィシャルホームページ」
発売記念イラスト

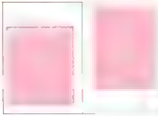












(株)エンターブレイン「DearMy...」
2003年5月号表紙

(株)角川書店「エース桃組」
2003Autumn ポスターイラスト





(株) エンタープレイン「DearMy...」
2003年5月号表紙
(株) 角川書店「エ　ス桃組」
2003Autumn ポスタ　イラスト





(株) メディアワークス
「電撃Gsマガジン」
2003年1月号下敷きイラスト

(株) メディアワークス「電撃姫」
2003年2月号下敷きイラスト

(株) エンターブレイン
「マジキュー プレミアム」
SEPTEMBER2003 表紙





(株)メディアワークス
「電撃Gsマガジン」
2003年1月号下敷きイラスト

(株)メディアワークス「電撃姫」
2003年2月号下敷きイラスト

(株)エンターブレイン
「マジキュー プレミアム」
SEPTEMBER2003 表紙





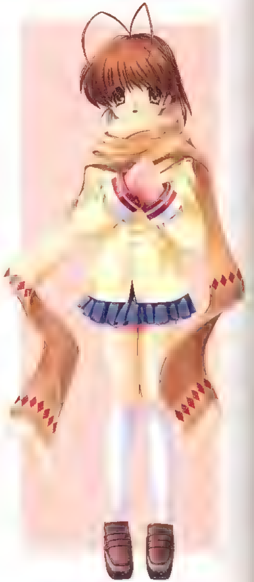






パッケージ／店頭POPイラスト
2002年年賀状イラスト
2003年年賀状イラスト



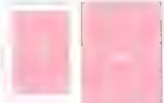






パッケージ／店頭POPイラスト
2002年年賀状イラスト
2003年年賀状イラスト



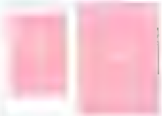


(株) エンタープレイン
『マジキュー・プレミアム』
MAY2003 ポスター&クリアファイルイラスト

(株) ビブロス『カラフルPUREGIRL』
2003年4月号表紙





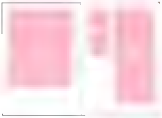


(株) エンタープレイン
『マジキュー・プレミアム』
MAY2003 ポスター&クリアファイルイラスト

(株) ヒブロス「カラフルPUREGIRL」
2003年4月号表紙







「フォックス」
10周年記念マウスパッド
通常版パッケージイラスト
販促ポスターイラスト





CLANYAD

– くらにゃど –



「つオックス」
10周年記念マウスパット
通常版 ッケ シイラスト
販促ポスターイラスト



CLANYAD
- くらにゃど







CLANYAD

くらにゃど





販促ポスターイラスト
販促ポスターイラスト



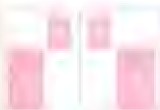


CLANYAD

－くらにゃど－







販促ポスターイラスト

販促ポスタ　イラスト

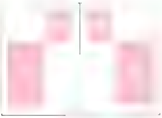


CLANYAD

-くらにゃど-







販促ポスターイラスト

販促ポスターイラスト





CLANYAD

-くらにゃど-





販促ポスターイラスト

販促ポスターイラスト

Scenario Writers

『CLANNAD』の世界を作り上げた3人のシナリオライターにインタビューを敢行！ 各キャラクターのストーリーにまつわるエピソードを聞いてきたぞ。また、謎に包まれた"幻想世界"の真相が、ついに明らかに……!?

エンターテインメントとして楽しめるゲームを目指して

――まず初めに『CLANNAD』の企画が生まれるまでの経緯を教えてください。

麻枝（以下：麻）　前作の『AIR』では、自分がやりたいことをやった感じだったんです。ただ、シナリオ性を突き詰めた結果、人によっては入り込みづらい作品になってしまいまして……。だから次は、なるべく多くのユーザーに受け入れられる作品を作らなければいけないという使命感があったんですよ。とにかくエンターテインメントとして楽しめるゲームを作ろう、と。『CLANNAD』の企画自体は、『AIR』の制作を終えてすぐに思い浮かんでいましたね。

――"人と町の物語"というコンセプトは、その時点ですでに決まっていたんですか？

麻　ええ。初めから、『AIR』のような壮大な物語ではなく、町という小さな枠組みの中で"人と町"や"人間同士"の繋がりを深く描いていこうと決めていました。

――本作の核となる"光を集める"という要素も、企画段階から存在していたのでしょうか？

麻　そうですね。ただ、当初はもう少し複雑なシステムを考えていました。本来、"光"はユーザーが任意に使えるアイテムという位置付けだったんですよ。

魁　そのためにゲームの難易度が上がり、ストーリーが邪魔されてしまうということで、現在の形に変更されたんです。

――ゲームの規模は、どれくらいを想定していましたか？

麻　単純にキャラクターの数が多いので、最初からある程度覚悟はしていたんですが、まさかここまで大きくなるとは思いませんでしたね。実際、予定していた数字の何倍になったんだろう……？

涼元（以下：涼）　おそらく2倍強くらいだと思いますよ。

麻　魁や涼元が担当した、杏やことみのシナリオも、最初は250キロバイトって言っていたのに、上がってきたのを見たら600キロバイトもあるし（笑）。

涼　いや、全体の幹が太くなっていたので、枝も太くしなければいけないと思ったんですよ（笑）。



麻枝准 MAEDA JUN

『CLANNAD』の企画全体を統括する一方、渚や智代、風子など数多くのキャラクターのシナリオを執筆。また、音楽も手がけており、本作のトゥルーED曲「小さな手のひら」の作詞&作曲は氏が担当している。



『CLANNAD』では、杏&椋姉妹と勝平のシナリオを担当。どちらも途中で大幅な修正が入り、その度にバイクで逃亡する姿が頭をよぎったとか（笑）。その他、有紀寧シナリオの一部も手がけている。



涼元悠一

『kanon』に感銘を受けてKeyへ入社し、前作『AIR』から制作に参加。『CLANNAD』ではことみシナリオを担当し、緻密な計算と大胆な演出で好評を博す。また、過去には小説家として様々な賞を受賞している。

物語冒頭の坂が象徴するふたりの成長物語

――ゲーム中、多くのキャラクターが登場する中でも、メインヒロインである渚の比重が非常に大きくなっていますね。

麻　それについては、社内でも色々と揉めたんですよ。

涼　「ひとりだけ突出させてしまうと、また『AIR』のようなゲームになってしまうのではないか」という懸念がありまして。

麻　社長からも「他のキャラクターのシナリオとの差を、できるだけ少なくしよう」と言われていたんですよね。でも、結局フタを開けたら"ドーン！"と大きく（笑）。

一同　（笑）

麻　まあ、そのせいで作品の評価が落ちたとは思わないので、結果的にはよかったのかな、と。社長の意向を無視する形になってしまったのはアレですが……（笑）。

――AFTER STORYを含めた彼女のエピソードには、"結婚"や"出産"などの重たいキーワードが多い



多くのユーザーに受け入
作らなければ、という使

Keyのお約束であるファン
あえて入れないようにし

と思うのですが、その辺りで書きにくさはありませんでしたか？

麻　いえ、これまでのウチの作品で、ずっと重い題材を扱い続けてきましたから。ただ、今回の企画の土台にある"学園恋愛ゲーム"の雰囲気を変えてしまうのではないか、という心配はありました。

AFTER STORYの印象が、ゲーム全体の印象として捉えられてしまう恐れがあった、と？

麻　はい。実際、『AIR』はそんな感じの作品だったんですよ。それを防ぐためには、前半の学園編をいかに楽しく遊んでもらうかが重要だと考えていました。幸い学園編が内容的にもボリューム的にも素晴らしいデキに仕上がったので、目標は達成できたのではないかと思います。

渚のシナリオでは、彼女の成長が大きな見どころになっていますよね。

麻　物語の前半ではすごく弱い女の子だったので、自分で書いていてメインヒロインに足る娘なのか自問自答していたんですが、ラストでは強く魅力的なキャラクターになってくれました。

特に出産の場面では、主人公と立場が逆転していましたね。

麻　あの場面の描写には、本当に苦労したんですよ。身体が弱っているのに入院もせず自宅で出産するなんて、"強さ"ではなく単なる"わがまま"と受け取られかねませんから。彼女の心の機微をユーザーに伝えるため、何度もセリフを書き直して、ようやく今の流れに落ち着いたんです。

彼女のシナリオを通じて描きたかったテーマは、やはり"成長"ということになるのでしょうか？

麻　そうですね。ただ、それは渚だけではなく、主人公を含めての"成長"ということなんです。一緒に手を繋いで坂を上って、という感じですね。実は物語冒頭に出てくる坂は、そんなふたりの人生を象徴していたんですよ。

渚と付き合う中で、彼女の家族とのふれあいがしっかりと描かれていたのも印象的でした。

麻　その点に関しては、最初からかなり意識していました。とにかく一度、"完璧な家族"というものを描いてみたかったんですよ。

魁　これまでのKeyの作品に登場する家族は、必ず誰かが欠けていましたからね。

麻　それもあって今回、いつまでもその中にいたくなるような団欒の場を用意したかったんです。

渚のシナリオを語るうえで、オープニングムービーの使い方も外せない要素ですよね。

麻　あれも、ずっと前から考えていた演出だったんですけど……正直、あまり評判がよくないんですよ。大失敗（苦笑）。

涼　「全キャラクターのルートで観たかった」という声が、圧倒的でしたからね。

魁　サポートに「オープニングムービーが観られない」なんて電話もかかってきましたし（笑）。

麻　自分としては、流す場所を変えることでインパクトを持たせたかったんですよ。感覚的にも、直前の「冬の日の、幻想物語なんです」というセリフからオープニングムービーへ入るのが、一番しっくり来ると思いました。

涼　わかる人には、その意図がわかったと思うんですけどね。

麻　この件は、今回『CLANNAD』を制作していて出てきた反省点のひとつなんです。トリッキーな方向に走り過ぎたというか（笑）。

杏&椋シナリオのテーマは"アンチKey"!?

続いて、渚以外のキャラクターに関してお伺いします。まずは杏と椋ですが、彼女たちのシナリオは途中で各ルートに分岐する特殊な形態を取っていますよね。

魁　実は当初の予定では、椋のルートは存在しなかったんです。その代わり、杏のシナリオを進める際、椋に優しくするような選択肢を選ばなければいけない箇所があったんですよ。

麻　杏だけを追いかけると、絶対にバッドENDになる。杏シナリオをプレーしたデバッガーは、ことごとく引っ掛かっていましたね。

魁　その後、「ゲームバランスが悪い」という話になりまして、対策として急遽、椋ルートを用意することになったんです。彼女には、本当にマスターアップ寸前まで悩まされましたよ。

彼女たちは他のキャラクターのシナリオにもよく登場しますが、それだけ動かしやすい存在だったということでしょうか？

OTHER STAFFS

年間の制作期間を振り返って

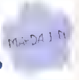


れられる作品を
命感があったんです。
MAEDA JUN
麻枝准

タジーな要素を
てみました。
魁



怠惰に学園生活を過ごす主人公の姿こそ自分が書きたかった美しさの形なんです(笑)。



麻枝准

涼　それはありますね。特に杏は"友達感覚で接してくる女の子"という設定があったので、非常に使いやすかったです。
麻　主人公が言いにくいことを代弁してもらったり、時には主人公に代わって女の子を助けたり、色々な場面で重宝しました

─杏と椋のシナリオに込められたテーマを教えてください。

魁　改めて聞かれると、なかなか思い浮かばないんですが……
麻　確か「アンチKey」って言ってなかったっけ？(笑)
魁　いや、"アンチKey"というわけではないんですが、とりあえずファンタジーな要素は入れないようにしようとは思っていました。どちらも死なないし、ケガもしない。たぶん今までのウチの作品の流れだと、どちらかがケガくらいしていたんでしょうけどね(笑)。

─もうひとつ、どうしても気になることがあるんですが、杏のペットはなぜウリ坊？(笑)

魁　あれは、かなり早い段階で決めていたんですが、ほとんど思い付きです。AFTER STORYで時間の経過を見せる際、ウリ坊が成長してイノシシになっていたらオモシロイんじゃないかな、と。
涼　そもそも、ウリ坊って飼っても大丈夫なんだっけ？(笑)
魁　普通はダメですよね(笑)。

智代のAFTER STORYを現在鋭意制作中！

─智代は肉体的にも精神的にも強いという、ある意味、渚の対極にいる女の子ですよね。

麻　彼女は、完全に自分の好みに合わせて作ったキャラクターなんですよ。自立心が強くて、自分ひとりでどんどん物事を進めてしまう。だけど恋愛には盲目的、という女の子の話を、前々から描いてみたかったんです。
涼　確かに、一度恋をしてしまうと周りのことが見えなくなる一面を持っていましたよね。

─そういえば本作では珍しく、シナリオ中に過激な描写が用意されているキャラクターでした。

麻　それも含めて、彼女のシナリオを書き終えた時は、自分で言うのもなんですが美しい話ができたと思っていたんですけどね。いざ世に出してみたら、色々と言われてしまいまして……(涙)
魁　なんの努力もせずに智代を突き放した挙句、最後にまたなにもしないまま智代とヨリを戻した主人公に対して、みんな苛立ちを覚えたらしいんです[illegible]
麻　だけど、そこで主人公が努力をしたら、普通の話になってしまいますから。あれだけ怠惰に学園生活を過ごす主人公の姿こそ、自分が書きたかった美しさの形なんだ、という思いもありますし。
涼　あまり主人公に感情移入せずにストーリーを楽しむタイプの人は、素直に楽しめたんじゃないでしょうか？　逆に主人公に感情移入してしまうと、彼の怠惰な部分が気になってしまうとか
麻　いや、俺は主人公に感情移入したら、すごく気持ちよかった。
一同　(笑)
麻　だから、たぶん智代のシナリオに共感してくれた人は、自分と似たような性格の持ち主なんだと思います。結構ひねくれた部分があるんじゃないかな、と(笑)。

─智代シナリオの特徴として、"春原へのコンボ"や"風子……参上"など、遊び心溢れるイベントが豊富に用意されている点が挙げられると思うのですが？

麻　"春原へのコンボ"は、最初はタイミングよくクリックすると繋がるような、手に汗握るアクション性を持った作りにしようと考えていたんですよ(笑)。プログラム上の問題で、実現することはできませんでしたけど。とはいえ、人を蹴り飛ばすという、今までのKey作品のカラーではできなかったことをやったというだけでも、大きな意義があったと思います。

─"楽しければなんでもあり"という本作の方向性が、一番出ているのが智代シナリオなのかもしれませんね。

麻　そうですね。

─そんな智代シナリオのAFTER STORYを制作するという話が出ているようですが？

麻　ええ、作っていますよ。先程



EXTRA #1
創ってみたい！幻のミニゲーム

上で語られている"春原への[illegible]"のシステム変更の他にも、本作には諸々の事情で企画自体の凍結を[illegible]を見ぬままに姿を消したそれらの企画にスポットを当てて紹介していくぞ。

ボタン捕獲ゲーム

チップキャラを操作し、逃げるボタンを追いかけるアクションゲーム。立案者の魁氏も存在を忘れる程、初期に考えられた企画。



麻枝氏が企画した、体育倉庫の地下に眠る巨大な迷宮を5人の仲間と共に探索するRPG。時間の都合により、泣く泣く断念。



CLANNAD SAGA

こちらは、今後やってみたい企画の中で挙げられた作品で、渚の演劇から始まるファンタジーRPG。共同開発者募集中らしい(笑)。



話したように、主人公が頑張る姿を見せないまま智代を手に入れたラストに賛否両論出ていますが、あの終わり方には"主人公はこれから頑張っていくんだ"という意味が込められているんです。そこをしっかりと描いて消化したいという意欲が、自分の中でものすごく湧いてきまして。……まあ、単純に智代が好きなので、もっと彼女の話を書きたいという部分もあるんですけどね(笑)。

——楽しみにしています！

「世界は美しい」の一言に込められた深い思い

　次に、ことみについてですが、彼女のキャラクターはどんな経緯で生まれたのでしょうか？

涼　ことみの場合は、先にストーリーが存在していたんですよ。そこから話を展開するために必要なキャラクターを、逆算して作り上げたという感じです。

　彼女のシナリオは、渚や杏＆椋が絡んできて、かなり賑やかな雰囲気になっていますよね。

涼　それは、最初からやろうと決めていました。『AIR』の欠点を色々と指摘された中で、僕が一番気になったのが「最終的にヒロインと主人公の物語になってしまって、サブキャラクターが置き去りにされている」という意見だったんです。それに対する自分なりの回答が、あの方向性なんですよ。サブキャラが最後まで重要な位置付けでストーリーに関わってくる。そして、彼女たちがいればこそヒロインが救われる、と。

　ことみのシナリオを書き進める際、意識した点はありますか？

涼　僕は常々、"世界"というのは"みんな"という意味だと思っているんです。人間を含め、様々な存在があってこその世界……それらがすべて有機的に結合しているということを、うまく描くことができればと考えていました

——その考えが終盤の"カバン"のエピソードに繋がるんですね。同じく終盤に語られる、"両親からのメッセージ"も印象的でした。

涼　ありがとうございます。ことみのシナリオは、あの「世界は美しい」という一言を言いたいがために存在していると言っても過言ではないんです。彼女のシナリオで伝えたかったことが、全部あの一言に凝縮されているんですよ。

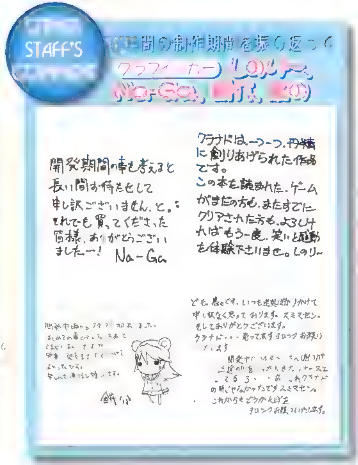
当初の予定とは正反対のキャラクターに!?

—続いて風子についてお聞きしますが、まず、あの飛び抜けてブッ飛んだキャラクターは、どのようにしてでき上がったんですか？

麻　実は彼女は、当初は落ち着いたお姉さんタイプのキャラクターになる予定だったんです

——今とは正反対ですね…

麻　はい。でも、上がってきたキャラクターデザインを見たら、ものすごくカワイイ女の子になっていて。それで、その絵に合わせて考え直した新たな設定が、おとなしくて控えめな少女。ただ、それでシナリオを書き始めても全然筆が進まなくて、どうしてもダルい文章になってしまったんですよ。『CLANNAD』で目指すべきエンターテインメント性を出すためにはどうすればいいかを考えた結果、それならキャラクターをハジケさせよう、と。そうして生まれたのが、今の風子なんです。



　彼女のシナリオの軸となる姉・公子の存在も、その時に思いつかれたのですか？

麻　いえ、姉の結婚式を祝うために頑張るという風子の設定は、最初から考えていました。一応、キャラクターを変更する前の風子も、公子のために頑張っていたんですよ。ものすごく地味でしたが。

——彼女が木彫りのヒトデを作る行為も、キャラクターデザインがキッカケだったんですか？

麻　それよりも前から決まっていましたね。ただ、どうしてヒトデにしたのか、自分でもよくわからないんですが(笑)。

涼　個人的にはむしろ、なんで木彫りなのかというところに疑問を感じたんですけど…

麻　そこで彼女の不器用さとか、ひたむきさを表現しようと思っていたんですよ。

魁　そういえば、最初のキャラクターデザインでは、手を包帯でグルグル巻きにしていましたよね。

麻　そうそう。それも同じく不器用さとひたむきさを出そうと思ってやってみたんですが……あまりに痛々しかったので、ホームページでキャラクターを公開する時に



ことみシナリオで言いたいことは「世界は美しい」の一言にすべて凝縮されています。 涼元悠一

取ってしまいました(笑)。

――他のキャラクターと違い、彼女に2種類のエンディングが用意されているのは、なぜですか?

麻　制作者の立場としては、友達ENDの展開のほうがしっくりきていたので、最初はそれでまとめようとしていたんです。ただ、ゲームに"学園恋愛ゲーム"の雰囲気を持たせるためには恋愛ENDも必要なのではないかと思って、後から追加したんですよ。

――風子シナリオで描きたかったテーマを教えてください。

麻　"思いは残る"というのが半分ですね。最終的に風子の存在がみんなの記憶から消え、彼女はいなかったことになるんですが、それでも思いだけは残っていた。だから最後に、風子が再び実体として現れ、公子を祝福することができたんです。残りのもう半分は、単純に賑やかにしたかった(笑)。

――"悪戯イベント"なんて要素も用意されていましたしね。

麻　"悪戯イベント"は、かなり気合いを入れましたよ。もう、本編そっちのけになるくらい(笑)。

――日付によって悪戯の内容が変わるなど、確かに半端じゃないコダワリを感じました。

魁　すべての悪戯を確かめるためには何度もプレーし直さなければいけないので、デバッガーも苦労していましたね。

麻　おそらく、ユーザーが見ていないテキストも残っていると思うので、ぜひ探してみてください。

ボツ寸前!?　絶体絶命のピンチから奇跡の復活！

――さて、メインキャラクターの話を聞き終えて、ここからは学園編のサブキャラクターの話に移りたいと思います。まずは、美佐枝についてですが……？

涼　寮に住んでいるのが春原だけでは寂しいということで、寮母さんを入れようという話は企画段階から出ていましたね。

麻　ただ、彼女は途中でボツにしようか悩んだんですよ。

――え、それはなぜですか？

麻　美佐枝は最初、涼元が担当していたんですが、ことみのシナリオに苦労していたようなので自分が引き継いだんです。だけど、全然話が思い浮かばなくて……。

魁　現場の人間に、「ホームページで紹介してしまったけど、どうしてもシナリオが書けない」って相談していましたからね。

麻　そんな時、某アニメのヒロインを見て、世話焼き系のキャラクターにすることを思いついたんです。それが突破口になって、なんとか書き上げた感じですね。

――美佐枝のシナリオは、途中で彼女の過去の話へ移行する展開がとても印象的でした。

麻　今の主人公と美佐枝では、これ以上話が進展しないということで、その逃げ道として考えたというのが正直なところです。ただ過去の話を入れたことで、生徒会長というキーワードを通して智代との繋がりを作れたうえ、公子や芳野とも関係を持たせることができたので、結果として世界の広がりを見せるためにウマいこと役立ってくれましたね。



――美佐枝のエンディングは、彼女との仲があやふやなまま迎えていますが、その真意はどこにあるのでしょうか？

麻　確かにエンディングへ辿り着いても、美佐枝と主人公の関係は片付いていないんですよね。ただ、主人公の夢に出てきた彼女の過去の話は、かつて志麻として美佐枝と思いを通わせた飼い猫が見せているんです。つまり彼は主人公のことを、美佐枝を任せるに足る人物だと認めてくれたわけです。だから美佐枝ENDには、智代END同様、"これからふたりの関係が始まっていくんだ"という意味が含まれているんですよ。

シナリオライターが選ぶ不遇なキャラNO.1(涙)

――続いて、有紀寧の話ができるまでの経緯を教えてください。

麻　彼女は……『CLANNAD』の中で"不遇なキャラクターNO.1"ですね。3人のシナリオライターの間をたらい回しにされて……。

魁　いや、ポジティブに考えて、全員に愛されたキャラクターということにしておきましょうよ！

一同　（笑）

麻　本当はメインキャラクターに

風子シナリオのテーマは"思いは残る"ということ、それから単純に賑やかにしたかった!(笑)

麻枝准

EXTRA #2

3人が選んだ印象的なシーンは

ここでは、シナリオライターの3人自らが選んだ、ストーリーの中で一番印象に残っているシーンを紹介していくぞ。それぞれの個性が透けて見えるような、……シーンと、同じ場面を選んでいる人はいるかな？

麻枝准

麻枝氏は、秋生との野球対決のシーンをチョイス。対峙する両者、聞こえるのは雨の音のみ……手に汗握る緊張感が堪らない！



魁

魁氏が選んだのは、父親との和解の場面。テストプレー中、偶然ベストタイミングで流れたBGMの影響もあり、忘れられないとか。



涼元悠一

涼元氏は、風子のラストシーンを選択。その理由は、「『Kanon』に足りなかった要素が完璧に補正されていたから」とのこと。



勝平ルートこそが本当の意味での椋シナリオなんです。魁

したかったんですけどね。残念ながら力及ばず……。

——ちなみに当初の予定では、彼女はどんなポジションにいたのでしょうか？

涼　とにかく、今とは全然違うキャラクターになる予定だったんですよ。結局、着手しないまま、彼女も麻枝のほうに引き取ってもらったんですが……(涙)。

麻　一応"不良たちの聖母"という設定は、早い段階から決まっていましたよね。だけど、そこから全然話が進まないんですよ。ちょうどあの頃は、「ユーザーを感動させなければいけない」という気持ちでがんじがらめになっていた時期で。確か有紀寧の身にすごい不幸が起きて、主人公と春原がふたりで昔の彼女を思い出させる、という感じのためのシナリオを用意していた気がします。それで途中から、"感動させる"という枷を外したんですが、それでも書けなくて…。最終的には、魁のほうに間を埋めてもらったんですけど、とにかく苦労しましたね。

魁　"おまじないイベント"はノリノリだったんですけどね。

麻　アレは楽しかったなあ。自分でテストプレーしていてもオモシロかったですからね(笑)。「今回は誰がくるんだろう？」みたいな。本当は、そういう要素をもっともっと詰め込みたかったんですけど、デバッガーのチーフから「これ以上やるとデバッグが終わらなくなる」って言われてしまって、仕方なく諦めたんですよ。

今までのKey作品にはなかった振り幅の大きいストーリー

『CLANNAD』のエンターテインメント性を、もっとも体現しているキャラクター・春原の話を聞かせてください。

麻　春原って、最初からあんな感じのキャラクターだったっけ？

涼　いや、最初はもっと不良っぽかったですよ。

魁　あそこまでのヘタレではなかったですね(笑)。

麻　もちろん、ギャグの部分は最初から用意していましたけど、本来は主人公がいい方向へ変わろうとしている時に、それを邪魔するような役回りだったんですよ。渚のシナリオでは、その辺りの名残が少し残っていると思うんですが……最終的には完全にお笑い担当になってしまいましたね。

彼はAFTER STORYで再会する際、時間の経過をユーザーに感じさせる役目を果たしていたような気がするのですが……？

麻　そうですね。あそこは、実際に僕たちが学生時代の友人と再会した時に感じる郷愁感を出したかったんです。だから、主人公は途中まで、春原のことを完全に忘れているんですよ。仕事と渚のことで頭が一杯の毎日を送る中で、ふとその存在を思い出すような、そういうリアルな感覚を表現できたのではないかと思います。

そんな彼や妹である芽衣のストーリーは、どのようなところから生まれたのですか？

麻　様子を見に来る芽衣を心配させないために偽の彼女を作るという設定と、ラストの展開は最初から決めていました。ただ、時間的にどうしても、自分たちでシナリオを書くことができなくて。

魁　それで、大嘘猫（ジャイアントパンダ）でシナリオライターをしている丘野さんに、残りの部分をお願いしたんです。彼は以前、妹キャラのシナリオを書いていた実績がありますからね。

涼　だから、よく読むと春原兄妹のシナリオは、他のキャラクターと雰囲気が違っているんですよ。

麻　一度"ドスン！"と落としておいて、そこからエンディングへ向けて救いを作っていく彼の持ち味が、存分に出ていましたね。

魁　とにかく、サッカー部の連中の性格が悪い悪い(笑)。

麻　その前の顧問の先生の口調からして、普段のKeyの作品では絶対に出てこないキャラクターですから。自分たちは、基本的に完全な悪役を出さないようにしているので。最初にシナリオを読んだ時は、彼はサッカー部に恨みでもあるのかと思いましたよ(笑)。

涼　でも、だからこそ、物語のラストであれだけの爽快感を出すことができたんでしょうね。

では、春原シナリオのテーマを教えてください。

麻　それはもう、単純に"友情"ですよね。いつもふたりでバカなことをしては周りに迷惑をかけているけど、そういう友達こそ、いつまでも縁の切れない親友になるのではないか、と。

本当に死の淵から蘇った不死身のキャラ!?

——続いて勝平ですが、彼の登場条件は、隠しキャラクター並に難しかったですよね？

麻　いや、でも最初は、今よりもさらに隠しキャラクターっぽい感



OTHER STAFF'S COMMENT

4年間の制作期間を振り返って

音楽

折戸伸治、戸越まごめ

ほかのスタッフも言ってる様に、とにかく長かった・・・。
規模が大きいとは聞いていたけど、まさか4年近くもかかるとは思いもよりませんでした。
制作期間中は、とにかくモチベーション維持との戦いでした。
曲制作もかなり苦労したけど、製品に同梱されてた設定資料本の仕事が何故か自分に回ってきた時は、さすがにアセりました。
[illegible]。あと予想通りというか、やっぱりなりました。
さすがに、ヤバイッス(笑)

2004.5.9 折戸伸治

[illegible]

2004.7.9 戸越まごめ

AFTER STORYでは学園編の楽しい雰囲気とは異なる"人生の厳しさ"を出したかったんですよ。

MAEDA J

麻枝准

じだったんですよ。

魁　とりあえず、何人か他のキャラクターのシナリオをクリアーしないといけない、という条件がありましたからね。当時に比べれば、難易度はかなり落としています。

――そんな彼が、"光"の入手に関わる重要なポジションにいる理由というのは？

魁　『CLANNAD』のタイトルには"家族"という意味があって、物語の中でも様々な家族が出てきますが、勝平のシナリオを通じて、また違った家族の形を描けるのではないかと思ったんです。家族に捨てられた彼が椋と出会い、新しい家族を作っていくという……。

――そういえば、勝平シナリオでは椋が大活躍していましたね。

魁　そうですね。だから、杏のシナリオに用意された椋ルートではなく、勝平ルートこそが、本当の意味での椋シナリオなんです。

涼　勝平と椋の話は、本来ならばもう少し長かったんですよね。

麻　当初は、AFTER STORYで勝平たちの後日談を入れる予定だったんですが、途中で勝平ルートを経由すると渚ルートをクリアーできないことに気付いたんです。そうすると、出会ってもいないキャラクターがAFTER STORYに登場するという矛盾が生じてしまうんですよね。それで最終的に手直しすることになったんですよ。

魁　その影響で、勝平のシナリオは学園編のみで決着をつけなければいけなくなってしまって……AFTER STORYのために用意していたエピソードをムリヤリ詰め込んだので、最後はすごく駆け足になってしまいましたね。本当は、学生の頃の友人が若くして死んでしまうという、実際にありそうな話を書きたかったんですけど。

――え、勝平は元々死んでしまう予定だったんですか!?

魁　ゲーム中、唯一、生き返ることなく死んでしまうはずでした。

麻　でも、渚や汐が悲しい結末を迎える前に、勝平が死んでしまうという流れに少し引っ掛かるものがありまして。それに"幸せを願う心"であるはずの光が、彼が死んでいるのに出てくるのは不自然ですし、『CLANNAD』の中に例外ができてしまう。それで、先程の修正と併せて、シナリオの流れも変更してもらったんです。

魁　それを言われたのが年明けで……勝平のシナリオは二転三転して、本当に大変でしたね。

おじいちゃん先生の意外な人気の秘密

――学園編では、幸村先生も"光"の入手に関わる重要な役割を担っていましたね。

麻　今回の話では、町の住人を老若男女問わず書きたいという気持ちがあったんです。まあ、おじいちゃんにイベントCGを割くくらいなら女の子に割けという人もいると思うんですが(笑)。

魁　だけど、ユーザーの声を聞くと、幸村シナリオの人気は結構高いみたいですよ。

麻　あ、そうなんだ。う～ん、なんでだろう？　それほどボリュームも大きくないのに。

涼　プレーしていて学生時代を思い出す人が多いらしいですね。特に実際、恩師と呼べる人がいるユーザーには、心に響くものがあったんじゃないですか？

麻　以前、恩師に「ありがとう」と伝えるのが難しいという話を聞いたことがあるんですが、それを落ちこぼれのふたりが、清々しく言ったという部分が大きかったのかもしれませんね。

学園編とは異なる人生の厳しさの中で

――さて、学園編が終わってAFTER STORYに入るわけですが、ここでは芳野さんなど学園編では脇にいたキャラクターが、非常に重要な役割を果たしていますね。

麻　その辺りの流れは、最初から決めていました。とにかくAFTER STORYでは、人生の厳しさであるとか、学園編の楽しい雰囲気とは異なる空気を出したかったんですよ。中でも芳野さんのキャラクターが一番顕著で、学園編で仕事を手伝った時はあんなに優しかったのに、実際に仕事で下に付いたら厳しくなって印象が全然違っている。だけど、最初は戸惑っていた主人公も慣れていくに従い、いつの間にかそこが自分の大切な居場所になっている、と。

――それも含めてAFTER STORYでは、横ではなく縦の繋がりを描いている印象を強く感じました。

麻　学園を卒業して社会に出たんですから、そうならざるをえないですよね。あの秋生や早苗にしても、主人公に対する態度が微妙に変わっていますし。古河家を出ずに彼らの庇護の下で暮らしていれば、学園編そのままの穏やかな日常が続いていたと思うんですが、それで甘えていてはダメだとなってしまう。そこに主人公が気付くことから、AFTER STORYの物語がスタートするんです。

――今の話に出ていた秋生や早苗も、かなり個性的なキャラクターになっていますが、その設定はどこから出てきたんですか？

麻　ふたりは、完全に絵ありきのキャラクターですね。上がってきたデザインにOKを出して、そこからどんなキャラクターにするかを考えました。実は元々、秋生は落ち着いた感じの性格で、職業も物書きみたいなイメージを想定していたんですよ。でも、タバコを吸っているのを見て、逆にコイツがパン屋をやっていたらオモシロイんじゃないかな、と。

涼　ウチの実家が和菓子屋なので、個人的にはその設定に引っ掛かる部分があるんですよね。なぜなら、「食べ物を扱う人間は絶対にタバコを吸ってはいけない」と教えられていたので(笑)。

――秋生は物語中、なんでもできるジョーカー的なポジションにいたので、物語の落としどころをどうするのか疑問だったんですが、まさかバスジャックに巻き込まれるとは思いませんでした(笑)。

麻　やはり彼の場合は、あれくらい突き抜けた話のほうがふさわしいのかな、と思いまして。多少苦し紛れの感はありますが(笑)。

魁　ユーザーからは、「最後に一緒の夢だった演劇をやってほしかった」という声もありますけどね。

麻　う～ん……でも、一度子供に託した夢を蒸し返すのは、なにか違うと思ったんですよ。

――そんな頼り甲斐のある父・秋生とは正反対の、主人公の父・直幸についてはいかがですか？



麻　直幸に関しては、涼元も扱いに苦労したみたいですね。
涼　正直、彼の設定には困りましたよ。ことみのシナリオを書いていて、どの時点でフェードアウトさせるべきか非常に悩まされました。ヘタすると主人公だけ幸せになって、その裏で親父のほうはどうなっているんだ、というツッコミを受けかねませんから。
麻　ユーザーも、学園編を遊んでいて「なんで、このキャラクターが存在するんだろう？」と、疑問に感じた人が多いのではないでしょうか。ただ、自分としては彼との和解のシーンが、ある意味「CLANNAD」のクライマックスだったんです。だから、30時間くらいプレーして、そこで初めて「ああ、こういうことだったのか」と気付くようにしたかったんですよ。
——ある意味「CLANNAD」のすべての物語が、彼のシナリオの伏線になっていたということですね？
麻　ええ。その試み自体は成功したと思っているんですが、あのシーンには描写が足りないという声を結構聞くんですよね。
涼　微妙なところですよね。
麻　逆に言えば、あの程度の会話だけで父親の気持ちが理解できるまでに、主人公が成長していたということなんですよ。汐が生まれて、自分が父親になって……。
——その汐についてですが、彼女の悲しい結末は、最初から頭にあったのですか？
麻　そうですね。あの結末があってこその幻想世界ですから。

"幻想世界"に秘められた謎の一部が解き明かされる！

——今の話に挙がった"幻想世界"ですが、そもそも"幻想世界"と主人公たちが暮らす世界とは、どんな繋がりがあるのですか？
麻　これは、どこまで言ってしまっていいのかなあ……。
涼　基本的には、明確な区別なんて存在しないんですよね。ただ、そこにある物の"見え方"が違っているだけ、と言いますか。
麻　そうですね。これ以上は触れずに、そっとしておいたほうがいい気がするんですが……。
——そこをなんとか、ヒントだけでもお願いします！
麻　ひとつだけ例を挙げると、幻想世界の"獣"。あれは、要は"人が作った物"なんですよ。
——"人工物"ですか？
麻　そうです。それで、幻想世界の主人公が道に迷った時に助けに来た3匹の獣。彼らはなにかというと、渚が大事にしていたダンゴのぬいぐるみなんです。そのうちの1匹を少女が抱き上げて「優しい匂いがした」って言うじゃないですか。あれは、渚の……母親の匂いなんですよ。渚がよく抱いていたぬいぐるみだから、彼女の匂いがしたというわけです。
——なるほど！
麻　人が作った物でも大切に扱われた物は、その恩を感じて助けに来てくれる、と。学園編で風子のヒトデを捨てずに父親に渡すと、幻想世界XIで獣たちが助けてくれるんですが、彼らの正体は先程のヒトデなんです。父親に大事にされた恩を感じて、助けに来てくれているんですよ。
涼　たぶん、ここまでわかれば、あとはおのずと各世界間の繋がりが見えてくると思いますよ。

息つく間もなく新たな高みへ向かって

——「CLANNAD」全編を通じて描きたかったテーマは、どこにあるのでしょうか？
麻　まずは最初に言ったエンタテインメントの部分。「AIR」にはなかった学園恋愛ゲームの楽しさですね。そして、その裏で"人生"を書きたかったんです。
魁　だからタイトルが決まる前の本作の企画名称は、"生きること"を



表す"Alive"だったんですよ。
——制作を終えて、当初の目標を達成することはできましたか？
麻　達成感はありますね。時間もかけていますし。もちろん、まだ色々とやりたかったという思いもありますけど。
——その辺りは、次回作のお楽しみということでしょうか。
麻　いや、二度とこんなゲームは作れないんじゃないかな（笑）。
魁　社長の言葉じゃないけど、また同じ規模の作品を作ろうとしたら会社が潰れますね（笑）。
麻　それに今回、あれだけのキャラクターを揃えられたのは奇跡に近いものがありますし。次も同じ規模でキャラクターを揃えろって言われたら、自分たちではムリ。
涼　たぶんなにをやっても、今回のキャラクターの中の誰かに被ってしまうことになりますからね。
——それでは、現在のみなさんの率直な感想を教えてください。
麻　当初の目標をクリアーした達成感もありますが、4年もかけてしまったことによるユーザー離れというのも感じたので、次はもう少し早く出さなければいけないという焦燥感を覚えています。
——ホッと一息という気持ちではない、と？
麻　もし2年で作れていたら、自分たちはすごいことをした、しばらくゆっくりしようと胸を張って言えたんですけどね（苦笑）。周りの状況を考えると、のんきにはしていられないです。
——魁さんの感想は？
魁　とりあえず、自分の書いたキャラクターが受け入れられてよかったな、と。ただ、今回の経験を通して、目指しているモノがまだ先にあることがわかったので、もう少し前に行きたいという気持ちもありますね。
——涼元さんはいかがですか？
涼　それこそ、「CLANNAD」の後になにを作ればいいんだろう、という感じです（笑）。
——新作は、涼元さん主導で進める予定なんですか？
涼　一応そのように言われています。先程、話したように、同じ方向性を目指すのは厳しいので頭を悩ませている状態ですね。
——最後に、ユーザーへのメッセージをお願いします。
麻　これから、まだ智代のAFTER STORYが控えているので、楽しみにしていてください。
涼　私が動かす予定の新作のほうも、今、手がけている仕事が終わり次第、取り掛かる予定です。おそらく、今までの麻枝主導の作品とは大きく世界観が変わってしまうと思うので、みなさん覚悟しておいてください（笑）。
——"今、手がけている仕事"って……き、気になる……（汗）。

"幻想世界"と"主人公が暮らす世界"はそこにある物の"見え方"が違うだけに過ぎません。

涼元悠一

本作に収録されているボーカル曲の中から、『メグメル』、『　影二つ　』、『小さな手のひら』のスコアをお届け！　ゲーム中では聴くことのできない、フルボイスバージョンの歌詞も併せて掲載しちゃうぞ。

メグメル

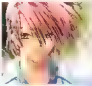
吸い込まれそうな透明感＆疾走感を感じさせるOP曲。ちなみにタイトルの"メグメル"はケルト神話に出てくる、ある場所の名前。本曲の中では、"よろこびのしま"という意味で使用されている。



『CLANNAD』OP曲
作詞　riya
作曲　eufonius
編曲　kiku
歌　riya

















影二つ

各キャラクターのEDで流れるため、おそらくゲーム中で一番耳にする機会が多いであろうボーカル曲。"二つの影"が一歩一歩前へ向かって歩んでいるような、優しさと力強さを秘めている。

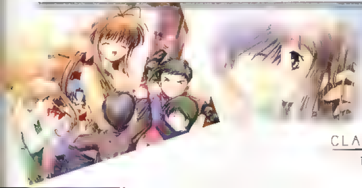


「CLANNAD」ED曲
作詞 魁
作曲 戸越まごめ
編曲 戸越まごめ
歌 riya









小さなてのひら

BGM『渚』をアレンジしたメロディーが使用されており、あのイントロを聴くだけで思わず涙してしまう人も多いのでは？　サビの部分は歌詞のリズムが独特なので、歌う時には御注意を。



CLANNAD
トゥルーED曲
作詞　麻枝准
作曲　麻枝准
編曲　戸越まごめ
歌　riya



遠くで遠くで揺れてる稲穂の海

僕らは今日までの悲しいこと全部覚えてるか、忘れたか

小さな手にもいつからか僕ら追い越してく強さ

小さな手でも離れても僕らはこの道をゆくんだ
いつかくる日は一番の思い出を仕舞って

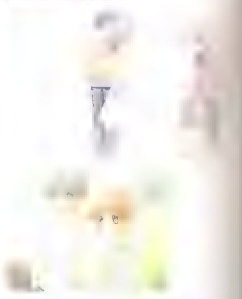
季節は移り

包まれて眠れ　あの春の日の中で

小さな手にもいつからか僕ら追い越して強さ

小さな手でも離れても僕らはこの道を ゆくんだ
いつかくる日は僕らも思い出を仕舞って

小さな手でもいつの日か僕ら追い越してくんだ







オリジナル漫画





司田カズヒロ

はじめまして、司田カズヒロです。普段は秋葉原界隈のビルの一室で日がな絵を塗ったり描いたりしている、名もなき美少女ゲー原画描きでございます。担当した「Ange Wish」が5月末に発売され、ただいま次回作の準備中です。



Comment

4月22日に、演劇部の件で渚が藤林妹に相談を持ちかけるシーンです。女の子からの告白かと勘違いしてトキマキする椋。ちょっぴり百合姉妹なカンジ？　他にもっと色々あるだろうという気もしましたが、つい趣味で選んでしまいました……(^ ^;
朋也の希望通り、背景は薔薇風味です(笑)。作業中はPCがボロくて泣きそうに大変でしたが、楽しんで描けました。



司田カズヒロ

はじめまして、司田カズヒロです。普段は秋葉原界隈のビルの一室で日がな絵を塗ったり描いたりしている、名もなき美少女ゲー原画描きでございます。担当した「Angel Wish」が5月末に発売され、ただいま次回作の準備中です。



4　22日に [illegible] の件で 杏か 姉妹に [illegible] を持ちかけるシーンです　女の子からの告白かと勘違い [illegible] てドキマキする [illegible] ちょ [illegible] 百合趣味なカンジ？　他にもっと色々あるだろうと [illegible] ましたか [illegible] 興味て [illegible] 朋也の希望通り、背景は薔薇風味です(笑)。作業中はPCがボロくて泣きそうに大変でしたが、楽しんで描けました。


Anthology Illustrations

双龍

最近は18禁ゲームの原画をやっています、双龍です。ひらがな読みて たふるとらこん 。よく"そうりゅう"と間違われます。とにかくカワイイ絵をモットーに、日々レバー(!?)を動かしています。



ぶっちゃけると智代が一番好きですが、ついつい杏&椋を描いてしまいました。杏&椋といえば！ っていう素直に直球な絵を。悪く言えば捻りのない場面ですな ノД 。杏&椋はいい姉妹愛ってかんじですね。でも個人的には、女のトロトロしたバトルも少し期待していた秘密です。

双龍 だぶるどらごん

最近は18禁ゲームの原画をやっています、双龍です。ひらがな読みで"だぶるどらごん"。よく"そうりゅう"と間違われます。とにかくカワイイ絵をモットーに、日々レバー(!?)を動かしています。



「忘我な時間の過ごし方」

Illustrator's Comment

ぶっちゃけると智代が一番好きですが、ついつい杏&椋を描いてしまいました。杏&椋といえば！　っていう素直に直球な絵を。悪く言えば捻りのない場面ですな･ﾟ･(ﾉД`)･ﾟ･。　杏&椋はいい姉妹愛ってかんじですね。でも個人的には、女のドロドロしたバトルも少し期待していた秘密です。



おフロじゃぶじゃぶ。

片桐雛太

はじめまして　片桐雛太と申します。BaseSonというところで、原画をさせていただいてます。10月1日に「夕凪ノ向コウ側」というのが出ます。あとこっそり仮HP公開中です ⇒　http://hinadamari.exblog.jp



風子が渚の家に居候している時の「一緒におフロに入っている」という渚の発言から、このようなことに。孤独の付きまとう風子には、できるだけわいわいと賑やかな、人に囲まれたところにいてほしいなぁ、という気持ちを込めたつもりです。あったかいのがいいです。幸せになるんだよぉ　（ホロリ）。

片桐 雛太

はじめまして、片桐雛太と申します BaseSonというところで 原画をさせていただいてます 10月1日に 夕凪ノ胡ウ…というのが出ます あと、こっそり仮HP公開中です http nnadamar exblog p



のフロじゃかじゃか。

Illustrator's comment

風子が渚の家に居候している時の、一緒におフロに入っているという渚の発言から、このようなことに。孤独の付きまとう風子には できるだけわいわいと賑やかな、人に囲まれたところにいてほしいなぁ、という気持ちを込めたつもりです。あったかいのがいいです。幸せになるんたよぉ   ホロッ。



榊 MAKI

どうも、榊MAKIです。ソフトハウス「あんく」で原画とかやってます。HPもありますので、遊びにきてくださいね。

(http://homepage3.nifty.com/m-and/)



ことみ編での、ほのぼの(?)とした昼食風景を絵にしたいと思い、描かせていただきました。描きながら「主人公と杏はこんな役どころだろうなぁ」と考えていたら、杏だけがギャグ顔になってしまいました。どうやら個人的に表情をいじりやすいキャラが好きらしいです。……杏ちゃん、こんな顔にしてゴメンナサイ(笑)。

榊 MAKI

どうも、榊MAKIです。ソフトハウス"あんく"で原画とかやってます。HPもありますので、遊びにきてくださいね。
(http://homepage3.nifty.com/m and/)



ある昼食の風景

Illustrator's

ことみ編での、ほのぼの(?)とした昼食風景を絵にしたいと思い、描かせていただきました。描きながら「主人公と杏はこんな役どころだろうなぁ」と考えていたら、杏だけがギャグ顔になってしまいました。どうやら個人的に表情をいじりやすいキャラが好きらしいです。……杏ちゃん、こんな顔にしてゴメンナサイ(笑)。



紅く染まる世界の中で

KEG

はじめまして、ほんこつ絵描きのKEGと申します。たまに原画やイラストをちょろちょろと描いております。今冬には私が原画を担当したゲームも出るかと思いますので、そちらもよろしくお願いいたします。



智代は強さももちろんですが、脆い部分や女らしい一面、目的のために努力する姿など、多彩で前向きな性格が魅力だと思います。そしてその目的と強い意志を朋也に打ち明けるこのシーンは、夕暮れという効果も加わり、非常に印象的です。恋人同士になった後のシーンなので、こういう言葉が聞けるのも彼氏の特権なんだろうな……なとと思いつつ描きました。

KEG

はしめまして、ぽんこつ絵描きのKEGと申します たまに原画やイラストをちょろちょろと描いております。今冬には私が原画を担当したゲームを出るかと思いますので そちらもよろしくお願いいたします。



紅く染まる世界の中で

智代は強さももちろんですが 脆い部分や女らしい一面 目的のために努力する姿など 多彩で前向きな性格が魅力だと思います。そしてその目的と強い意志を朋也に打ち明けるこのシーンは 夕暮れという効果も加わり、非常に印象的です。恋人同士になった後のシーンなので、こういう言葉が聞けるのも彼氏の特権なんだろうな なとと思いつつ描きました。

『CLANNAD』

藤林杏編

Written by 魁

本編では杏、椋、勝平のシナリオ、そして有紀寧シナリオの一部を担当。杏と朋也のハイテンションな掛け合いや春原のむごい扱いは、今回も健在（笑）。

Illustrated by ことP

辛いすれ違いの末、ようやく想いを通わせ、恋人として付き合い出した朋也と杏。しかし杏には、どうしても受け入れられないことがあった。それは……。

部屋の中は静かだった…。
動く物は何もなかった。
ふたりだけの空間・静かな時間…。
のはずが……。
「バカバカバカ！　超バカッ!!　変態っ!!!」
「ちょっ…待てよ杏！ そこまで怒らなくても…」
「うるさい！　あんたなんか死んじゃえっ！」
そう叫んで杏は手元にあった週刊誌を掴み、力一杯朋也に向けて投げつけた。
間一髪のところで避ける。

ガチャ…。

「うるさいな、あんまり騒ぐとラグビー部が…ぐっはっ！」
週刊誌はちょうど部屋に戻ってきた春原の顔面に命中した。
「あたし帰るっ！」
「あ、おいっ！」
「バイバイっ！」
朋也は手を伸ばすが、それを避けるように杏は部屋を出ていった。
シン…と静まりかえる…。
「はぁ……」
朋也はため息を吐くと、テーブルの上にあった缶コーヒーを口にした。
「そこまで嫌なもんなのか…」
特に罪悪感はないのだが、ばつの悪さに頭を掻く。
杏と付き合いだして早2ヵ月…。
付き合いだした当初は、やはり周囲の目が気になった。
端から見れば妹の彼氏を取った姉と、妹を捨てて姉を取った男という風にしか見えないのだから、当然といえば当然の反応。
しかし、そんな中、救いだったのは、椋が以前と変わりなく杏や朋也と話をしてくれたことだった。
そのおかげで、周囲も徐々に納得していき、落ち着きを取り戻した。
それでも、やはり椋の目は気になる…。
未だ、彼女の前では手をつないだりすることはない。
だからなのかもしれない。
春原の部屋で過ごすことが多くなったのは。
少なくとも、この場所なら椋に見られることはないのだから。

「つーか…いまいちあいつの中の基準がわからないな…」
「あのさ、岡崎…」
ドアのところで倒れていた春原が、鼻をさすりながら起きあがる。
「あん？　ああ、帰ってきてたのか」
「おかえりのあいさつの代わりに、雑誌ぶつけられましたけどね…」
「ああ、それはご愁傷様。それより頼んどいたお菓子はあったか？」
「あやうく隣町まで買いに行くところだったよ」
そう言って春原はビニール袋をテーブルの上に置く。
「ていうか、僕を長く外に出させておこうって魂胆見え見えだったんですけど？」
「まぁ正直邪魔だし」
「ちちくり合うなら自分ん家ですればいいでしょ！」
「るっせーな！　おまえが気ぃ利かせればいいんだよ！」
「逆ギレですかっ！　ていうかあんた人の部屋でなにしてんだよ！」
「…べつに…」
春原のツッコミに朋也は顔を背ける。
「藤林杏、ずいぶん怒ってたみたいけど…ま、まさかここで一線を越えようと…!?」
「いや、さすがに俺もそこまでは」
「じゃあどこまでだよ！」
「べつに普通だ」
朋也はふてくされたように言うと、春原の買ってきたお菓子に手を伸ばす。
そんな朋也を見ながら、春原はからかうように言った。
「どうせ胸でも触って怒らしたんだろ」
「いや、それべつに怒られないし普通だから」
「……」
朋也の言葉に、春原は笑顔で固まった。
「えっと…やっぱり柔らかいですか？」
「そりゃね」
「ていうか…あの…本当にあんた僕の部屋でなにしたんですか…？」
「…べつに…」
朋也は言葉を濁しながら、春原に買わせてきたお菓子の袋を開ける。
「やっぱ椋とは違うんだな…」
特に意識したわけじゃないが、そう漏らした。
その言葉に春原が目を細めた。

「あんた今、かなり最悪なこと口走ったよ？」
「…そうだな…失言だった…」
比べるようなことじゃないし、比べちゃいけないことだった。
少し自己嫌悪に陥りながら、朋也は床に寝ころんだ。

＊　＊　＊

「はぁ…」
杏は暗くなった道をひとり肩を落としながら歩いていた。
季節はもう夏、陽が落ちてもジメジメとした暑さが残っている。
短くなった髪のおかげで、首周りは例年より涼しい。
久しくなかった感覚だった。
唇に手をやる…。
ほんの少し前まで、朋也の唇が触れていた場所だ。
「…べつに…キスは全然平気なんだけどなぁ…」
誰に言うわけでもなくつぶやく。
付き合っていれば、して当然のことを朋也はしたのだろう。
でも、杏にはまだそれが受け入れることのできない物だった。
──まだ押し倒されるほうが我慢できる…。
そのくらい、アレは嫌だった。
朋也と喧嘩した時、どうしても考えてしまうことがあった。
ああいう時、椋はどうしたんだろう…と。
かといって、それを訊くようなことは出来るはずもなく…。
結局はどこかで我慢をしなきゃいけないんだろうか…という、無理矢理な答えを出す。
「付き合うって難しいわね…」
そうつぶやいて、またため息を吐く。
軽くなった髪…。
ひとつの決意と共に、なにかを置いてきたそんな気がする今日この頃だった。

＊　＊　＊

「ぷっひ～」
家に帰ると、ボタンが胸に飛び込んできた。
「ただいまー、ちゃんとおとなしくしてた？」

「ぷひーぷひー」
ボタンは鳴きながら、杏に身体をすり寄せる。
「ん……あんた、だんだん縦縞なくなってきたわねぇ」
「ぷひ？」
「男らしくなってきてるって感じね」
「ぷひ～♪」
杏の言葉にボタンは嬉しそうに彼女の顔を舐めた。
「きゃ、こら、くすぐったいって」
「ぷひ～ぷひ～」

ペロペロ

うり坊の小さな舌が、杏の唇を舐めた。
「……！」
と、その瞬間、杏はボタンを顔から引き離した。
杏の顔がみるみる真っ赤になっていく。
「ぷひ…？」
「あ…え、えっと…ご飯食べなきゃね、うん、着替えなきゃ」
杏は笑いながらボタンを床に置くと部屋に向かった。
ボタンは不思議そうに首をかしげ、その後を追った。

＊＊＊

「なぁ岡崎」
「ん？」
弁当を食べている朋也に春原が上目で話しかけてきた。
「実際のとこさ、おまえ藤林杏とどうなの？」
「どうって？」
「どこまでいってるの？」
「普通だよ、普通」
「キスくらいはもうしちゃってるってこと？」
「普通だよ」
「Bも？」
「普通だよ」
「ま…まさかCとか？」
「ノーコメント」
「教えてくれてもいいだろ。友達なんだからさ」
「誰が？」
「僕とあなたでしょ！」
「あ、お茶取って」
「はい、麦茶でいいよね」
「ん、サンキュ。で、誰が友達だって？　お茶くみ君」
「人の善意を足蹴にしないでくれますか！」
「友達ならプライベートにズカズカ入ってくるなよ」
「僕のプライベートルームにいつも居るのは誰ですか」
「おまえの物は俺の物だろ？」
「都合いいっすね！」

騒ぐ春原をよそに、朋也はお茶を飲む。
一息……ため息も混じった一息をつく。
そんな朋也を見ながら、春原もため息をついた。
「あーあ、こんなことならあの時、藤林杏とキスしとけばよかったよ」
中庭での出来事を言っているのだろう。
朋也は春原の肩にポンと手を置く。
「よかったな。あの時してたら、たぶん顔見る度に殴ってたぞ」
「ヤキモチだけは一人前っすね…」
春原は頬を膨らませながらぼやく。
朋也は箸を置くと春原を見た。
「…ちょっとマジな話いいか？」
「べつにいいけど」
「正直、杏と一緒にいてな…難しいんだ」
「うまくいってないの？」
「人並みにはうまくいってると思う。ただなんて言うんだろうな…語弊があるかもしれないけど、怖いんだ」
「そりゃ藤林杏だもん、隙見せたらなにされるかわかんないよね」
「いや、そうじゃなくて…どこまで許されるのかなって」
「はぁ」
春原は間の抜けた声で返す。
「やっぱ男だし、彼女には色々求めてしまうだろ？　でも求めすぎてないかとか…」
「……」
「友達の時は線引きができてたものが、付き合い始めてから妙にあやふやになったっていうか…どこまでが嫌われないラインなのかな…ってな」
「…あのさ…、独り身の僕になんて言ってほしいわけ？」
「…そうだな…」
朋也はまたため息を吐く。
「相談する相手間違えたな…」
「お役に立てなくて申し訳ないですねぇ！」

＊＊＊

杏はボタンを枕にしながら本を読んでいた。
普通の少女漫画だった。
でも開いているのはちょうどキスシーンのコマが続いているページ。
（…これって普通にキスしてるだけなのかしら…）
本を開いたまま、唇に手をやる。
「お姉ちゃん？」
椋に呼ばれ、杏はあわてて本を閉じ身体を起こす。
「な、なに？」
顔を真っ赤にしながら椋を見た。
「どうしたの…？」
「べ、べつにどうもしないけど？」
動揺しきった顔では説得力のない言葉だった。

「…お姉ちゃん、最近何か悩んでるみたいだから」
「そ、そう？　気のせいじゃない？」
笑ってごまかそうとするが…。
「朋也くん？」
椋の口から、彼の名前が出ると、決まって心臓がドキっとする。
これを克服するには、まだまだ時間が必要だと思っていた。
「うまくいってないの？」
「や、やーねぇ、そういうんじゃないわよぉ」
杏は笑いながら――でも椋から目をそらす。
朋也のことは、この子だけには相談できない。
――ましてやあんなこと…。
「あのさ、お姉ちゃん。朋也くんとどこまでいった？」
「え…え？」
妹からの思いもしない言葉に、声を大きくする。
椋は普通に…、ニコニコと笑顔で杏を見る。
「え…えっと…どこまでって…その…」
なんと答えればいいのか、杏はしどろもどろしてしまう。
「もう2ヵ月になるんだよね」
「う…うん…」
「もうお姉ちゃんの方が朋也くんと一緒にいる時間長いよ」
「…うん…」
「わたしのことは気にしなくていいんだよ？」
「…椋…」
「それでさ…」
椋は杏の側に膝をつくと、興味津々といった顔で言った。
「キスくらいはもうした？」
「え…えっと…」
「じゃないと、まだわたしのほうが先輩になっちゃうよ？」
朋也と付き合って以来、すっかりと前向きになってしまった椋。
いつも手を引っぱっていた姉としては、どこか置いてけぼりをくらった気分だった。
でも…キスならもう何度もしている。
そういう意味では、きっと椋とはイーブンだろう。
なら…訊いてもいいのかもしれない…。
「…あの…さ…椋…」
「なに？」
「き…キスした時にさ…」
「うん」
「どう…だった…？」
「どうって…？」
「そ…その……」
杏は顔を真っ赤にさせながら、目線を床に落とす。
そして消え入りそうな声で言った。
「…し…舌とかって…」
杏は言いながらさらに自分の顔が熱くなって

いくのを感じていた。
　椋はきょとんとした顔で姉を見る。
　少しして何を言いたいのかを理解したらしく、「ああ」と頷き……。
「初めはちょっと驚いたかな」
　と、恥ずかしそうに笑いながら言った。
「え!? え!? あ、あんた……その……そういうキスって……し、したの？」
「う、うん、したよ」
　突然顔を寄せられて椋は引き気味に頷いた。
　全然イーブンじゃない……。
　杏はかなりのショックを感じていた。
「だ、だって…なんか気持ち悪くない……？ にゅるって感じでさ」
「うん、最初は変な感じだったけど、そんなに嫌じゃないかなって」
「あ……ぅ……ぅ……」
　妹に決定的な差をつけられていた…。

「じゃあ俺、帰るな」
　そろそろ日が変わろうとする時間、朋也は読んでいた雑誌をテーブルに置くと同時に立ち上がった。
「あーそうそう、岡崎」
　春原が雑誌を読みながら声をかけてくる。
「線引きがどうとか言ってたけどさ、そういうのを気にしてる時点でダメなんじゃないかな」
「……？」
「付き合ってくってのは、その線を消してくってことだろ？
　嫌われるのが怖いって、それ付き合う前に考えることだよ。
　所詮他人同士、価値観が違うのは当然なんだから、ぶつかり合うこともあるよ。
　お互いが譲り合うんじゃなくって、歩み寄るのが恋人ってもんじゃん。
　……って、この本に書いてあったよ」
　春原は手にしていた雑誌を軽く揺らして言った。
「……春原」
　少なくとも、朋也がその雑誌を読んだ時には、そんな言葉は載っていなかった。
「じゃー気を付けてね」
「ああ、さんきゅ」
　朋也は礼を言うと春原の部屋を出た。
　ドアを閉め、大きく息を吸う。
　吐いた息はため息ではなく、ある種気合いのこもった物だった。

　翌日……。
　放課後、ふたりはいつものように春原の部屋にいた。
「俺、タブクリアな」
「あたし、メッコール」
「それ……今売ってるんですか？」
「見つけるまで帰ってくるなよ」
「電車乗り継いででも探してきなさい」
「あんたたち、昨日喧嘩してましたよねぇ！」
「あァ!?」
「ひぃっ……買ってきますっ！」
　ふたりにすごまれ、春原は泣きながら部屋を出て行った。
　そもそも、喧嘩をしても翌日には普通に戻っているのがこのふたりだった。
　結局のところ、それだけ気が合うということなのだろう。
「朋也、タブクリアってなに？」
「透明なコーラ。つーかお前の言うメッコールってなんだ？」
「麦茶風味のコーラ」
「うまいのかそれ？」
「微妙」
　杏はそう言いながら朋也の方へ座ったまますり寄った。
　ジッと朋也の顔を見つめる。
「……？　どうした？」
「えっと……昨日はゴメン……」
「？」
「変態とか死んじゃえとか言っちゃって…」
「べつにいつものことだろ？」
「それでも……ゴメン」
「あぁ、まぁ俺の方こそゴメン。もうおまえの嫌がることはしないから」
「……」
　朋也の言葉に杏は黙って床を見た。
　しばらく目を閉じ、なにかを決意するようにひとりで頷き、朋也を見た。
　さらにすり寄る。
　そして床にあった朋也の手に、自分の手を重ねた。
　顔が……唇がゆっくりと近づいていく。

　ガチャ。

「いやー、財布忘れちゃったよ」

　ブン！　ベチィ

「ぶはぁっ！」
　笑いながら帰ってきた春原に、テーブルの上にあった財布を力一杯投げつける。
　硬貨だらけのそれはかなりの重さだった。
「部屋に入る時はノックくらいしなさいよっ！」
「ここ僕の部屋ですよねぇ！」
「今はあたし達の部屋よ！」
「す……すみません……」
　杏の気勢に押されて謝ってしまう春原。
「まぁまぁ、今度から春原もちゃんとノックするって。な？」
「さわやかにまとめないでもらえますか……」
「いいからさっさと買ってこいよ。じゃないとこの部屋で騒ぐぞ」
「お願いしますからそれだけは勘弁してください」
　春原は深々と頭を下げると、再び部屋を出ていった。
「ふぅ……あぶなかったぁ……」
　足音が遠ざかっていくのを確認しながら、杏は息をついた。
「おまえ、なにげにすごいこと言ったよな？」
「え？　すごいって？」
「今はあたしたちの部屋よってさ」
「あ、うん、まぁ……でもそうでしょ？」
「否定はしないけどな」
　朋也はそう言って、杏の方へ身体を寄せた。
　軽くキスをする。
「ん……朋也……」
　杏はジッと朋也を見つめた。
　なにか言いたげなその目に、朋也も杏を見つめ返す。
　と、みるみる彼女の顔が赤くなっていく。
「あ……あの……あのね……その……」
「……??」
　なにを言おうとしているのだろう。
　緊迫感ばかりが高まっていく。
　ドアの外の足音が、やけに耳に響く。
「と、朋也っ！」
　まるで自分を奮い立たせるように声を荒げる。
「し、舌いれてもいいわよっ」
　そう言って顎をくいっ……とあげた。
　彼女の顔はこれまで見たことがないくらい真っ赤だった。
「え……えっと……」
　予想外の申し出に、朋也は困惑を隠せない。
　というか、なんて色気のない言葉だろう……と思っていた。
　杏はというと、顔を真っ赤にさせたまま、目を固く瞑っている。
　唇も、固く噤まれている。
「……」
「……　……」
　正直……動くに動けない状況だった。
「……」
「………」
　沈黙が続き、段々部屋の空気が重たくなってきた。
　よけいに動きづらくなっていく。
「……」
「……」
「……～～ああっもうっ！　なんでしないのよっ！」
　杏がキレた。
「いや……なんでって言われても、さっき言っただろ、おまえが嫌がることはしないって」
「そのあたしがしていいって言ったでしょ」
「無理するなって言いたいんだよ」
「無理って……別に……無理してるわけじゃ…」
　杏は言いながら視線をそらす。



「だって…椋とは…したんでしょ…」
意識した台詞ではなかったんだろう、自分で口にした言葉に目を見開いた。
こんな時に言ってはいけない名前だったのに。
朋也も眉をひそめる。
「…ゴメン…あたし…」
杏は俯いたまま泣きそうな顔で謝った。
その姿はまるで悪いことをして怒られている子供のようだった。
朋也は大きく息を吐くと、杏の頭に手を置いた。
杏は怒鳴られでもしたようにビクッと肩をすくめる。
「あのな、杏…べつに椋と…その…したことを焦ってする必要はないだろ」
「…でも…」
「おまえと椋は同じじゃないんだ。だったら歩み方だって同じってわけじゃない。俺たちは俺たちの速さで歩けばいいだけなんだ」
「…うん…」
「少なくとも、こういうのは張り合ったりするもんじゃない」
「うん…」
「もう一度言うけど、俺はお前が嫌がることはしない」
「うん」
ここでようやく、杏は顔を上げた。
少し目が赤かった。
でも、安心したような…ホッとしたような笑顔で朋也を見つめる。
朋也もそんな杏に笑顔を向け、言葉を続けた。
「だからあれだ、杏はおまえの方から、いいと思ったらいれてくれ」
「…え？」
杏の表情が笑顔のまま凍りついた。
朋也はさわやかな笑顔でさらに続ける。
「やっぱ彼氏としては、彼女に嫌なことさせられないしな。ここは待つのが一番の思いやりってもんだろ」
「あの…朋也…？ それって…」
「俺たちは俺たちの速さで歩けばいいんだ」
朋也はさわやかな笑顔のままだった。
「や…やっぱり…怒ってる？」
「全然」
「だっ…だってそんなの女の子のほうからできるわけないじゃない！」
「できる覚悟ができたらでいいって言ってるんだ！」
「じゃあ一生なしよ！」
「なら一生かけて待ってやるよ」
「一生って…！ って…一生…？」
朋也の言葉をどう解釈したのか、杏は頬を赤くしていく。
当人も、思わず口走ってしまった言葉に顔を赤くする。
「いや…今のは…まぁ…言葉の綾というか…」
朋也は顔を背けながら、照れ隠しに頬を掻く。
「と、とにかく、ゆっくりでいいから進んでいこうぜ。譲り合うとかじゃなくて、共通の価値観を作っていく感じでさ」
「うん」
杏は嬉しそうに頷いた。
朋也も微笑み、彼女を見た。
自然と唇が近づく。
やさしく、触れあうだけのキスをした。
杏は朋也の背中に腕を回し、温もりを確かめるように抱きしめた。
朋也も、杏の背中に腕を回す。
今現在、一番幸せと思える行為。
部屋の中は静かだった…。
動く物は何もなかった。
ふたりだけの空間…静かな時間…。
のはずが——…。
「バカバカバカ…超バカッ！ 変態っ!!」
「ちょっ…待てよ杏！ そこまで怒らなくても…」
「うるさい！ あんたなんか死んじゃえっ！」

ガチャ…。

「ただいま…どっちもどこ探しても売ってな…ぐっはっ！」
杏の投げた空き缶が部屋に戻ってきた春原の顔面に命中する。
「あたし帰るっ！」
「あ、おいっ！」
「バイバイっ！」
朋也は手を伸ばすが、それを避けるように杏は部屋を出ていった。
シン…と静まりかえる…。
「はぁ…… 胸はよくて、なんであんなのがダメなんだ…やっぱり…あいつの中の基準がわからないな…」
「…あのさ… 岡崎…、本当に僕の部屋でなにしてるの？」
「普通だよ。普通」
朋也はため息を吐くと、テーブルの上にある雑誌に手を伸ばした。

Fin

しっぽ付 王のことみ

いつもの放課後、いつもの演劇部、いつもの顔ぶれ。それはことみの大好きな時間。しかし、今日はなにかが違う。――そう、お尻の辺りがなんとなく……。

Written by 涼元悠一

本編では、ことみのシナリオを担当。演劇部室での穏やかな日常風景はプレーヤーの間でも評判が高い場面だが、今回はなにやら大変なことが起こっちゃう？

Illustrated by ごとP

しっぽが生えていた。
うにょんと長くてふさふさの、黒いしっぽだった。
くろねこみたいなの
ぼんやりと考えつつ、ことみは辺りを見回してみる。
放課後遅く、場所はいつもの演劇部室。
備品を入れた段ボール箱の山に囲まれ、親友たちが談笑している。
とりあえずほっとする。
今日も今日とて、ことみたち4人はここでたむろしていた。
もちろん、部活動ではない。ことみ、渚、それに杏と椋の双子姉妹…女子の常連組のうち、演劇部関係者は部長の渚ひとりだけという体たらくである。
せっかくだから、このメンバーで演劇の真似事でもしてみよう。例によって杏がそんなことを言い出し、みんなで芝居の筋立てをあれこれ考えていた。
その最中、ことみはうたた寝してしまったのだ。
なんだかおしりがむずむずすると思って、不意に目が覚めた。
スカートのうしろを触ってみると、なぜだかしっぽが生えていた。
「しっぽ…」
英語だとテイル、フランス語だとクー、ドイツ語だとシュヴァンツ、イタリア語はコーダで、ラテン語ならカウダ。
多言語に翻訳してみるものの、なんの解決にもならない。
恐る恐る動かしてみる。
ふにふに… ふにふにふに。
自分の思い描いたとおり、前後左右に揺れる。
なんだかとってもいい感じだ。
「ねえねえ、私ね、しっぽ…」
とりあえず、みんなに触れ回ろうとして
重大な危険に思い至った。
「しっぽが生えてる→とっても変な子→いじめられる（さしあたって杏ちゃんに）」
知識の量は図書館なみ、その活用は幼児なみを誇る、一ノ瀬ことみならではの三段論法である。
あわてて口をつぐんだが、耳ざとい杏が早速聞き返してきた。
「…しっぽ？」
「しっぽ…う焼きの窯の温度は800度ぐらいが最適なの」
「はぁ？」
「しっぽくうどんは香川名物で、具は根菜だけが正式なの」
「――――」
二の句の継げない杏。
力業だが、とりあえず誤魔化せたらしい。
「えと…七宝焼きって、ブローチとかつくるんですよね？」
「わたし、きつねうどんとカレーうどんぐらいしか知りませんでした。ことみちゃん、すごく物知りです」
椋と渚がここぞとばかりに乗ってきた。本当のところ、なにを提案しても杏にダメ出しを食らうので、みんなそろそろ飽きていたのだ。
「ここにいるみんなでアクセサリーをつくるというのも、いいかもです」
「椋、それは演劇部の活動じゃないから」
「今度みんなでうどん屋さんに行くというのはどうでしょう？」
「部長自ら話題をすり替えようとしない！」
「すみません…」
いつものお勤め（ツッコミ）を済ませ、杏はことみの様子をうかがう。
やはり、なにかおかしい。
「…あんた、さっきからヘンじゃない？ いつにも増して」
「へんじゃないの、ぜんぜんへんじゃないの」
椅子にもぞもぞと座り直しつつ、あわてて首を振る。
「ふーん…」
冷や汗と共に滲み出るいじめっ子誘引フェロモンを、杏が感じ取れないわけがない。
「後ろになにか隠してるでしょぉ？ 出しなさいっ！」
両手の指をわきわきさせながら、にじり寄ってくる杏。
「～～～!? ～～～～!?!?」
抵抗する暇もなく、無理矢理体を押さえられてしまった。
「ふっふっふっ、ことみの分際であたしに隠し事なんて、100億年早いわよっ！」
悪代官よろしく、いやがることみの体をぐるんと裏返しにする。
「…えっ!?」
全員がそれを目の当たりにし、そして絶句した。
「ことみちゃん、それ…」
「あの…しっぽ、じゃないですよね？」
いや、誰がどう見てもしっぽだった。
黒猫のような太くて長いしっぽが、親友一ノ瀬ことみのおしりから、何の脈絡もなく伸びている。
百戦錬磨のボケ仲間たちも、さすがにこの状況には即応できない。
「ちょっとことみ、これどうしたのよ!?」
丸まったしっぽの先を自分の方に引き寄せ、ツッコミ杏が気色ばむ。
必死で隠そうとすることみの気持ちそのままに、しっぽは縄跳びのようにぱたぱた動き回る。
「ちがうの、しっぽじゃないの、しっぽじゃないの…」
うるうる涙目で抗弁することみ。
そのおしりでは、謎のくろねこしっぽが健気に揺れ続けている…

そこで目が覚めた。
放課後遅く、場所はいつもの演劇部室。
備品を入れた段ボール箱の山に囲まれ、親友たちが談笑している。
とりあえずほっとする。
夢だったんだ…
ぼんやりと考えつつ、ことみは恐る恐るおしりを触ってみる…
しっぽはない。当然だ。
「私今ね、へんな夢…」
早速みんなに報告しようとして…ことみは瞬時に固まった。
「あの…やっぱり恥ずかしいんですが…」
部室の真ん中で、渚が何やらもじもじしている。
「大丈夫よぉ、他に誰も見てないし」
意味ありげなにやにや笑いの杏。
「ほら、早くぅ」
おどけた、どこか艶っぽい声で促され、渚もやっと観念した。
「…えっと、こんな感じ…です」
露わになったその部分の先を、杏の指がいたずらっぽく撫でつける。
「へぇ…似合ってるっていうか、部長っぽい感じではあるわね」
「そうですか？ えっと、くすぐったいです…」

「ほら、椋も見せちゃいなさいよ」
「私もっ!?　だって…」
「部長だってちゃんと見せてるんだから、ほらほらっ」
「もう…お姉ちゃんはいつもこうなんだから…」
頬を真っ赤にしながらも、いざとなれば大胆に披露してしまう椋。
「やっぱり、杏ちゃんと椋ちゃん、そっくりです」
「あたしのほうがちょっとフサフサだけどね」
「それはお姉ちゃんが、ちゃんと手入れしないからだと思う」
「違うわよ。双子だっていっても、微妙に差があるんだから」
「ふたりとも、すらっとしてて、きれいで、うらやましいです…」
「部長もなんかアクセサリーつければいいのに」
「わたしのはこんなですから、似合わないです」
「そんなことないです。渚ちゃんも、きっと似合うと思います」
3人の親友たちが、自分のしっぽを見せ合っている真っ最中だった。
渚のしっぽは薄目の茶トラで、先っぽがちょっと曲がっているのがチャームポイントだ。
椋は明るい白灰色のしっぽで、先端に白いリボンをかわいく結んでいる。
杏は椋と同じく白灰だが、毛並みのせいかやや太く見える。もちろんレースのリボンをくるくると巻きつけてある。
そして、ことみはといえば…
「　　　…」
無言のまま、もう一度自分のおしりをうかがってみる。
しっぽはない。1ミリたりともない。ないと言ったらない。
スカートの上からさすったり揉んだりつねったりしてみる。
生えてくる気配もない。
「脊椎動物門哺乳綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト属サピエンス種ホモサピエンス」
呪文を唱えてみる。
しかしなにもおこらない。
「樹上生活から草原へ活動の場を移すにつれ徐々に退化し今では尾てい骨として名残を留めているにすぎないの」
進化論的に現実逃避を計るも、やはり何の解決にもならない。
数々の修羅場を経験してきたいじめられっ子本能だけが、『このままだと大変なことになる』と盛大に警報を鳴らし続けている…。
「えと…ことみちゃん、元気ないみたい」
しっぽのリボンを心配げに揺らしながら、椋が控えめに言ってきた。
「何かとても怖いものでも見たような顔をしています」
渚も真顔で同意する。そのおしりに、ちょっぴり鍵状でキュートな茶トラしっぽ。

「　　」
沈黙を続けることみの様子に、例によって杏が何かを感じ取る。
「…あんた、さっきからヘンじゃない？　いつにも増して」
「へんじゃないの、ぜんぜんへんじゃないの」
椅子にもぞもぞと座り直しつつ、あわてて首を振る。
「ふーん…」
長くて立派な白灰しっぽを毒蛇のように揺らしながら、杏がにじり寄ってくる。
「？？!?」
「どうせしっぽ見られたくないだけでしょっ？　そうはいかないからねっ!!」
逃げる間もあればこそ、無理矢理体を押さえられた挙げ句、いとも簡単にひっくり返されてしまった。
「…えっ!?」
全員がそれを目の当たりにし、そして絶句した。
「ことみちゃん、それ…」
「あの…しっぽは？」
「ちょっとことみ、なんであんた、しっぽ生えてないのよっ!?」
絶体絶命のいじめられっ子サピエンス、一ノ瀬ことみ。
「ちがうの。私、しっぽあるの、ほんとはあるの…」
うるうる涙目で抗弁する。
「じゃあ見せてみなさいよ、ほらっ」
「ええと、ええと…」

＊＊＊

そこで目が覚めた。
放課後遅く、場所はいつもの演劇部室。
備品を入れた段ボール箱の山に囲まれ、親友たちが談笑している。
とりあえずほっとする。
演劇部室で談笑中、うたた寝してしまったらしい。
恐る恐るおしりを触ってみる。
しっぽが生えていた。
うにょんと長くてふさふさの、黒いしっぽだった。
「　　　」
ぷつん。
尋常でない情報蓄積量に比してあまりに低性能なことみ脳安定化装置が、その瞬間めでたく臨界を超えた。
「私、しっぽがあったりなかったりするの」
「??…えと…あ、あの…ことみちゃん？」
「ヒトネコ属ヒトネコは尾椎の数が個体差だからみんなとってもかわいいのっ」
必死に訴えるも、内容はグダグダである。
「杏ちゃん大変です、ことみちゃんがなんだかよくわからないことにっ…」

「ぽんぽんしっぽは劣性遺伝なのっ」
「ちょっとことみっ!?　とにかく落ち着きなさい！」
「ゆーせふ・しっぽはモロッコ出身なのっ」
しっぽにまつわる無駄知識をほとばしらせながら、悪夢の演劇部室を飛び出していくことみ。
「今夜はしっぽりと楽しむの—……」
そのおしりで、かわいいくろねこしっぽがふにふにと揺れていた。

「…ここまで来れば一安心なの」
新校舎最上階、階段口の壁にもたれ、ことみは息をついた。
辺りに人影がないのを確認し、ようやく気持ちが落ち着いてくる。
恐る恐る——何度目かわからないが——おしりを確かめてみる。
しっぽはやっぱりあった。
ことみの動悸に合わせるように、ひとりでにふるふる震えている。
「…」
ふにふにふに。
左右に振ってみると、やっぱり思った通りに動く。
自分で動かすこともできるけれど、勝手に動いたりもしてしまうらしい。
「ええと…」
しっぽを体の右横に伸ばして、指でその真ん中あたりを指す。
「ここ曲がる〜」
ふにょ〜ん。
これ以上望めないぐらいいい感じにカーブを描く、魅惑のくろねこしっぽ。
「とってもお利口、とってもお利口〜！」
感激のあまり、しっぽを抱きしめそのまま頬ずりする。
すりすりすり。
くすぐったくて、ちょっぴり気持ちいい。
しっぽの先を毛繕いするように撫でつけてあげると、もっと気持ちいい。
なでなでなでなでなで。
ふりふりふりふりふり。

「…こんな風に快楽に溺れていては、事態に何の進展もないの」
なんとか我に返りはしたが、だからと言って妙案が浮かぶわけもない。
「どうしよう、しっぽ…」
しっぽに問いかけるが、答えは返ってこない。
せめて着脱式だったらいいのにとか、無茶なことを思ったその時。
ぽろっ。
「ほんとにとれちゃった」
ことみの体からはがれ、手の中でぐったりするしっぽ。
「…ほんとに着脱式？」

おしりに当てて、もう一度くっつけようとするが、しっぽはぴくりともしない。
つついてみたり、ひっぱったりしてみるが、やっぱり動かない。
くにょくにょくにょ…きゅっ。
仕方がないので、心をこめて花結びにしてみた。
微動だにしない。
じわっと涙が溢れてくる。
「私のしっぽ…」
「それは偽物よっ！」
ぴくぴくっと振り返ると、毎度のことだが杏が仁王立ちしていた。
「　　　　」
たったったったっ…
当然のように逃げることみ。
「…はいはいはい、逃げなくてもいいから！」
慣れた手つきの杏に、当然のように首根っこをふん捕まえられる。
「いじめる？　いじめる？　いじめ……!?!?!?」
杏のおしりが目に入り、ことみはまたも絶句した。
そこに生えていたのは、しっぽはしっぽでも、犬のしっぽだった。
柴犬っぽい赤茶色で太いそれが、ぱっさぱっさと大雑把に揺れていた。
「すっごく不本意だけど、あんたの家来役ってことになったから」
苦々しげに杏が言い、例によって渚と椋も現れる。
「それで、わたしがサルに決まりました。ちなみにこんな感じの短いしっぽです」
「えと…キジです。これはオスの羽根なんですが、こっちの方が目立つからって、お姉ちゃんが…」
いつもの調子で自己紹介しつつ、それぞれ新品のしっぽを披露する。
「みんな、この前のしっぽと違ってるの」
「細かいことは気にしなくていいから」
杏がぴしゃりと言う。そこに触れては話が進まない気がして、ことみも素直に頷く。
「さあことみっ、今から本物のしっぽを探しに行くのよ！」
「なんだかわからないけど、しっぽがないとさびしいから、私がんばるの」
高らかに宣言する杏に釣られ、成り行き任せで頷く。
その時だった。
廊下の真ん中で、一般生徒たちの悲鳴があがった。
「…アオテナガフクロオオスノハラモドキだあああっ！」
突然現れたのは、言葉ではなんとも描写しようのない、ひたすらに面妖な生物だった。
「今朝寮の部屋で起きたらなぜかこんな体になってたんだよおぉぉぉ――っ！」
どこかで聞いたような声音で、アオテナガフクロオオスノハラモドキが咆哮した。



全身からぶにゅぶにゅめきょめきょとコミカルな異音を発しながら、廊下をこちらに近づいてくる。
「あいつの毒にやられたら三日は痒みが抜けないぞっ」
「うろこがヌメヌメしてて気持ち悪～い」
「尻から火を吹いたぞぉおぉおおっ！」
我先にと逃げまどう生徒たち。
「僕は一体どういう生き物なんですかねぇ」
「うわぁあっ、来るなっ！　来るなあああっ!!」
「小指の付け根を箪笥の角に当てたあぁっ!!!」
「買ったばかりの絨毯の上にカレーぶちまけたああっ!!」
「洗ったはずの靴下が片方見つからないぃぃぃっ!!」
被害は校内にとどまらず、町の方々でパニックが起こっていた。
「それ全部僕のせいなんすかねぇ!!」
ますます荒れ狂う愉快な珍獣、アオテナガフクロオオスノハラモドキ。
「くそぅ…どうして僕がこんな目にあわなきゃならないんだよぉ…」
恐らく瞳と思われる部分から、たぶん涙っぽい液をだらだら流して泣いている。
「仕方ないわねえ…部長、椋、ことみっ、行くわよっ！」
みんなでアオ（中略）スノハラモドキを退治することに決めた。
「ってなんでいきなり退治で話がまとまってるんだよぉおっ！　あんたら鬼っすかっ!!　鬼の皮を被った桃太郎一行っすかっ!!」
「一番手は部長ね。サクっと倒しちゃっていいから」
スノハラモドキの悲痛な訴えをカジュアルに無視しつつ、渚の背中をぽんと押し出す杏。
「えっと…」
自信なげなニホンザルこと渚、スノハラモドキの目前にぽてぽてと進み出る。
だんご大家族印の袋を、どこからともなく取り出す。
「きび団子、食べますか？」
「ってこれ以上家来増やしてどうするのよっ」
「いえ、別に家来になってもらわなくてもいいんです。きび団子だけでも味わってもらえれば、少しは心が安らぐかと思って…」
「あたしたちは慈善事業やってるんじゃないのよ。っていうか、そもそもあんたはだんごもらう方でしょ？　却下よ却下！　次はことみっ」
「私、呪文を唱えてみるの」
演劇部名物、備品の魔法少女バトンをどこからともなく取り出す。
「どんな呪文がいい？」
みんなの方を振り返って、リクエストを募る。
「めんどくさいから一言で終わりになる呪文ね」
「ええと…」
無駄に広大な脳内書庫をしばし検索し、杏の言ったとおりのものを探し出した。
ぶんぶんぶんっ。
「あんたとはやっとられんわー、ほなさいならー」
「…それは呪文でもなんでもないから」
「それにつけても銭の欲しさよ」
「それは呪文じゃなくて、なんにでもつけられる下の句」
「ここらへんで一杯のお茶が怖い」
「それは落語」
「バルス！」
「惜しいけど違う」
「やっぱりちょっと発音が違うみたいなの…」
「もうっ。あたしがやるからそれ貸しなさい！」
しびれを切らした杏、ことみの手から魔法のバトンを奪い取る。
「次は椋！　キジはただでさえキャラが薄いん

だから、必殺技とか自分で考えなさいっ」

「そ、そんなこと言われても……」

仕方がないので、どこからともなくトランプを取り出す地味な鳥類（日本の国鳥）、椋。

繰ろうとしてから地面にぶちまけ、のろのろと拾ってもう一度繰る。

「この戦いの行方を占う必殺技です……好きなカードを3枚選んでください」

「……椋、それいつもとまったく同じだから」

冷ややかな姉の視線を受けつつも、扇形に広げたトランプをスノハラモドキに差し出す。

「……………」

ひょいひょいひょい。

手だか足だかよくわからない部位を器用に使い、言われたとおりにカードをチョイスする素直なスノハラモドキ。

「えっと……………もうすぐ、あなたにとって生涯最高の瞬間が訪れます」

「マジっすか？」

「はい、まじです」

……ずごっ……

魔法のバトンで杏に殴打され、スノハラモドキの生涯は終わった。

「まだ……死んでないっすから……」

「ほらほら、雑魚モンスターはやられたらさっさと出すもん出すっ……」

鈍器で殴られ瀕死のスノハラモドキを、さらにげしげしどつき回す。

「ひぃいぃいぃいいいいいぃいぃ……」

断末魔の悲鳴を上げるスノハラモドキ。

ひょろりと長い触覚の付け根から、何やら長方形の紙がひらりと落ちた。

「えと、これって……」

椋が拾ってみると、それにはこう書かれていた。

『本物のしっぽ引換券』

紙の周囲の余白では、お約束通りだんごたちが舞い踊っていた。

「あとは景品交換所を探すだけですね」

「でも、えと……展開が不自然に早いような気もしますが……」

「息をもつかせぬ大冒険活劇なの」

その時だった。

『ふっふっふっ……』

……天にわかにかき曇る校舎内。

どこからともなく、いかにも悪の大幹部な野太い声が響いてきた。

「痛い目に遭いたくなければ、その引換券を置いていけー」

「出たわね、黒幕っ……」

勇敢な杏の叫びに、ことみも奮え立つ。

「痛いのやなの、痛いのやなの〜……」

「えぐえぐ泣きながら逃げないっ！　一応あんたが主人公のポジションなんだから、みんなと一緒に立ち向かいなさいっ!!……ほらっ」

杏が指差した先にいた人物を見て、ことみは言葉を失った。

それは……

「朋也くん!???」

「……というお話を考えたの」

放課後遅く、場所はいつもの演劇部室。

備品を入れた段ボール箱の山に囲まれ、ことみは親友たちに劇の筋立てを説明している。

「どうだった？」

自信満々に訊ねられた杏と椋が、どちらからともなく顔を見合わせる。

「えっと……」

「あの……」

おおむね不評のようだった。

「機械のしっぽがただでもらえる星のお話の方が、よかった？」

ちょっとだけ首を傾げて聞き返したことみを見て、杏が深く深くため息をついた。

「はあああっ」

自分の長髪をくしゃっとかき混ぜてから、ことみの肩に両手を置く。

「ことみ、この際だからはっっっっっっっっっ……っ……っっっ……」

ここで息継ぎ。

「……っきり言うわね」

「ものすごいため方なの」

「あんたのプロット、小学校の学芸会以下。使い物にならないわ」

鬼も裸足で逃げ出すダメ出しっぷりだった。

「いじめっ子ぉ……」

とたんにことみは半泣きになる。

「お姉ちゃん、ことみちゃんだって一生懸命なんだから、そこまで言わなくても……」

「ああことみちゃん、泣かないでください。私と椋ちゃんのシナリオも12回連続でボツですから」

ボケ専少女労働組合から巻き起こる、同情と抗議の嵐。

幼稚園児の集団を理不尽にいじめているような気分になり、杏は泥縄で取り繕う。

「だっ、だいたいその話ってまだ途中じゃないのよ、オチはどーすんのよ、オチは？」

そう言い寄られ、ことみは言葉に窮する。

「ええと……オチはね、ええと、ええと……」

そこで目が覚めた。

放課後遅く、場所は演劇部室ではなく……

褪せた紙の匂いに包まれ、ことみの意識がゆっくりと現実に戻ってきた。

窓辺で時折揺れるカーテン、互いに影を落とし合う、背の高い書架。

学校の図書室だった。

板張りの床に、静かに時が積もっている。

白金色の日射しも、半開きの窓から入ってくる風も、秋深い10月のものと気づいた。

その下でクッションを抱いたまま、丸まるように床に寝転がっている自分。

「……やっぱり、夢オチだったの」

呟いて、体を起こす。

「おはよう、ことみ」

聞き慣れた、優しい声がした。

まぶたをこすりながら振り向くと、すぐ近くで恋人が――朋也が柔らかく笑っていた。

それで全てを思い出した。

今日は朋也の自習に付き合い、ひさしぶりにふたりだけで図書室ですごしていた。

今から進学を目指すにはあまりに不利な朋也に比べて、ことみの方には余裕がある。だから今日はできるだけ朋也に勉強を教えてあげるつもりが、一緒にいるだけであんまり居心地がよくて、お互い本当に幸せになってしまって……

そしていつの間にか、眠ってしまっていたのだ。

「私、寝ちゃってたんだ……」

「ああ。いつもと逆だな」

「……うん。いつもと逆なの」

「疲れてるなら、無理しないで寝てろよ。俺は大丈夫だから」

「ううん。朋也くんの方が、私よりずっとずっと頑張ってるから……」

幸せな気分のまま、しばらく朋也と瞳を合わせ、笑い合う。

「あっそうだ、私ね、今……」

不思議な夢の内容を話そうとして……

ことみは『黒幕』の正体に気づいた。

「朋也くん……もしかして、寝てる間に私のおしり、さわった？」

「そっ、そんなことするかよ……」

しどろもどろに否定する朋也。

ことみはにっこりと微笑みながら、さらに問いつめる。

「ほんとは？」

「……ちょっとだけ」

「ほんとにちょっとだけ？」

ぼりぼり頭を掻くと、朋也はやっと白状した。

「ほんとは反応がかわいいから、けっこう触りまくった。ごめん」

小声で言った朋也の顔がほんのりと赤い。

だからことみの顔も、はじめての時のように真っ赤になってしまう。

クッションをおしりに敷き直し、隣に朋也が寄り添えるように半分だけスペースを空ける。

それから、ことみはそっと答えた。

「そういうことは、起きてる時にしてくれないと、ダメなの」

Fin

CLANNAD

Written by 麻枝 准

本編では企画、音楽の一部、そして渚を始め多くのキャラクターのシナリオを担当。今回の物語は、感動し涙した人が続出だった、風子シナリオの外伝だ。

Illustrated by ごとP

病院を抜け出した先で出会った少女。彼女はいつも忙しそうに走り回り、色々な人に彫刻を配って回っている。その彫刻は、"星"のカタチをしていた。

「あの」

忙しそうに、ずっと駆け回っていた子がいた。

何度となく病院を抜け出して見つけた子。

最初は会おうと思ってたわけじゃない。適当に町を散歩するだけでも気晴らしにはなるし、なにかが見つかったりするかも、と思っただけ。

どこかに期待があったのかもしれない。

次に会ったら声をかけてみよう、とか思いながら何回かすれ違い、意を決して呼びかけてみた。それができたのに、自分のことながらびっくりもしたけど。

「えっと、ちょっといいかな」

きょろきょろと周りを見渡してから、彼女はとまどった顔をみせた。自分に話しかけられているのか、まだよくわかっていないふうに。

「きみ」

彼女は首をかしげながらも自分をさしたから、僕は頷いた。

「どなたですか」

彼女は、そう訊いてきた。当然の質問。

今まで彼女がせっせと話しかけていたような、学生じゃなかったから。

僕はこんな町の中にいながら上着を羽織っただけのパジャマ姿。

「名前？　西野」

「聞き覚えがないです」

「初めてだし」

彼女は警戒しているようだった。表情が硬い。

「これ、よかったらどうぞ。走っていて、のど乾いてるでしょ」

僕は紙パックのフルーツジュースを差し出した。

のどが乾いてる時に、フルーツジュースはどうかと思ったけど、それでも彼女に贈るものを考えたら、これがなんとなく似合うと思ったのだ。

「んー……」

悩んでいるようだった。受け取ったものかどうか。

それもそうだと思う。いきなり渡されたんだから。

「いまなら冷たいし」

「いただきますっ」

すごい勢いで受け取ってくれた。

「悪い人じゃなかったですか。風子、どこかにつれていかれて、おばさんたちと一緒に高級な羽毛布団でも買わされるかと思いました」

並んで、ベンチに腰掛け、ちゅーちゅーとジュースを吸いながら。

「みてわかるでしょ。僕みたいな子供がそんなことするはずない」

ちゅーちゅー。

「風子って、いうの？」

「いきなり名前で呼ばないでください。伊吹です」

「伊吹か……、伊吹ちゃんて、可愛いよね」

その言葉に伊吹ちゃんは飲むのをやめた。

「可愛いといわれるのはうれしいですが、年上相手にちゃん付けはどうかと思います」

「年上？　そんなに離れてる？　小学生でしょ？」

「んーっ、この人むちゃくちゃ失礼ですっ、風子、高校生ですっ」

「ええっ、うそっ、そんなっ、しんじられないっ」

「信じられないのはこっちですっ！　ちゃんと制服着てますっ！」

「いや、借りて着てるだけなのかと思って」

「もうとてもとても失礼です！　怒ったので、ジュース飲んだら帰りますっ」

ちゅーちゅーっ！

「いや、そんなすごい勢いで飲まなくても……」

ちゅ　ちゅ　っ！

「でもさ、どこへ帰るの？」

ちゅー……。

勢いがやむ。

「いつも学校へ帰っていくよね。学校に泊まってるの？」

ちゅー……。

「ね、伊吹ちゃん」

ちゅーちゅーっ

「うそうそっ、伊吹、さん」

ちゅー……。

「事情はよくわからないけどさ、伊吹さん、がんばってるんだよね、毎日。あの彫刻、いろんなひとにくばって……」

僕は意を決して、思いを伝える。

「そんなひたむきな姿を見てたら、僕は好きになってた。僕、君のことが好きだ」

伊吹さんは、ジュースを飲み終えていた。

「年上が……、趣味なんですか」

「あ、ああ……。うん、そう…」

「男の人から好きと言われたのははじめてなのでなんとなくうれしいです」

「そ、…よかった」

知らずにたまっていた息を吐いた。でも、伊吹さんはうれしそうな表情はみせず、うつむいたままでいた。

「でも……、風子、やらないといけないことがあるんです」

「それが、あの木をくばること？」

「あれはプレゼントです。あれをプレゼントして、そしておねぇちゃんの結婚式に来て、祝ってもらえるようお願いしてます」

「おめでとう」

「それは当日言ってください。おねぇちゃんに」

「うん、言うよ」

「本当ですか……？」

「うん、言う。僕が生きていれば」

「死んじゃうんですか？」

「わかんない。難しい手術をするから。お医者さんは大丈夫って言うけどさ、そんなのきれいごとでしょ」

「死んだらダメです。好きといってくれた人が死んじゃうと、とてもとても悲しいです」

「うん、だからさ……。伊吹さん、僕を応援して」

「誰だかわかんない人、がんばってください」

「西野」

「西野くん、がんばってください」

「ありがとう」

僕はそうして誰かに応援してほしかった。

必要なのは、生きたいという強い意志だというから。

だから、ひたむきな彼女を好きになって、そして選んだ。

「生きてました」

「いや、手術まだだし」

その日は、彼女から僕のことを見つけて駆けつけてくれた。

それからたくさんの話をした。

彼女が配ってるものがヒトデと知った時には大いに驚き、また彼女に失礼です、と言われた。

「応援してくれてる？」

「応援してます。それもかなりです」

「ありがとう。だったらがんばれそう」

「でも、風子にばかり頼っていてはダメです」

伊吹さんは指をぴっと立てて、お姉さんぶった口ぶりで言った。

「ダメなの？」

「ダメです」

その手を握る。でも、彼女はなんだか、悲しそうにうつむくだけだった。
「風子が応援できるのは、あと少しだけです」
「どうして……？」
「帰らないといけないからです」
「学校、じゃなくて？」
「はい、本当の居場所にです」
「遠いの？」
「すごく、すごく、遠いです」
弱々しい声。今すぐにでも遠くに行ってしまいそうな。
「だから、もう……、会えないです」
それでも言い切ってしまうと、伊吹さんはいつもの伊吹さんに戻っていた。
僕の初恋は終わった。
でも、今はまだ、続いている。
「別の夢や希望はないんですか」
「夢や希望か……」
後ろに手をついて、オレンジ色の空を見上げる。
上空に光る、宵の明星を見つけた。
「宇宙にいきたい」
「え？」
「小さい頃からあこがれてたんだ。宇宙にいきたい。そうすれば……」
手が土をつかむ。それを握る。
「僕が苦しんだり悩んだりしてることぜんぶ、ちっぽけに見えてさ。爽快なんじゃないかな」
「では、宇宙飛行士になってください。それも風子、応援します」
「はは……。じゃ、がんばらないとね」
こんな体じゃなれるはずない。そんなことぐらい僕だってわかる。
手についた土の匂いをかぐ。
僕はここに居続ける。
そしてずっと、自分のちっぽけさに気づかず、思い悩んで生きていく。
あるいは、
死ぬ。

入院生活には慣れている。
けど、変わらない風景は好きじゃない。
白い。ここは白だらけ。
ベッドもシーツもカーテンも、壁も天井も。お盆まで。
気が滅入る。

午後の検診が始まった。
今日は体も軽く、いつもより調子がよかった。
高熱が出たら一歩も動けなくなる。
だから、できるだけこうして安静にしていないといけない。
聴診器を当てられ、いくつか質問を受けたら、点滴を打たれる。
いつもどおり。
終わりがけに、今のうちなら手術もきっと成功する、と励ましてくれた。
本当かどうか、僕にはわからない。
絶対に治ると言われて、もう数年が過ぎてる。

まったく味の無い病院食を食べて、検温が終わると消灯時間になる。
昼間もずっとベッドで寝ているから、眠くなるわけがない。
僕は枕元のライトだけつけて、本を読んでいた。空想へ逃げるように。
すると目の端に何かが動いたような気がした。
白い壁に黒い影が浮かんでいた。
やがてそれは人の形となって、壁から出てきた。
「伊吹、さん……」
その名を呼んだ。
「西野くん、がんばってますか。心配だったので、きてみました」
「ああ……、うん。でも、少しめげてた……」
「そうですか。だったら、もう一度風子応援しますので、がんばってください」
僕は壁と同じ白い手を差し出す。前に進むために。
「握ってくれる……？」
「はい」
その手をぎゅっと握ってくれた。
「ありがとう……」
僕はやっぱり伊吹さんが好きだ。
なにかわからないけど、がんばってる。
もしかしたらすごく強い子なんじゃないか。
その強さと手から伝わる温かさが、少しずつがんばろうとさせてくれた。

何分くらいそうしていたんだろうか。
かばんの中に入っている腕時計のアラームが小さく鳴った。もうこんな時間。
「こんな時間に、よく忍び込めたね」
「はい、がんばりました。西野くん、心配だったので」
心に安らぎが広がる。
「でもこのことは誰にも内緒です」
「うん……」
ここは隣町で、出会った場所からも遠い。
どうやって僕を探し出してくれたのか。
でもそのことは聞かないでおこう。
聞いたら、どうしてか、もう会えなくなる気がしたから。
「寝たほうがいいです」
「うん……」
素直に頷いて、目を閉じる。
眠るまで、手を握っていてくれた。

朝七時前。外から聞こえる雀のさえずりと、廊下からひびく小さな足音たち。
起床時間より少し早く目がさめてしまったみたいだ。
「起きましたか」
「うわぁっ」
「失礼ですっ。風子、あなたが起きるまで待ってたんですっ」
伊吹さんは僕の手を握ってくれていた。
「……ずっといたの？」
「一度帰りました。学校、行く前に寄っただけです」
「そうなんだ」
がっかりした、では言い過ぎかもしれないけど、そんな感じ。
「それでは風子、学校に行ってしまいます」
「うん、気をつけてね」
「あなたも」
「あ、ちょっとまって」
出て行こうとした伊吹さんを呼び止めた。
「なんですか」
「あの……ありがとう」
「礼にはおよびません」

それからも、伊吹さんは元気づけにやってきてくれた。
朝だったり、午後の暇な時間だったり、深夜にこっそりとだったり。

開け放ったカーテンから月がきれいに見えていた。
「元気ないね」
消灯時間前にやってきた伊吹さんは、備え付けのパイプ椅子に座ったまま肩を落としていた。
いつもならとりとめはないけど、楽しく時間が過ぎていくはずなのに。
「もらってくれる人が少なくなりました……」
「そうなんだ……。可愛いのに」
「はい……、ヒトデ、とても可愛いはずです」
落ち込んだ様子で、ヒトデの彫刻を撫でる。
僕が言う可愛いのは伊吹さんのことで、そして、そんな可愛い伊吹さんからのプレゼントを受け取らないなんて、なんてひどい奴なんだと思った。
でも、それは口には出さない。
「お姉さんの結婚式っていつなの？」
「……わかりません」
「え、どうして」
「決まってないからです」
「じゃ、まだ時間あるよ、大丈夫だよ」
伊吹さんは、黙ったまま、彫刻を撫で続ける。
空気が重く、息苦しい。
あんなにがんばっていた伊吹さんが、こんなに落ち込む姿を、僕は想像できずにいた。
「手術の日はいつですか」
思い出したように、ぼそりと訊く。
「次の日曜」
「5月11日ですか」
「うん。なにかあるの？」
明確に日を言ってきたから、そう訊いてみた。
でも伊吹さんはなにも答えない。
その時、静寂を破るように、ドアががちゃりと開いた。

「あ……」
検温にきた看護婦さんだった。
こんな時間に伊吹さんがいちゃまずい。
けど、今更隠れてもらうわけにもいかず、僕はうろたえた。
ただ一言、ごめんなさい、と謝った。
でも、それに対して看護婦さんは優しく微笑んだ。
「あまり深く考えこんじゃダメよ」
そう言った。
「はい、お熱、測ってね」
体温計を受け取る僕。
隣には伊吹さんがいて……不思議な空間ができていた。
その均衡を壊さないように、僕も黙ったままでいた。
いつもより体温が高かった気がする。
体温計の電子音が鳴り、僕は脇から取り出して看護婦さんへ渡す。
「これなら大丈夫」
看護婦さんはそう僕を落ち着かせて、部屋を後にした。
僕は伊吹さんを見る。
「隠れ身の術です」
「いや、ぜんぜん隠れてなかったから……」

日曜が近づいてくる。
それは命のタイムリミットなのか、それとも新しい生活へのカウントダウンなのか、僕にはわからない。
割合でいうと、後のほうが少しだけ高いらしい。
でもそれはあくまでも他人の結果で、僕には僕だけの結果が待っている。

「今日も元気ないね」
その日の夜も、伊吹さんは、会いに来てくれた。
でも、ここのところ、ずっとふさいでばかりいる。
「風子、考えが甘かったようです……」
それだけを口にして、黙ってしまった。
僕は体を起こして、ベッドから降りる。
そして、彼女の体を抱きしめた。
小さい体だ。僕よりも小さい。ずっと年下の僕より。
「屋上にいこう。抜け道があるのを知ってるんだ」
そう誘った。

満天の星空とまではいかないけど、このあたりは明かりがほとんどないから、小さな星々まではっきりと見えた。
夜風がゆっくりと僕たちを撫でていった。
「宇宙にいってください」
真っ暗な空を見上げている僕に、いきなり伊吹さんが言った。
「はは、無理だよ」
「夢じゃなかったんですか」
「まあね。小さい頃は夢だったよ」
大きくなったらなんでもできる、と思っていた頃。夜になると、お父さんの望遠鏡で空を見ていた日々。
「お父さんと星を見ていたときだったかな、あの星に行きたいって言ったら、星の海に出るんだなって喜んでくれたんだ」
何年も前にあった、小さな記憶。
「そのとき、僕は宇宙飛行士になりたいって思ったんだ」
あの頃はずっと、星を見て、図鑑を見て、自分のやりたいことに向けてがんばっていた。
「でもこの体じゃね……」
「そんなこと言ったらダメです。やる前から無理なんて思ってたら何も叶わないです」
「そうだね……」
僕はそのひたむきさに恋したんだ。
「ねぇ、伊吹さん」
だから、今のうちに伝えられることを。
「もし、君が、僕のそばにいてくれたら、どんな不安も乗り切っていけると思うんだ。そして、その先に待つ運命も受け入れられる。だからさ、その、手術のときまで、僕のそばに居続けてくれないかな……。そして、ずっと手を握っていてほしい」
僕はその小さな手の甲に触れて、握った。
「風子は、やらないといけないことが……」
「……うん、そうだったね」
それはわかっていたことだ。彼女はずっとそれをがんばってきたんだ。
だから僕も好きになった。
彼女の手が僕の手の中で裏返る。
そして、僕の手を握りかえしてくれた。
「やらないといけないことがあったんです……。でも、それは、たくさんがんばってみたんですが……」
一度言葉を止めた。なにかをふっきるように。
「もう叶いそうもありません。だから必要としてくれるなら、あなたのためにいてもいいです」
「え……、ほんと？」
「だって、今風子をここにいさせてくれるのは、あなたです」
「うん……、僕がつれてきた。君のことが好きだから」
的はずれなことを言っただろうか。彼女に表情の変化はない。
「君がいてくれたら、僕はがんばれる」
「風子がいなくなったら、がんばれないですか」
「……うん、たぶん、ダメになると思う。……ひとりで泣いたりしてると思う」
「泣いたらダメです。泣くと悲しくなります」
「……君が？」
「自分がです」
「僕が？」
「そうです。だから泣いたらダメです」
「じゃ、そばにいてくれる……？」
「ではがんばって、いてみます」
「うん」
「なんとなく頼られるのはうれしいですから」

それからは、本当に彼女は、僕のそばに居続けてくれた。
トイレに入ってるときも。
「ダメっ、個室には入ってこないでっ」
「手、にぎれません」
「してる時は、にぎらなくていいからっ」
「そうですか」
僕は、個室へと。
彼女は、男子トイレの中で僕を待つ。
誰かが入ってきたら驚くだろうか。
いや、でも、僕はもうわかっている。
誰も驚かない。
誰の目にも、彼女の姿は映らないから。
そのことについては、僕は深く考えない。
考えちゃダメなことなんだと、どうしてか理解していた。

そして日曜日が訪れる。
前の晩からあまり寝られなかったけど、体調は悪くない。
手術用の服を着せられ、ベッドの上に寝かされたまま、僕は廊下を運ばれていく。
彼女は小走りに付き添ってくれた。
僕の手を握りながら。
手を動かすと、看護婦さんは、心配ないから、と励ましつつ不思議そうにしていた。
その目には、僕の手がどう映っているのか。
そして、ベッドは手術室へ。

手術前に何度となく聞いた説明の後、僕の口に透明なマスクが当てられた。
ゆっくりと深呼吸をするように言われる。
僕はこっそりと、その"ふり"をした。
頭にもやがかかったようにはなったけど、まだ手にある温かさははっきりと感じられた。
彼女はずっと僕のそばにいてくれる。
手をつないでいてくれる。
次起きた時も、同じでありますように。
僕は祈る。
そして、今度は本当に深呼吸をした。
遠くなる音と意識。
その向こうで声が聞こえ続けた。
きゃーっ、おなか切ってますっ——
かなりきもいですっ——
——なんかどくどくしてますっ——
うわぁ、それも切るんですかっ
——とてもいたそうですっ——
——血だらけですっ
——風子、たおれそうです——
——でも、約束です——
風子、ここにいますから
——西野くん、がんばってください——

うん……がんばるから……。

夢の中で、僕は誰かと一緒にいた。
僕と同じ歳ぐらいの女の子だ。
僕はその子のことが好きだった。
そして、彼女は僕と一緒にいてくれると言ってくれた。
手をつないでくれた。
頬が思わずゆるんでしまうような、そんな幸せな夢だった。

夢が覚めた時、僕はひとりでいた。
機械がいっぱい置いてある部屋で。規則正しい時計のアラームみたいな音がひびいていた。
お腹がすごく痛い……。のどにつながってるチューブがうっとうしい……。
おかげでぼんやりしていた頭がはっきりとしだした。
そうだ……。
手術をしたんだ。
終わったんだ。
でも、結果はまだ出ていない。
それはもう少しかかるんだ。
ちゃんと、正常な動きをするか。本当に自分の体が治っていくか。
今日から僕はその不安に怯えていくんだ。
もう一度、眠ろう……。

次の日、僕は新しい個室に移された。
担当のお医者さんと話をした。
「今必要なのは、君の生きたいという強い意志なんだよ」
強い意志……。
それはどこから生まれてくるんだろう。
なにを根拠に生み出せばいいんだろう。
生きるってどういうことなんだろう。
僕はただ、死にたくないだけだ。
それが生きる希望になるんだろうか。
僕は、体が弱くて、スポーツはできない。
頭だってよくない。
絵がうまいわけでも、作文が得意なわけでもない。
好きな音楽もない。
僕はただ『生きていく』だけなんだ。
そんな中にどんな希望を見いだせるだろう。
だったら……僕はここで死ぬんだ。
可能性の数字が脳裏に浮かぶ。
その片方は、僕のような人間で埋め尽くされているんだ。
生きる希望を持てなかった人間に。
なら今の僕は、ただひたすら死へと向かっているだけなんだ。
その歩みは変えられない。
じゃあ、なんなんだ、この無意味な時間は。
涙があふれる。
恐いんだ。
死にたくない。でも、死にたくないだけじゃダメなんだ。
でも、なにもないんだ、僕には……。
目を閉じる。涙が押し出される。
「うあぁ……」
声を漏らして泣く。
死にたくない。それだけなんです。
ことっ、と音がした。暗闇の中で。
目を開ける。視界の端、白い壁になにかがあるのに気づいた。
目だけを動かして、それを確認する。
星形をした、木の置物。
それが壁に取り付けられていた。
なんだろう……。あれは。
親はあんなことはしない。
昔からここにあるものなんだろうか。
よくわからない。
それを見ていると、胸の奥が痛んだ。
でも、共にあるのは、温かさだ。
この矛盾した気持ちはなんなんだろう。
それを考えていたら、涙が止まっていた。
僕はその温かさにすがるようにして、また眠った。

点滴と注射、大量の飲み薬な毎日。ひじの内側は青くはれ上がり、今では太ももの内側に点滴を打つこともある。
チューブがついたままのお腹はじくじくと痛みが走り、下がらない熱で口の中が熱い。
点滴の針が血管にあたって痛いけど、左手に添えられていたはずのコールボタンがなかった。手元で探しても見当たらない。
恨み言を何度も、何度も口の中だけでつぶやく。声に出すのも辛い。
やっとのことで首だけを上げると、ベッドからぶら下がってるコードが見えた。
それに、パイプ椅子の上で、すまし顔をして座っている星型の彫刻。
——最初は見間違えかと思った。
元あった場所とは別の位置に星があった。
驚いて振り返ってみた。体が悲鳴をあげたけど気にしていられない。
すると、元のは同じ場所にあった。
ふたつになったんだ。
どうして？
よくわからない。
それはまるで、弱音を吐いた僕を元気づけるように。

星は一日ずつ増えていった。
僕はそれを眺めて過ごした。
温かい気持ちになる。

「あら、どうしたの？　これ」
椅子の上にあった彫刻を、看護婦さんが手にとった。
まだちゃんとしゃべられないので、僕は手元にあったホワイトボードに書いた。
『おかあさんがもってきた』
とっさについた嘘。本当のことを言って信じてもらえないのもいやだし、捨てられるのはもっといやだった。
「そうなの。学校の友達が作ってくれたのかな？」
『たぶん』
「早く治して、お礼言わないとね」
看護婦さんは、そっと頭を撫でてくれた。

親には、逆の嘘をついた。看護婦さんが持ってきてくれたんだと。

熱にうかされていて苦しんでいた日にひとつ。
痛み止めが効かなくて寝られなかった日にひとつ。
薬が体にあわなく、全身がむずがゆかった日にひとつ。
少しずつ、僕をはげますように星が増えていく。

気づくと、それは、宇宙になっていた。
星の海。
僕はその中に浮いていた。
いつかそれを願った気がする。
あれはいつだったろうか。
小さい頃だ。
僕は宇宙にあこがれていた。
いつだって星空を見上げていた。
遠いその場所に思いを馳せた。
手を伸ばせば届くのだろうか。
届いた。
それを手に取る。
それは、僕の希望だった。

熱が収まり、チューブが抜かれる。
傷口がふさがり、重かった体が軽くなっていく。
朝、目がさめると、昨日より良くなっていく僕がいる。

退院の日。僕は荷造りをしていた。
親に持ってきてもらった大きな鞄に、ひとつずつそれらを詰めていく。
ベッドのまわり、いつのまにか椅子の上で増えていたもの。
かばんを背負い、病室を出ようとすると、上の方にひとつだけ星が残っていた。壁に取り付けてあったやつ。
いつのまにかそこにあるのが自然になっていた。
椅子に乗って取ろうとして、手を滑らせた。星は甲高い音を立てて、廊下まで転がっていく。
慌てて廊下へ出ると、それを拾い上げる女の人がいた。
「あ、すみません」
その人はそれをじっと見つめていた。
「これは……、なに？」

「え？　えっと、星」
考えた後、そう答えた。
「そう……、たくさんあるのね」
よい、と返してくれる。
「自分で彫ったの？」
「……いえ、全部もらい物です」
「そう、熱心に回復を願ってくれた人がいるのね」
「ええ……。ずっと、僕を支えてくれてたんです。これがなかったら、僕は、たぶん負けてた……。今、生きてなかったと思う……」
僕は言葉を続ける。
「その子には一度も会えなかったけど、この病院のどこかにいるのかな……。ただ、その子のイメージだけはあるんです。可愛い子で、僕より小さくて、でも年上で……。それで、とても強いんです」
「そう……」
「あの、よかったら、これひとつどうですか。もしあなたの大事な人が入院しているんだったら、これ、お守りみたいなものだから……」
「いいえ」
その女性は優しい表情で首を振った。
「それは、すべて、あなたのものよ。大事にしてあげて」
そっと、僕の手を包むようにして、押し返してくれた。
そして、女性は、じゃあね、と言って立ち去った。
その背中を見送った後、僕も歩き始める。
たくさんの『希望』を抱いて。

「ねぇ、祐くん」
「ん？」
「今、ちょっとすごい出会いがあったんだよ。聞いてくれる？」
「ああ」
「じゃあ、いつものパン、食べながら聞いて。今、お茶入れるから」

「――この子と一緒にね」

――Jin

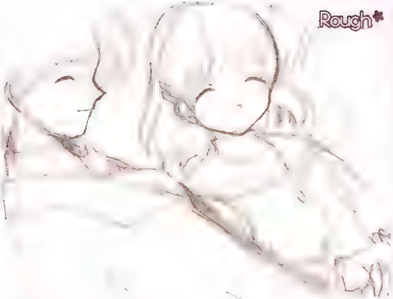


原画設定集



古河渚

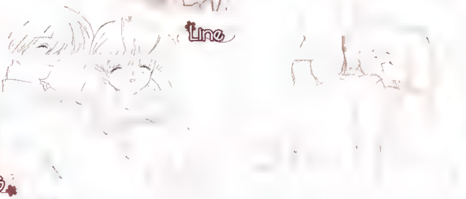
Rough





共に手を取り歩んでいくふたり。だが、そんな朋也の口元と渚の肩に妙な物体が　　（笑）。

Line





CG

Rough





Line



「CLANNAD」のラストを飾ったイベント絵。ラフからも、ふたりの幸せな気持ちが伝わってくる。



CG

藤林杏・藤林椋





中庭でのお弁当のシーン。ゲーム中で唯一ふたりが同じCGに収められた、ある意味貴重な一枚。





宮沢有紀寧







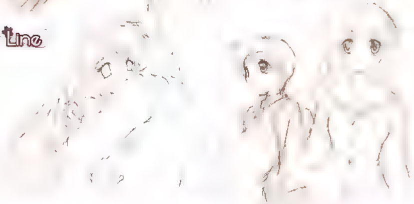
朋也からの突然のキス！　まるで事態を把握できてない、有紀寧のキョトンとした表情がカワイらしい。

坂上智代

Rough



Line



CG



智代ルートのクライマックス。よく見ると、吐く息の白さまでしっかりと描かれている。

一ノ瀬ことみ

Rough



Line

CG



ことみを優しく抱き寄せる朋也。完成CGでは彼女の髪に隠れていた手も、ラフではバッチリと確認できるぞ。



相楽美佐枝



ラフでは、完成CGよりもアップ気味に描かれていた美佐枝。このまま進めてほしかった男性ユーザー多数!?

CG

Rough



Line



Rough



伊吹風子・伊吹公子



Line



目が付いているうえにタバコをくわえたヒトデ　ありです。おそらく風子も、そう言うハズ!



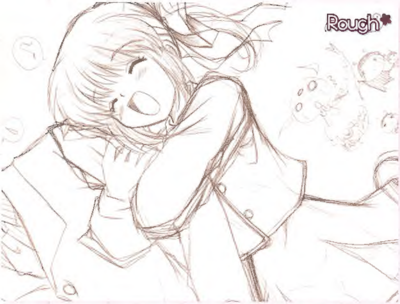
CG





春原芽衣

Rough



Line



CG



ウキウキ気分の芽衣と100円ショップでお買い物。後ろに見えるのは店の商品……ではないですよね？（笑）



春原陽平



芳野祐介



柊勝平

古河早苗



Line

Rough



CG



塾の教え子たちに慕われる早苗先生。彼らの楽しげな雰囲気が、見ているこちらにまで伝わってくるようだ。



古河秋生

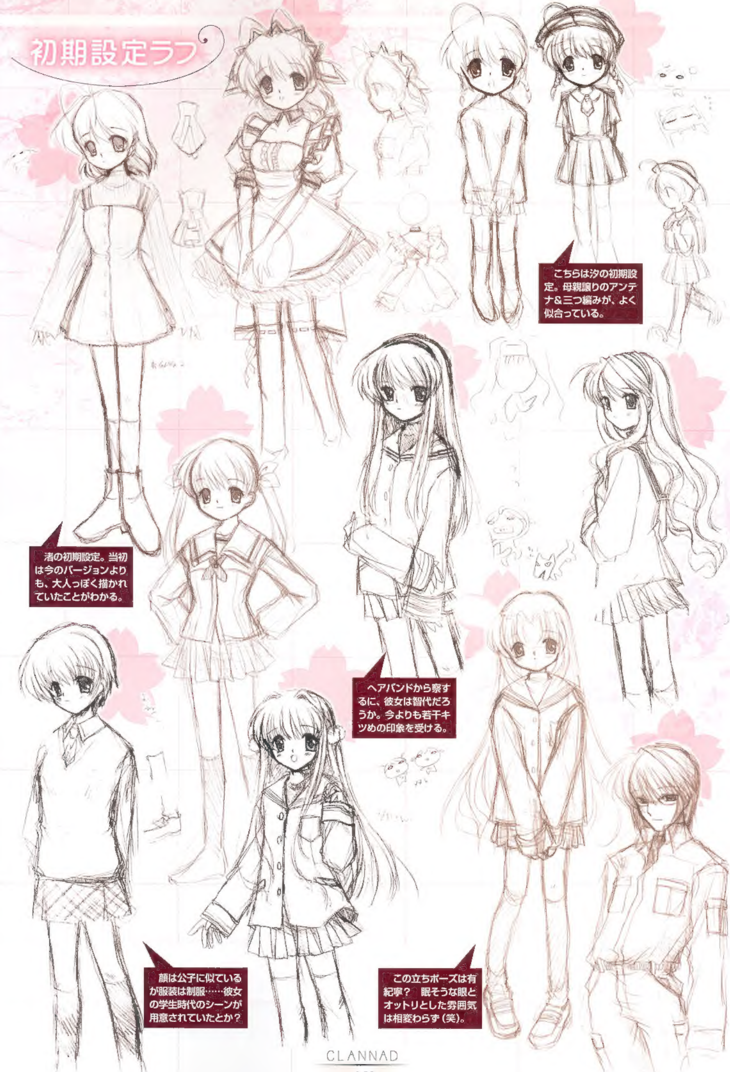


幸村俊夫



岡崎直幸

初期設定ラフ



こちらは汐の初期設定。母親譲りのアンテナ＆三つ編みが、よく似合っている。

渚の初期設定。当初は今のバージョンよりも、大人っぽく描かれていたことがわかる。

ヘアバンドから察するに、彼女は智代だろうか。今よりも若干キツめの印象を受ける。

顔は公子に似ているが服装は制服……彼女の学生時代のシーンが用意されていたとか？

この立ちポーズは有紀寧？　眠そうな眼とオットリとした雰囲気は相変わらず（笑）。

CLANNAD
-クラナド-

ビジュアルファンブック

2004年10月12日初版発行

発行人	浜村弘一
編集人	青柳昌行
編集長	大村正明
副編集長	羽田野裕司
アートディレクター	黒澤充
デスク	熊田亮
担当編集	石川亮一
制作スタッフ	田中耕平
業務部	青木孝道／黒井伸哉
発行所	株式会社エンターブレイン 〒154-8528　東京都世田谷区若林1-18-10 TEL：03-5433-7850（営業局）
監修	株式会社ビジュアルアーツ
デザイン	有限会社電撃企画
編集協力	『CLANNAD ークラナドー』開発スタッフのみなさん／ 吉野友規／井口竜規／石黒和昌
表紙イラスト	樋上いたる
印刷	凸版印刷株式会社

ISBN4-7577-2025-4
Printed in Japan

Presented by
KEY & TECHGIAN STYLE





enterbrain TECHGIAN STYLE